

自立した女と男を 人間らしい生活を 差別のない社会を
育み 創り出す

新しい家庭科

We

ウイ

逐次刊行物
 平成3年3月17日
 国立婦人教育会館
 婦人教育情報センター



4

特集 「教師」という仮面を脱ぐ

1991

季節のうた

仙田敬子



街

遊蝶花*
雲のあそびに
加はれり
(*三色草, パンジー)

特集 「教師」という仮面を脱ぐ

インタビュー 俵 萌子さん

—生き方のモデルになるような

輝いている人が教師の中にいてほしい—

(インタビュアー・半田たつ子)

●二重の仮面

—どうして先生は仮面を脱がないのか

齋藤次郎

10

●さよなら 仮面

●仮面を脱いだときのセンチたち

佐藤通雅

14

●親が教師に求めるもの

名和道子

18

●私の教員採用試験体験

田中純子

22

●本音が話し合える関係をつくらう

星名 綾

24

●学校と社会の常識は違うのか

西本和代

26

●教師のホンネを出そう

納巳孝志

28

●アンケート — 中学教師の意見から —

Weの読者の意見

30

●教育の現場

村田尚子

48

●湾岸特集

わたしの一九九一年一月十八日

42

●各政党に聞く会に参加

金田富佐江

52

●各政党に聞く会に参加

青木喜代江

54

情報 中教審、学校制度に関して 審議の経過報告を提出

連載

荒野のバラ 「砂漠の風」にそよぐ葦

田中裕一 60

家族と家庭科 中学校最後の「家族」

酒井はるみ 64

男性学への契機／魔男の宅急便

諸橋泰樹 66

楳原の夢 静謐ということについて

武田秀夫 68

あかきたな —木よう日でよかった— 福田 緑・加藤由美子

山本謙吉 70

買って来て使う 箒

半田たつ子 73

波 アッシュ大統領に手紙を!

74

○ひと 福田 緑さん 59

●私のすすめる一冊 58 ●イキイキぐるうぶ 72

●Weになんでも言おう なんでも聞こう 76

●編集室からあなたに 79 ●わたくしからあなたに 80

●Weの読者会だより 82 ●泉 83 ●十字路 84 ●アンテナ 86

●編集後記 88

表紙／長野ヒデ子 季節のうた／仙田敬子
特集イラスト／降矢奈々

俵 萌子さん

インタビュー

—生き方のモデルになるような
輝いている人が
教師の中にいてほしい—

・インタビューー 半田たつ子

俵さんは今、焼きものに夢中。個展で作品に接した人々は、彼女の内面世界の豊かさと、その表現力に驚嘆した。もちろん私も。

お父様のふるさと赤城の森に立つ夢工房は「小鳥や樹を愛する人々とそこで絵を描いたり、お茶碗を作ったり、共に本を読み学びたい」という、永年の夢を叶えた場。ピカソやルノワールはないけれど、いつかこのギャラリーが、小さな美術館に成長する日を夢見ているという俵さんは、そう、ロマンチスト。

多数の著書の中の一冊の書名のように、過去でなく未来を見れば、私たちは『今日が一番若い』のだから。



■プロフィール

1930年、大阪市生まれ、サンケイ新聞記者の時『ママ日曜ありがとう』でデビュー、作家・評論家として活躍中。

81～85年、日本初の準公選で、東京都中野区教育委員を務めた。

85年より作陶をはじめ、熊本県高田焼・酒井雅女氏に師事。90年、群馬県赤城山に夢工房・萌子窯を新設。12月銀座・三越で初の個展。

■教師と仮面

——四月号は、「教師という仮面を脱ぐ」というテーマにしました。東京の公立中学校教師を二十年以上してこられた方が、このまま教師を続けていった時の自分がイメージできないくなって辞められたんですね。その方が、「大学を出てすぐ生徒の前に立った時、自分に力量がないから、とりあえず教師という仮面をかぶった。やがて力がつくとともに、その仮面を脱ぐはずだった。ところが仮面は肌にはびつたりと貼り付いて、取れなくなってしまう。そのことが恐ろしくてならなくなったのだ」と言われたんです。この言葉が胸に響いていたことも、このテーマを掲げた理由でした。

「教師の仮面」って何だろう？ それはどうしたら脱げるんだらう？ こんなことを考えたくて、お話を伺いに来ました。

俵 その問題をテーマにするのは、大変よいことだと思われけど、とても難しいことでしょうね。私が教育委員を一期四年で辞めたということの中には、この私ですら、あの世界の中にもう四年いたら、ある種の仮面をつけざるを得ないという雰囲気があるということ、直感したのね。その仮面をもしかぶってしまったら、私の本職は「もの書き」ですから、「もの書き」は当たり前感性をもっていなければならぬ。それなのに、あの仮面を強要する世界にもう四年間いたら、私の中のごく当たり前の感性が摩滅してしまう。その

恐ろしさを察知して逃げた、というところもあるんです。正直に言ってしまうえばね。

私はシビリアン・コントロールとして教育界に入ったのだから、あくまでシビリアンでなければならぬんです。私は地域を大事にする人間だから、地元の飲み屋さんに仲良しと一緒に行って、カラオケで歌ったりもしていたんです。ところが教育委員になった途端に、昨日までと同じように、飲み屋さんに行くと、周りにいるお客さんたちが「教育委員がこんなところで飲んだり、騒いだりしていいのオ」という言い方をするの。カラオケで歌えば「教育委員が、そんな歌歌っていいのオ」と、こうくるわけ。周りから枠にはめられる雰囲気かひたひたと迫ってくる。

教育委員会の雰囲気も、ある種の仮面を被っていて、当たり前前の言葉で語ることができにくかったんです。それが私自身を自己規制していくわけです。例えば、あの頃、私が非常に恐れたのは、フォーカスされたらどうしよう、ということだったんです。私は車の運転免許をとりたかったけれど、教育委員の間は運転を習うこともできませんでした。万一、事故でも起こそうものなら、教育委員のクセに何だ。そんな人間が教育委員をしている中野区の準公選とは何だ、ということになるでしょう。そうしたら中野の準公選に希望の光を見いだしている全国の方たちを裏切ることになる。

たまに親しい男友達と、一杯飲みたいと思ったとしても、それがフォーカスされた時に、「教育委員が何とか、かんとか」と出てしまう。私は千軍万馬のマスコミ人間ですから、私自身は不愉快でも耐え抜ける自信はあるんだけど、そのことで中野に灯を感じている全国の人々を、裏切ってはいけなと思っています……私生活まで規制されてしまう、ということがあるわけですね。

自分の子供の問題も、私は正直に語ったり、物に書いたりしてきたにもかかわらず、教育委員になった時に、「教育委員の子供がこういうことをしたと出てしまうのではないか」とか、何時もそれを感じていたのね。それが習い性になっていくと、外見だけを整える——教育界の人間としての体裁を整えるだけのあさましい人間になっていくような気がして、こわかった。四年が私の抵抗できる精一杯の期間だということだったのね。「教育委員が」っていう言葉を「教師が」っていう言葉に置き換えたら、すべての教師にあてはまるんじゃないかな。四年はおろかね、十年、二十年、三十年、四十年ね、そういう枠の中に自分をあてはめて生きてしまった人間が素顔を失ったとしても、私は驚かないし、むしろ失わなかったら、その方が稀有の例だと思う。

■日本の社会における教師

——全くその通りだと思うけれど、それはどこから来ている

と思われませんか？

儀 日本の社会の中に、過大な期待というか、強制があるんでしょね。規制でしょうね。プレッシャーを押し付けているんでしょね。教師が何か事件を起こすと、マスコミから：「マスコミイコール世間ですけれど：「教師がこんな事件を起こすことをどう思いますか」ってコメントを求められるのね。教師と警官に世間は特に厳しいのね。私は教師や警官は自分に対して、他の職業よりも少しだけ厳しい自律を持つてほしいとは思いますが、そんな時かえって聞き直って、「教師も普通の人間です。むしろあなたの方が、教師を普通の人間として扱わないところに問題があるんじゃないですか」と言い続けてきたんだけど、それが世間にはなかなか分からないというか、納得しないというかね。

——私も福井県で高校の教師をしていましたでしょ。土地が狭いですよね。日曜・祭日には解放されて、親子連れで公園に行ったり、買物したり、食事したりすると、必ずどこでも生徒に会うんです。次の日には、先生がどこに行ってる、あしてこうして……ということがバァッと広がっているんですね。月曜日から土曜日まで学校の生活はおろか、休日も、住んでいる地域はおろか、少し離れた所の観光地でも都市でも、学校の先生という身分から降りられないというのは、息苦しく窮屈なものです。

倭 そうでしょう。

——東京は人も多く、隣は何をする人ぞ、の世界だから少しは違うんじゃないかと思ったのですが…。

倭 変わらなかったでしょう？

——そう、先程の話は、東京の先生から聞いたのですから。土地が広いとか狭いとかではなく、本質的に教師が一人の人間であろうとする思いと、世間が教師に押し付けるものとのギャップに変わりはないということですね。

倭 私が中野区で教育委員をしていたころは、中学が荒れていましたし、もっと地元で先生方が住んで下さったらいいのではないかと思った。住宅事情が悪いですから、教員の宿舎を用意したらどうかと提案したんですよ。そしたら、教師たち自身からの大反対にあつたんですね。なぜイヤかといつたらね。今おっしゃったような理由ですよ。だから教師が地域に住んで、親や地域の住民と一緒に、子供たちを育てる、なんてきれいごとを言ってみても、教師は地域を拒否しているわけですよ。ちっともうまくいかない(笑)。これはどちらから解決すべきかという、世間のほうから改めるべきだと思ふんですよ。

——そうですね。アメリカなら教師をフリーストネームで呼んで、もっとざっくりばらんな対応をしますからね。

倭 アメリカの社会では、教師の地位が日本より相対的に

低いですね。うちの子を教えることを職業としている人、という程度ですからね。儒教文化の中で、「三步下がって師の影を踏まず」という伝統を持ち、「師」と呼ぶ日本とは違いますね。そのことはアメリカでは、教師のなり手がなかつたりしているんだけれど…。その点、日本ではなかなか優秀な方が教師になっていますが、普通の人間として生きられないという妙な土壌があるわけでしょう？

あなたの一族に教師っていませんか？

——私の場合は、親から上にはいなくて、亡くなった夫と私の妹だけですけれど。

倭 私も実は教師の子供で、実にイヤな思いをしたの。いやらしいことですが、学校でちょっと勉強ができたと思います。すると教師の子供なんだから、できて当たり前っていわれるのね。できが悪いと、教師の子のくせになってね。これは子供心にすごく理不尽なことだと思っていたし、私の父もそれを気にして生きざるを得なかったのだなあと、思ったことがあるのね。

私が十七、八の反抗期の頃ですよ。化粧してどこかへ出かけて夜遅く帰ったことがあるのね。そしたら父がひどく怒ったんですが、その時の言葉が「世間の目ってものがあるだろうが！教師の家庭で！」だったんです。私はすごく憤慨して、「何よ！世間は関係ないわよ！」ってね、大喧嘩した

ことがあるんです。そんなこともあって、私は教師の子供であることよって、本当にイヤな思いをしてきた。だから、教師にはなりたくない、選択肢の中に入れなかったのね。教師本人ばかりでなく、家族まで、不自由な思いをして生きているわけよね。

——私の姑も、孫に「先生の子やから、そんなことしたらアカン」と、しつげにまで、「先生」を利用しましたね。だから娘が大学生になったころ、「私は小さい頃、何故かわからないんだけど、イイコにしていなければいけないって思いこんでいた。今、我ながらのびのびしすぎていると思うのは、あの頃の反動かもしれないわ」と言ったことがあります。

儀 右翼が日教組を目の敵にしているでしょう。それは教育というものの力の大きさを彼等も知っているからではあるけれど、私は「日教組粉碎!」とガンガンがなりたてて、あの車が通るたびに、世に組合はゴマンとあるのに(笑)、なぜ彼等は日教組をあれほど敵視するのかなあって思うのね。そして無論、政治的な背景があることを承知した上で言うんですけれど、「教師は労働者であってはいけない」とか、教師とか、教育というものに対する特別視というものを感ずるのね。

——ほんとうにそうですね。

また別の方ですが、新設の高校で若い同僚たちと学校の基礎をつくるために、あれこれハリをもってやってきた。とこ

ろが伝統のある学校に移って、どうもなじめない。学校のありように何の疑問もない教師たちはもちろん、フランクに生徒と語り合おうとすると、生徒が戸惑った態度を示す。他の教師のように、いかに先生ぶった態度で接すると、生徒はむしろそのほうが落着くらしい……こんな話も聞きました。

儀 伝統校に行く子供たちが、そういう体制的な価値観を親からがっちり受け取っている、ということはあるでしょうね。だから体制的な態度を取ってもらったほうがしっくりといくってことは分かりますけどね。

■教師は特異な世界に生きている

儀 さっき私は、世間が教師を狭い枠に閉じこめるという被害者としての教師を語ったんですけどね。そのことが逆に教師を防衛的に結束させている、ということを感じるんです。弁護士・医者にもその結束の強さを感じますが、つまり特権意識を持っている人たちですね。

例えば、何か事件が起きた時、教育委員会を含めてですけれど、学校というものは、生徒を切り捨てて、教師という身分をお互いにかばい合う。これは組合も同じ。そういう図式を見た時に、世間も世間かもしれないけれど、世間から特別視される教師が、自己防衛本能の塊になっていって、世間に通じる常識もかたぐり捨てて行く。それは世間が特別視することと無関係ではないと思うのね。

——そうですわね。

俵 だから、これは大変大きなマイナスを生みだしているんじゃないかなあ。また別の問題になるけれど、教師ってね、世間知らずとも言えるのかもしれないけれど、もうちょっと違つて、根の深いものがあると思うの。教師集団には、言葉に出して言いにくい独特の雰囲気があるんですよ。生意気のような、礼儀知らずのような、ごうまんのような、青くさいような、子供っぽいような、何とも言えない雰囲気があるのよ。それは修学旅行や移動教室に一緒に行つても、研究会に行つても、何時も感じていたのね。一人前の社会人になりきつていない集団という感じね。

何だろう。何だろう、つてずっと考え続けていたんですけど、それは教師という職業の半ば宿命的なものじゃないかなあつて気がしたのね。普通の社会人というのがいいのかどうかは分からないんです。でも、学校を出て、職場に入りますと、そこでは一番年下なわけですよ。いい意味でも、悪い意味でも、背伸びしながら社会人になつていこうとするんですよ。そして理不尽だと思いがら四方八方にお辞儀しながら成長していくわけです。

ところが、教師という職業は、教室にいる限りはそこで最年長者なんです。そして自分より何も知らない人たちを相手しているんです。わずか二十歳そこそこの若者が、頭を下

げまくりながら成長していくのと、頭を下げてもらう中で生きていくのでは、大変な違いがありますね。人間は二十六、七歳まで変容していくものだから、どういふ環境の中に置かれたか、ということが、その後のパーソナリティに影響するんじゃないかなあ。

——私も教師になつて何年かした時、妹に「お姉ちゃんは私に向かつて論ずような言い方をする。先生臭い」つて言われ、「ええっ」つて驚いたことがあるんです。恐ろしいものですね。「ちょっとおかしくなつているんじゃない？」と言つてくれる人が周りにいるとか、教師をしている自分を、もう一人の自分が客観的に見ているとか、余程自覚的でないとか。

俵 いやあ、人間は弱いものだから、それだけでは駄目だと思ふのよ。教師という職業がもっと開かれていて、社会人先生とか、違う職業で育つて来た人が職員室の中にいて、教師集団の特異な体質を薄める働きをしないと、ね。

■生き方のモデルとしての女教師

——確かに大学を出てから、ずうっと教師をしてきたという人より、他の仕事に就いていて、何か思うところあつて、働きながら教師の資格を取つたという方のほうが、幅が広く人間的にも魅力がありますね。それに私が学んだ頃には、もっと個性豊かな名物先生がいらっしゃつて、今ほど、均質化していなかつたと思うんですが……。

倭 そうかなあ。私の思い出の中では、似たり寄ったりのような気がするけどなあ。

——女学校で西洋史を教えて下さった女の先生は、教科書など開きもせず、すべてエピソードで綴る長い物語で、歴史を語って下さった。私たちはただうっとりとして聞いていたんです。エリザベス女王が夫君と喧嘩をして、夫君が部屋に閉じ籠ってしまった。反省した女王が、ドアをノックする。「誰?」「イギリス女王です」しらんぷり。何度かこれを繰返し「エリザベスです」と答えた時、やっとドアが開いた。というような。

また英語の先生が、東京女子大を首席で卒業されたとの噂高い、皆のあこがれの的で、英語の歌をたくさん教えて下さいました。授業は活発な会話で成立っていたのですが、いい答をすると「プレッツライト ベェリィグッド」と先生もうれしそうに言って下さるんです。「ベリィグッド」「グッド」と続くのですが、「プレッツライト」を言っていたら、張切って勉強した楽しさは、忘れられません。

倭 なるほどねえ。そう言われてみれば、数は少ないけれどいたわねえ。今は初任者研修でしめつけられるとか、もつと条件が悪くなったけれど、小粒になって、型にはまった人ばかりになったわね。

——生徒たちが、あんな先生になりたいとか、魅力的な生き

方だと憧れるようなら、仮面なんか被らなくても、素顔で生徒に向きあえるのにな、って思うんですが。

倭 そうなのよ。私は、特に女の先生方の役割って大きいと思うのよ。私はこの間、ある雑誌から自分の生き方を決定したような恩師について書けて言われてね。キリキリ考えて見たんだけど、思い浮かばないのね。これは私がよほど恩知らずなんかなあと思ったりしたけれど、ね。考えてみると、小学校一年とか、五、六年の時とか、重要な学年は男の先生だったのね。女学校に入ったら、ほとんど男の先生で、女の先生は裁縫と料理と体育ぐらいでね、私は裁縫や料理は全然好きじゃなくてね。教科がきらいだから、先生も好きになれなかった。私の感受性の最も鋭い時代に、生き方のモデルになるような方がいなかったんです。大学では、男女共学で教師は全員男だったんです。だからどうしても思い浮かばないのよね。

必死で考えて、やっと思いついたのは、大学ではフランス語をやったのですが、日仏学院というのが京都にありまして、そこでジョルジュ デュアメルというフランスの小説家を招いて講演会があったのです。その時、デュアメル夫人が一緒に来ていて、私たちの感覚からすれば、ただおつきとして来ているだけなのに、司会者が、「夫人は有名なコメディランサーズの女優さんです」と紹介して、デュアメル氏の講

演の後、詩の朗読をしてくれたの。それがまあ、表現力豊かでエレガントで、チャームングで、私なんか震えるほどの思っていたのね。強いて言えば、たった三十分詩を朗読してくれたジョルジュ・デュアメル夫人が「あんな女になりたい」と思わせてくれた唯一の女性であって、そういう人は、教師の中にいなかったんですよ。寂しい悲しいことですよ。ねえ。

それで私は頼まれた原稿に、「悲しいことに、私は生き方に決定的な影響を与える恩師に出会わなかった。私の生き方を決めたのは、与謝野晶子であり、キュリー夫人であり、『第二の性』を読んだ時に、サルトルとボーヴォワールのような男女の関係でありたいと願ったことであり……人間形成のある種のモデルにできた人物は、書物の中にしかいなかった」と書いたわけです。

やっぱり、これからの女の子たちのために、生きたモデルになるような、生き生きとして、個性的で、輝いているような人が、学校の教師たちの中にいてほしい。原稿をそう結んだんですが、仮面を貼りつけた教師では生き方のモデルを発見できないと思うものね。

——本日は今日、俵さんに、俵さんが出会い、影響を受けた教師があったら、そのことをお聞きしたいな、って思っていたんですけど……。そうだったんですか。

俵　　そうよ、男社会の中で、女であることのある部分を犠

牲にして生きている教師とか、女特有の教科の中に押込められて、窮屈に生きている教師とか、私の時代は、戦争のせいもあるけれど、女教師にモデルを発見できなかった。

——確かに、あの頃の家事・裁縫の先生はつまんなかったですよ。私がつまんなかったのも、西洋史の先生であり、英語の先生であって、女特有の狭められた道を選んだ方ではなかったんですから。Weの読者である教師たちが、夏のフォーラムを大変楽しみにしているのも、ここで市民感覚を取もどすことができる、色々な立場の人たちに出会える、ということなので。教師は、もっと学校から離れた場でのいい出会いを持たなければなりませんね。

お風邪で体調のよくない中、インタビューにに応じていただき、ありがとうございます。

昨年十二月に発表された中教審の「審議経過報告」と、俵さんを代表にがんばってきた女性による民間教育審議会「教育改革提言」との対比についても、話が及んだが、スペースの関係でお伝えできずに残念。

福井県の全校生徒数六十名という中学校を訪ねて、教師と生徒、教師と親のコミュニケーションが実によくできてくるのに、すっかりうれしくなった、という楽しい話題にも花が咲いたことを付記したい。

「教師」という仮面を脱ぐ

二重の仮面

どうして先生は

仮面を脱がないのか

● 斎藤次郎

1

学校の先生は「仮面」をつけている、という。いや、先生に限らずだれだって、仕事や立場に応じてそれぞれの仮面をつけているものではないだろうか。ありのままの自分をありのまま衆目にさらして生きるのは、たやすいことではない。

「子どもらしさ」を強要される子どもにしても事情は同じだろう。ちょっとした幸運が重なって、三日ずつ三回、一月おきに小学校の教室を訪れる機会を得たが、ぼくにとっぴちばん印象深かったのは、授業をはじめとする「公的」な時間と、休み時間や登下校時の「私的」な時間とで、子どもたち

の見せる表情や態度があまりにも違っていることだった。「公的」な場面では仮面をつけているのだ、という気がした。

仮面の効用は、本当の自分を隠し、別の人格になりすますことにある。意識的につけることもあるが、そうと気づかぬままに愛用している場合だってありそうである。はじめは意識していても、仮面に憑ひより憑りされ、人格変換を忘れてしまう人もいるに違いない。仮面は必ずしも着脱自由ではない。

子どもたちは、それでも実にこまめに仮面をはずす。まだ初心者だから仮面をつけているのが苦痛なのだろうか。そして、着脱がすばやく、ひょうきんなありのままの姿に瞬時に転換できる子が、クラスの人気者になっているようであった。もっとも、そういう子は授業がはじまっても仮面をつけるのを忘れて、失敗することもあるのだが……。

先生も子どもの眼から逃れれば、仮面をはずして本来の自分にもどれるのだろうか。職員室はしかし、また別の仮面を必要とするようなプレッシャーのかかるところだ、という現場の声も聞く。確かに先生同士が、子どものいないところで

も互いに「先生」とよび合っているのを見ると、先生は、仮面をつけ続けることにあまり抵抗がないのかも知れない。

学校というところは、子どもたちの日常性の延長ではなくて、特別な意味と役割をもつ特殊な空間だ。子どもをしめ出したたり、押しつぶしたりする校門が、その重々しい境界を象徴している。特別の意味と役割とは、いうまでもなく「教育」だが、そのためにさまざまな目標やねらいが設定され、子どもはそのすべての面で、「向上」や「発達」が義務づけられる。勉強のわかる、わからないは成績の「よしあし」で示され、生活態度も、名札のつけ忘れまで点検され、これも「よしあし」で評価される。日常的な生活には、よいことも悪いこともごちゃごちゃと混在し、そういう効率的、あるいは倫理的な価値基準よりも、快・不快の原則の方が優先される。気持ちよくくらすためには、だれしもお互いにそれなりに努力し、我慢もするが、それはしかし、マニュアルに基くものではない。もっと自然な、したがって「いいかげん」などところも多い調整能力を、お互いに発揮するのである。

学校では、すべての行為が「教育的」に位置づけられ、評価の対象になる。給食も掃除も、特別教室への移動のしかたまでそうなのだ。これには、かなりの無理がある、とぼくには思えた。そしてその無理が、先生にことさらに「先生らしさ」を求め、仮面を強いるのかも知れない。

2

先生という仮面は、まず教育に携るものとしての自己呪縛から始まるのではあるまいか。子どもを教育するというのは責任の重い仕事であり、先生はそれにふさわしい人格者でなければならぬ——こんなふうに考えたら、ありのままの自分をありのままにさらすというにはいかならう。

教育というコミュニケーションは、教える内容や方法、あるいは時間配分まで、教える側に決定権がある。そして評価権も教える側に独占されていて、一方の当事者である教わる側にはほとんど何の発言権もない。こういう権力的構造では、学校の先生は子どもに対する支配力を持たねばならない。その仮面は、支配者としての力を誇示するものでなければならぬまい。

いや、支配力などといってしまつてはミもフタもなくなつてしまう。先生方の多くは、学校内でありのままの自分をさらさないのを、自分を守るための偽装だとは、必ずしも考えていない。むしろ、子どものために心を鬼にして叱り、厳しく指導しているのだ、と思つている。

先生方と話してときどき驚かされることがある。担任している子どもの未来について、強い責任感を披瀝される方が多いからだ。いま、すっかり「教育」しておかないと、その子は将来とんでもない不幸に陥る、と暗い未来イメージを

描き、それを払拭すべく奮闘されるらしいのである。その厳しい「教育」が、子どもへの苛酷な強制になることもまれではない。

無責任にきこえるかも知れないが、ぼくは先生方の責任がそこまで重いと考えるのは、単なる思いすぎにすぎないのではないかとと思う。未来のために、子どもと直面している「いま」をプロセスとして、手段として浪費するのは、危険だしもったいないことではあるまいか。

「いま」をお互いの生の最先端として子どもたちと共有しようとするれば、「学校」を共にいまを生きる生活場としてとらえることができれば、「いま」と「ここ」のリアルティが、仮面を消し去ってくれるのに、「いま」と「ここ」を未来に奉仕するための特訓用シミュレーションに解体してしまうから、先生も子どもも仮面をつけずにはいられなくなる。しかも、責任ある立場という過剰な自覚が、責任を果たすために必要なのだという理由で、自らの権力性に対する警戒心を弱める。些末な「きまり」にこだわり、体罰を与えるのも、毎日宿題を課すのも、すべては子どものためである。しかし、子どもはそれらが「自分のため」だとはなかなか得心しないから、子どもの良心になりかわって、力でおさえなければならぬ。仮面は、子どもになめられないためにも、どうしても必要だ。そして、子どもは「従順」という仮面で、ひとまず

はこれに応じるのである。

むしろ、仮面には個々の先生の意志をこえた組織的な側面がある。子どもに対する権力性が、先生個人の恣意によるものではなく、国家の委嘱を受けた公的資格をもつものだからである。その公的資格が、ときには個々の先生の隠れ蓑にもなる。教育の専門家という自負がそれを内側から支えてもいるだろう。うちとけた場面だと、個々の先生は学校のあり方について結構批判的な意見を述べる。そのとき「これは私個人の意見ですけど」とか、「私個人にしてみれば」とかの枕詞がつく。しかし、公的立場では、個人的には無意味と感じている校門指導も名札点検もしなければならぬのだ、と話はまた屈折するのであるが。

3

学習指導要領に規定され、管理職にしめつけられ、先生は意に染まぬこともやらねばならず、教えたくないことも教えなくてはならない。その内的葛藤は、ケン・ウィルバーがいうように「ゆがめられた自己イメージ」を紡ぎだすしかない。が、その混乱した不愉快な自分は、とうてい受け入れがたいものだ。仮面が必要になる内的必然性がここにある、といえないだろうか。

先生がつけている仮面は、学校教育の体系的秩序に身を預けることによって、子どもや親に対して力ある存在として自

己を登録する道具である。その仮面によって本当の自分を隠し続けるわけだが、面倒なことにこの仮面は思った以上に便利なのだ。隠しておくことができるなら、本当の自分とはりあえずどうでもよくなる。極端にいえば、自己を失うことで内的葛藤が解消できるならそれでも構わないのである。

仮面の憑依は、こうして急速に進行する。学校教育に含まれるあらゆる問題、「きまり」にもカリキュラムにも、行事にも「日の丸」にも、自分の意見を持たない先生が大量生産されるのだ。いや、諸般の事情があつて述べないだけで、自分の意見はあることはある、といわれるかも知れないが、述べない意見は意見ではない。「自分の意見はあるのだが」と思う自己慰撫も、仮面によってはじめて可能なのだ。

うちとけた場で「これは私個人の……」と断つて自分の意見を述べるときでさえ、仮面は実ははずれていない。そのような意見も持っているという面もあるのだ、とちょっと仮面を修正して見せたにすぎない。いろんな場面で仮面をつけかえているつもりかも知れないけれど、本当の自分への裏切りは一貫してしまふのである。

本当の自分を抑圧し続けていると、ストレスもたまると、なにか不当な仕打ちを受けているような気がしてくる。そして、その不幸福感が、自分に自分を隠す仮面を求めはじめる。校長や子どもとうまくやるために必要だつたはずの仮面の下

に、もう一つの仮面があったのだ。自分が勝手に仮面をつけているのに、たいいていの先生はそのことに気づかない。それは押しつけられたものなのだ。押しつけに抵抗できなかった自分を慰めようとして、またしても自分を裏切るのである。

こういうタイプの屈折派は、ありのままの自分をありのままにさらすという生き方を、「子どもっぽい」と退けようとする。現場の苦勞を知らないものたわごとだともいう。体制に守られ、責任を回避し、それゆえに課せられる苦勞に耐えることが「おとなっぽい」生き方なのだろう。

しかし、自分の眼からも自分を隠す仮面は、もう本人には意識しにくいだろう。もしその仮面をひきはがしてしまえば、そのうしろにはなにもないかも知れない。その恐怖にはだれも打ち勝つことができないのだ。校門を出ても、定年退職しても、もうその仮面ははずせなくなる。

子どもが用いる「子どもらしさ」の仮面は、つけ心地が悪いかから必要がなくなるとすぐはずしがたがる。結膜炎のときにつけさせられる眼帯みたいなものだ。だが、先生にとってはお気に入りのサングラスのような仮面である。サングラス・ファンは、はじめは「私は眼が弱くて」などと言いついてはいるが、そのうち、自分の視野に色がついているのを忘れてしまふものだ。仮面をはずすためには、まずありのままの自分を受け入れるしかない。(さいとう じろう・評論家)

「教師」という仮面を脱ぐ

さよなら、
仮面



● 佐藤通雅

私は公立の普通高校にいます。生徒の実態はひどいものです。年々、学力の低い生徒が入ってきます。進学したいといいますが、今さらやろうたって歯が立ちません。だいたい勉強しないのです。そればかりかさわぎます、あばれます、こわします。

こういう日常にいる私にある日インタビュアーがやって来て、「教師の仮面を脱いで語って下さい」と問うたら、どう答えるでしょうか。まず「ホントに仮面を脱いでいいのですか」というでしょうね。「じゃ、語りますよ」とゴクリとつ

ばをのみこんだところで次のようにまくしたてるでしょう。

——今や世をあげて教育や学校問題に過熱しているけど、どう考えたってヘンじゃないでしょうか。だいたい大半の人は自分の人格が学校で造られたと思ってもいないのに、今頃になって学校こそ大事みたいにさわぐのはどうしたことでしょう。自分では教師なんか信頼していないのに(信頼できない、じっとしていられないからさわぐのでしょ)教師には生徒を信頼せ

よというのは何なのでしょうか。自分では子どもをろくにしつげなかったのに、学校のしつげがなっとらんといきりたつのはヘンじゃないでしょうか。学校に来て勢いよくまくしたてる母親の子にかぎって無気力なのどういうこと? 若者は学びたがっている? ウッソでしょ、生徒は勉強をいやがっています。卒業資格だけほしがっています。授業に魅力がないからですって? あなたはわかっちゃいないですね。今の日本は勉強刻苦しなくても食っていけるんです。ただ高卒の資格がないと不利を見ることが多いのです。それでとりあえず通

学しているんですが、勉強の中身なんかほとんど役に立ちません。

なにしろ科学の高度化した社会では、どんなにかっこいい職の名がついていようと、ごく一部のエリート以外は単純作業しかできません。ただ資格試験だけはきびしいのです。きびしいけど、ガンバったことは役にたちません。そんなら高校は何のためにあるかですって。明確です。卒業資格を得るまでの三年間、いやだけどとりあえず通う所です。親からすれば、自分ではどうにもできないからあずけてしまおう「託児所」です。社会からすれば、昼日中から若者が町にあふれ、事件・事故を起こしては困るからせめて昼間だけでも押しこんでおく「収容所」です。進学をめざして勉強してる子もいるにはいますよ。でもあらゆるデータを駆使した予備校の指導にはもう太刀打ちできません。

そんな学校とは何かとどうですか。ですから「託児所」〈収容所〉あるいは「レジャーランド」です。まぎれもなくその機能の方が前面に出てきたのです。それを認めたがらない教育関係者も親も、あるいは評論家といわれる〈安全地帯〉にいる連中も、しきりに人間教育を再び！ なんていつてますが、もうそんなウソいうのやめようじゃないですか――。

やる気ならば、まくしたてはまだまだつづきます。〈荒唐〉

の現場でがんばっている佐藤先生のイメージでインタビューに来た記者は、あまりの勢いにアゼンとして、とてもこれじゃウチの高尚な雑誌の記事にはならない、いやできない、なぜならあまりにホントのことといっているからと、そうそうに帰っていくでしょう。

でも、もうホントのことから出発しようじゃないですか。理想から出発するのでなく、私たちの置かれた〈現在〉から出発し、素肌で感覚し、そこからものを考えようじゃないですか。その場合の約束事はただ一つです。まずありのままをさらけ出すこと、お互いに相手の責任を追求しないことです。はじめから責任を追求してやるぞとかまえられたら、誰だって素直になることができません。ポロを出さないようにと身がまえ、仮面をかぶってしまおうでしょう。それが今の学校であり、家庭です。もうそんな不毛な関係、あきあきしたじゃないですか。

私は高校教師になってから二十六年たちます。この間、断続的ながら生徒に向けて通信を出してきました。通信を出す教師は今でもずいぶんいます。その労苦は大変なものです。が、とかくすると教師の熱意を誘示する手段になるので、よほど注意しなければなりません。「オレはこのように、これだけやってるんだ」と――。さらに熱意は自己陶醉になり、読者である相手が見えなくなることもあります。私自身そう

いう道を通ってきた者として自省しつつ語るのですが、一九七〇年代半ば頃から何かおかしいなと気づいてきました。

通信とは教師が生徒に向けて投げる直球のようなものです。それが投げてもうまくミットにおさまらない、音が吸いこまれたり、ポロッと落ちたりする。それでもしばらくはほとんど意地で書きつづけましたが、ある時点まで来てやめました。生徒は教師が体当りで来ることを欲していない、今までの生徒対教師の関係では息がつかまる——そういう変位が生じたとおくればせながら気づいたのです。もともと、高校ぐらいいなくなりますと、親や教師は昔からうさんくさく、反発や憎悪を向けるのが普通でもありました。しかしそれともちがうのです。反発なら互いにやり合うこともできるのですが、正面から向かえばスリとすりぬけて行く。つかみどころのない、不思議な変位でした。学校というワクにもおさまりません。違反をおかして叱られれば、うなだれるのに、また同じことをくり返す、そういう浮遊物を見るような感じすらしました。

この七〇年代半ばの変位は教育領域だけでなく、他でも同じように起きたのです。文芸評論家の小笠原賢二は『文学的孤児たちの行方』（五柳書院）で、「一九七〇年以降の日本文学には、かつてどの時代にも類推が不可能と思われる質を持った、とてつもなく大きな地層的变化が生じている。そうし

た徴候はおおむねのところ、一九七五（昭和50）年以降明らかなる形となり、以後、より急速に進行してきたように思われる」と指摘しています。

これは私の状況認識とピタリ重なります。私たちの迎えた地層変動は、ほとんど革命といっていいものでした。それはなお世界的に進行中であり、人々は一方で多大な恩恵をこらむりながら、他方では激しく翻弄されてもいます。私は冒頭に「生徒の実態はひどいものです」と書きましたが、それも本質的には地層変動から派生してきております。既成のワクの中にうまく棲息できないとなれば、ワクを取っばらおうとする、それができなければ触れないように浮遊する、それをもやりそこねると心身を病んでしまう……こういう実態を数多く見ることになりました。

私は渦中であって、従来の良心的教育思想であった人間教育とか全人教育といわれるものが、ほとんど歯が立たないことを知りました。危機意識で管理を強めようとするやり方も、逆に自由主義的やり方も、どうにもうまく機能しませんでした。もしかして「We」には、自由な学校を理想とする読者が多いのではないでしょうか。生徒を信頼し、校則もなくし、受験競争にも巻きこまれないという……。

現に私はそれを典型的に実施した公立校におりますが、残念ながらプラスの報告はできません。そういうと、本来の自

由主義でなく放任主義になったからダメになったのだと、あくまで理想を死守しようとする人がいるものですが、実際は自由と放任は表裏の関係であって、うまくいけば「自由」といい、悪くいけば「放任」というにすぎません。私は自分の体験から、理想を先立てたやり方はもはや無効であると思っております。

しかし、せっかちな方は「そんならどういうやり方がある、理想を持たない教師なんて失格だ！」と説教に出るかも知れません。そうなんです。「教師は仮面をかぶっている」なんて批判するくせに、「明るい子どもの未来をめざして、体当りでガンバッテイマス」なんて無内容な弁舌をふるう仮面教師をたのもしく思う人がけっこう多いのです。私はもうウツはいいません。いおうたつていえなくなりました。今まで誰もが経験しなかった時代を前に、既成のやり方を可能なかぎり拭い去って、素手で向かい合ってみようと思うのみです。本当はそれこそが創造の名にあたいするのではないのでしょうか。

現在、子どもや学校の未曾有の実態を前にして、はなはだしいうろたえが生じています。その人たちはこうなった原因がうまくなめないので、自分の頭脳を納得させるために、「学校が悪い、教師は責任を取れ！」とヒステリックに叫ん

でいます。その圧力が強い分だけ、生徒へのしめつけがきびしくなっているのはよく知るところです。そうすると今度は「校則がへんだ、体罰をやめろー」という声があがり、今や大合唱です。

でも、どちらから攻めても脱出口は出てきません。〈学校悪〉を追求する観点はもう旧いのです。いや、とりあえず〈学校悪〉と見るにしても、それが自分たちの欲望にそって進めてきた文明のツケなのだという視点を持たないかぎり、〈魔女裁判〉をくり返すだけになります。混濁した此処を開いていく作業は、一方にだけ責任転嫁するのではなく、自分の責任を引き受けようとしたときにはじまります。

今までは学校批判があると、「なにお、自分の方がろくに育てもしなかったくせに」と逆批判を内心したものでした。しかし、私はある時点から父母の責任追求をやめました。それから何も生まれてこないと気づいたからです。「子どもをあずかっている」「あずけている」という倫理性の入りこみがちな考えも捨てました。そうではなく、「学校も家庭も、こういう若者を共有してしまっているのだ」という観点から出発することになりました。生徒向通信をやめた私はその後、父母に向けて、もっとも率直なところから語りかけていきます。

(さとう みちまさ・仙台市立仙台高等学校)

「教師」という仮面を脱ぐ

仮面を脱いだときの センセイたち



● 名 和 道 子

ところ、じわーと薄いてきたものを暑いふりしてふいたのだったかも知れません。

『今日一日楽しいといいネ』——落第教員の私は、つい心の中で現役の先生たちを応援してしまったのでした。

もう去年のことになりますが、『学校ごっこ』という催しがありました。

この『We』が半田さんによって主宰されているように、教育評論家の齋藤次郎さんが個人編集している雑誌『三輪車疾走』の計画した夏のお楽しみ行事です。お楽しみといってもやはりそこには「学校って何だろう」とか、「学校にどんな可能性があるだろうか」という問い掛けがあったと思います。とはいうものの、やはり表面は「ごっこ」という遊びのノリで、という齋藤さんの意図を裏切って、新聞で紹介されると、真剣なセンセイたちの申込みが定員の倍もあって、齋藤さんがあわてていると耳にしていたので、『やだな、研究会になっちゃうのかな?』と、戦々恐々出掛けていった会場で、ほ

「えーわからないよ!」と大きな声で叫んでいる人がいるかと思うと、「だからサ、これは当然三番が正しい」とすっかり後ろを向いて講義をしている人もある。教室の中は、机の上の小さな容器の中で気化しているドライアイスのようにシユワシユワと楽し気なざわめきであふれ、また気温が上昇したようで、暑がりの私は汗をふきました。理科の時間でした。教卓の後ろにいるのもちろん先生。「なーんだ、それは考えなかつたよ!」「そーか! まちがった」とうれしそうに発表し合っている人たちも半分は多分先生。私は本当の

つとした一場面です。

さて、「仮面を脱いだときのセンセイたち」について語らなければならぬのですが、どんな風に始めましょうか。

*多分、初めに「仮面」という言葉の前身をはっきりさせる必要がありますね。このマイナスイメージの言葉。

*次に「先生」のこと。私の考えている先生像と皆さんが思い描く先生像とはどのくらい違いがあるでしょう。なか「先生」と「仮面」が一緒に使われると、教員という存在は偽善的なものと定義されているみたいですよ。

幸いなことに私は自分が習った先生で好きになった人が後になって「はずれ」になった経験がないのです。きっと随分ませた子どもだったのでしょう。

一方、友人の中に何人か現役の教員がありますが、彼らが生徒の前で「仮面」を被っているかどうかは現場を見ていないので確信を持って言うことは出来ないですね。

*しかし！ しかし恐ろしいことに、私はさる有名進学高校で七年間教えていた経験があり、残念なことにその間ずっとミイラになってしまったような気持ちで過ごしていたことを告白しなくちゃなりません（それはもちろん私に罪があった、その重さに七年間しか耐えられず、廃業することになりました）。

そんなわけでちょっと辛いけれど、結局、自分のことをお話しするのがいいのかな、と思っているところです。つまりあのミイラの包帯を解いた今の私が、何を一番の喜びとしているか、ということをお話ししたら、共感してくださる先生があるかも知れないし、『そうだったけ』と自分の子ども時代を思い出してくださる人もあるでしょう。そして、もし私の言い分に三分の理があると認めてくださるなら、それを上手に教育の現場で生かす方法を考えていたいただきたいのです。

そこではじめのエピソードにもどりましょう。そうです。私が涙ぐんでしまったのは、そこに居た人たちがほんとうにうれしそうに「知らない」とか「間違った」とか叫んでいたからです。「すべてを知っているはずの」あるいは「間違わないはずの」先生が――

いかがでしょう。センセイの仮面とはそういうことではありませんか？ でも――それはなぜなの？「うそ！ そんなこと今どき時代錯誤もはなはだしい」と言われそう。「完璧さを要求されていると考えるなんて、僭越だ」という非難も聞かえてきそうです。

でも、逆らうようだけれど一般的に先生たちは相変わらず「間違いたくない」と思っているのです。だって、子どもたちに毎日、毎日正しい答えを要求しているのですもの。おまけに知らねばならないことはハイテク時代、塾教育の盛んな

学習形態になるにつれ、ますます多くなっています。それ自分にはねかえり、受験体制に対応するため、「どれだけ正しく、どれだけ多くのことを知っているか」を時代の空気と競ってしまうという悲しい反応を続けています。そして、その度合いは、小学校、中学、高校と学年が進むにつれて強まるのではないのでしょうか。

こうやって、テーマのまわりをウロウロしながら途方に暮れていたなら、一月二十六日の朝日新聞に面白い投書が掲載されていました。来日半年のオーストラリア人、H・バートニクさんの日本の教育についての感想をご紹介します。

——筆者は日本の教育は大部分が反復と暗記、詰め込みが基本であり、「そういう学習法を続けると愚鈍さと人生に対する傍観的態度を得るだけだ」と哲学者のロン・ハバード氏（どういう人か私は知らないのですが）の意見を引用し次のように結びます。『これは多分、「日本人はなぜあれほど内省的なのか」とか「日本人はなぜあれほど自信がないのか」という質問に対する答えになるでしょう。こうした分析は来日以来、私が当惑していたことに答えを与えてくれました。この当惑とは英語が話せる日本人と討論し意見の一致を見た後で、結局、彼らは誤解していたと分かった時や、討論し一致したことを日本人が全く理解していなかったのだと気付い

た時などに感じた当惑のことです。日本人は何事も拒むのが苦手と聞いていますが、分らないことを素直にわからないというのも、また苦手なようです』

もう一度元にもどります。大好きだった先生たちの真似をして、大好きだった学校で仕事をしたいと長年憧れ、センチのハシクレになった私がやりたかったことは、「知らなかった！ そっか——それじゃ、これをああして、それからこうすればいいんだよね！」とわいわい、がやがやとなぜなぜの森を進んで行くことだったのです。そういうことを子どもに納得させるためには大変な教育技術と価値観を同じくする仲間作りが必要だということを忘れて！ 困ッタヒトデシタ。

もちろん、半年もすればその辺の状況は感覚的なN先生にはすぐ分かりました。で、どうしたかというのと、個人的な努力で乗り越えられそうに見えた方法、「優秀な先生」への道、つまり学校の方針に沿ってどんな質問にも即答できるティーチングマシンになる努力に傾いてしまったのです。でも、それでは王子様のおよめさんになりたくて、自分の踵や爪先を切ってガラスの靴に足をつっこんだ、シンデレラのお姉さんと同じじゃありませんか。

お地藏様、カエルのペンダント、手作りモザイクの箱、詩、

バンク歌手のコラージュ、などという不思議な贈り物にはげまされながら頑張ってみても、駄目な方法はやっぱり駄目。情けないことに、別のくだらない理由も絡んで、学校にサヨウナラをしてからミイラは人間にもどりました。

「仮面を脱いだセンセイ」である今は、公民館が私の仕事場です。講座を組み立てる度に私はしつこく講師にお願いします。「どうぞ私たちの頭を不協和音で満たしてください」「何故なのだろうかと考えさせてください」「私たちの無駄に見えるおしゃべりを聞いてください」「私たち自身に発見させてください」。そして、受講生の中のお母さんから、ときどき「子どもがこんな風に学校で勉強出来るといいんですが」と言われます。

『三輪車』主催の「学校ごっこ」で講師をしてくださった先生方とならもろん、生徒だったセンセイたちもきつと今はあのシユワシユワという楽しさのざわめきに伝染して教室に変化が現れていることでしょう。

八月の暑い最中に高い会費を払って、どうして「学校ごっこ」なんかしに来るんでしょう。本当に学校が好きなんですネ。とっても楽しい学校体験があるんでしょうネ。知らないことに気付いたあのわくわくする瞬間、それを思い出してセンセイたちは幸せそうでした。

学校の外でお会いするセンセイたちはいつもちょっと元気がありません（その時、はたして仮面を脱いでいるかどうか分かりませんが）。大人の集団の中に入ると、大概とても控えめで、消極的とさえ言いたくなります。「お会いしましょう」とさそっていただいたことは皆無です。声を掛けても生活時間の違いでしょうか、ほとんどの場合お断りです（私は余程魅力がないのかしら）。どんな授業をしたいのか、心の中はほとんど語られません。

一方、私の大好きな先生たちはいつもとても忙しそう。それでも、本が一杯詰まったショルダーバッグを十文字に掛けて、あっちからこっちへの移動の隙間にコーヒーを飲む一時間を作ってくださいます。そして「それどういうこと?」「これ知ってる?」といつも好奇心に溢れています。こういう方たちは多面体の全体をいつも人目に晒して恐れませぬ。

一度学校教育に挫折して社会教育の場に身を置いてみるとまた夢の学校を考えてみます。教える方も教わる方も「そうか!」と言える学習のある学校。

図書館の中にある大きな丸いテーブルを囲む小さなクラスで成り立っている学校を。

(なわ・みちこ)

発言

親が教師に求めるもの

田中純子

「親が教師に求めるもの」「私が親として教師に求めたものは何だったろう」と考えてみる。

長男が小学校に入学し、四人の子供の末っ子が中学校を卒業するまで十五年間、随分たくさん先生の教師との出会いがあった……といろいろ思い出してみるのだが、これといった確かな願いを、「学校」にも「教師」にも持ったことがなかったと、今さら驚いている。

「何故?」とか、「何を」とか、「どうあるべきか」などと真剣に考える前に、あたり前のこととして「学校」があり、選択不可能な出会いとして「教師」がいた。

四月。始業式が近づくと、担任教師が誰になるか、期待と不安でいっぱいの子供と共に「良い先生になるといいネ」と話しあったが、その「良い先生」の中身を、深く考えたことはなかった。「〇〇先生だったらいいな」「××先生になったらどうしよう」といった具体的なもので、もし、どんな先

生が良いのか? と問われても、「やさしい」とか「子供がよく遊んでくれる」とか「授業が楽しい」程度のイメージしかなかったのではないかと思う。

「学校教育」というものに対して、考えてみると、非常に真面目としかいいようのない私が、今、「ラミ中学校ほしいねん」という、自分たちの手で中学校を創ろうという運動をしている。

十七年前、「共に生きる」ということを、もう一度考え直したいと、夫と二人で始めた無認可の保育園が、子供の問題を、私たちの生き方を、私たちの創りつつある社会を問わせ、負わされた責任として、学校を創る運動は始まり、三年が過ぎた。

「ラミ中」ができるのを期待して待っていた子供たちも、一人二人と中学へ入学。子供たちのことを考えると、一日も早

くと焦る気もあるが、自分にとっては、この三年という日々は本当に楽しく大切な意味ある日々だった。「学校」という幻想。既成概念を崩していく日々だった。「学校」という場に、自分が何を求め、何を必要としているのかを、今始めて真剣に考え始めた気がしている。

学校は、①生きるための最低限の学力・知識、②本当は家庭・地域でやるべきしつけ、③集団生活の中で人といっしょに生きる知恵の三点を身につけさせるところだと思ふ。と、
“We” 編集部から送られて来た資料の中で河上亮一さんは言っている。

でも、私は今、こう思っている。
一人一人が、かけがえのない自己の存在に気づき、生きていく喜び、生きていく自信、力を、自分のものと出来るような場、そこが「学校」であつたらいいと。

生きていくために必要な最低の学力、とよく言う。けれど、最低であっても、最高であっても、学力・知識は生きていくための道具であるが、それだけでは人を「生かす力」とはなり得ないと思う。道具を使う人に、使う意志がない限り、使いたいと願う意志のないところで、道具は何の意味もないものになってしまうのではないか。

「ラミ中」の運動を始めて、何人かの登校拒否のお子さんを

持つお母さんと話す機会があった。学校に行くと「こんな成績では入れる高校なんか無い」「ダメなやつだ」と、毎日毎日言われ、行けば行くほど、親子で劣等感を持たされ、生きていく資格もない人間のように思わされる。家にいれば、優しく、よく手伝いもしてくれて良い子なのに……と。

知識の多い少ないを計ることで、学力に価値を置き、成績を比較することの中で、どんなに多くの子供たちが、自分をダメだと思ひ込まされているか。学校が子供に生きる希望を失わせてしまう場になっているのなら、何故、そんな場に行く必要があるのだろうか、考えさせられてしまった。

保育園を始めて十七年。幼い子供たちとの生活の中で、「生きてるっていいな」と本当に素直に言えるようになった。そして、いつの頃からか、私が子供たちに願うことは「喜んで生きてほしい」それだけになっていた。

「親が教師に求めるもの」「私が教師に求めるもの」つまり「日々幼い子供たちの前に立つ私が、私自身に求める保育者」——それは、学力・知識・しつけの前に、一人一人の子供の、今あるそのままを受け入れ、認め、信頼すること。自身自身の中に確かな願ひを持って、真剣に子供たちと共に生きること、でしかない気がしている。

（「ちびくる保育園」保母）

私の教員採用試験体験

星名 綾

「家庭科の教師になりたい」と本気で思い始めたのは、大学三年も終わりに近づいた頃。漠然としていた教職への気持ちや豊かさに気づき、この教科に引きつけられた。『家庭科新時代』やWeに登場された先生方のような授業ができたなら素敵だなあ……という思いを抱きながら、未熟ながらも私なりに家庭科について考えてきた。

学校が受験や就職に対し、通過すればよい、有利であればよいという感じになっている今、生きること、生活、自分たちの置かれている現状を問い、考え、語り合う場はどこにあるのだろうか。家庭科はその場を提供できるのではないだろうか。容易なことではないけれど、そんな場で、感動したり、あれっと思ったことなどを共有でき、生徒・教師が共に学び、考え合い、お互いを高めることができたらいいなあ——というようなことを、内心では、理想論を言っているにすぎ

ないのだろうかとも思いつつ、考えていた。教育実習を終えて、冒頭の思いが変わらなかつたことで、七月、県の教員採用試験（高校・家庭科）を受けた。

試験のあった夏、神戸での女子高生校門圧死事件、問題のあったという生徒を砂浜に首まで埋めて指導を行った事件など、学校、教師、指導のあり方、生徒の人権について等、教育に対して問い直すことを求めるような事件が多発した。マスコミでもいろいろ取りあげ方をした。試験を受けた私の心境も複雑だった。生命に関わるギリギリの線まで、生徒の人権をふみにじるようなところまでいかねばやって行けないのが、多くの学校の現状だとしたら、教師って一体何なのだろう、そして、教師を志す者に求められるものって何なのか、そんな疑問が心にひっかかっていた。もっとも、これは、今尚、私の中でくすぶっているが…。

七月は、マークシートと穴埋めが主の筆記と簡単な集団面

接が行われ、試験は終わった。運良く一次試験に通り、十月に二次試験を受けた。適性検査、論文、集団討論、個人面接が行われたが、面接を受けて、私の家庭科に対して抱いていた思いはふっ飛び、これが現状なんだ、ということをつきつけられた感じがした。

教科に関しては、学習指導要領についてと指導上の留意点だけで、他は教員志望の動機、指導できる教科、部活動、教育実習のこと、教師になって重要だと思ふことなどがぎかれ、これらは比較的あっさりとするんだ。誰に対しても同じだとは思わないが、私は他に、生徒指導について、しつこいほど問われた。「K高校（私の出身校）みたいな所ばかりではない、授業は成立せず、生徒は義理で学校に来る所だが多い。そういう所でも大丈夫ですか」という内容のことを三人いた面接員全員からきかれた。集団討論の課題でもあった、授業がつまらないと言って、寝たり騒いだりする生徒がいたらどう指導するか（教科担当として）、ということも問われた。

教科よりも所謂生徒・生活指導が先、ということなのだろうか。これらの問いに対し、「大丈夫です」と答えたが、自信はなかった。大学受験のを中心にして高校生活を送った私が、点数で論切りにされ、とりあえず高校だけは……という生徒を目的にしたらどうするのか。生徒の実態が見え

ず、戸惑うばかり？ 自分の内にある無意識な差別観が表に出てくることだってあるかもしれない。本当に見当がつかない。ただ、先入観をもって生徒に接したくない、教師になれたといっても生徒より自分は上だとは思えない。謙虚な気持ちを持ち続けたいと思った。生徒から学ぶものも多いだろう。授業放棄する生徒に対して、教師が一方的にとがめることはできない、衝突し合っても、それを踏み台にお互いの距離を縮めたいと思った。

でも、採用側の求めていたことと、私の考えはくい違つたようだ。面接の時、このことは既に感じてはいた。一か月後、不合格通知が届いた。

私の考え方が正しいと言いつけることはできないし、実力も不十分だったのだろう。不合格という事実は、そのまま受けとめるつもりだ。でも、来年もまた、同じような方法で試験が行われるのか、と考えると、少々気が重かった。

県の方は落ちたが、昨年末、私学に採用されることになった。四月からは教師として第一歩を踏み出すことになる。どんな生徒と出会うのか、全くわからない。教える者としてではなく、生きてきた年数に差はあるが、同じ現代に生き、時に同じ空間と時間を共有するひとりの人間として、自分を聞きながら、生徒と接することができたら、と思う。誠実な心を忘れず、精一杯やりたい、と思っている。

発言

本音が話し合える関係をつくろう

西本和代

今年も、チャリーこと吉田明弘さん（We vol. 8に「石けんコンサート通信」連載）とヤマケンこと山本謙吉さん（本号から「買うて来て使う」を連載）が、石けんコンサートをするために、私の授業に来てくれました。まず三年男子の「家庭一般」の授業で、続いて、一年女子二クラスに、またまた欲ばって、いつも保育園見学でお世話になっている明南保育園の四、五歳児にもやってもらいました。それぞれの反応の対比がおもしろかったです。

男子の授業では、最初「この兄ちゃんら、ポラントエアと言って何か売りつけるんとかうか。先生らもだまされとんのとちゃうか」といった冷やかな見方から、四十分後には二人のベイスに入っていました。女子は、私の前宣伝もあって、最初から乗ってきました。特に「チェルノブイリの春」が印象深かったようです。

保育園ではどうなるかと思っていたら、高校生以上に反応

がリアルですばらしい。石けんのテーマソングはすぐに覚えいっしょに歌っていました。「チェルノブイリの春」で、最初に世界地図を広げると、「イラクはどこ?」「アメリカといま、戦いしよんのよ」と次から次へ国名が出てきます。高校生にしたのと同じような説明の後、ブラックライトを使った紙芝居では、シーンとして見ていました。お迎えにきた保護者の方もいっしょに見て「勉強になりました」と言われました。最後は石けんの歌でしめくり、子供たちは歌でお返ししてくれました。わずか四十分で、子供たちとこんなに溶け込めるチャリーやヤマケンってすごいな。肩書きぬきの世界で本当のすばらしさは、子供たちの反応にリアルに現れます。保父さんにもなってみたいとチャリー。

他の職業を体験できる機会が必要ですね。高校教師の私も幼稚園、保育園、小・中学校、病院などを、一日でもいいから体験して、自分のやっていることを見つめ直す機会があれ

ばいい。『一日だけのナイチンゲール・上下』のおもしろさも、そんな所からきているのではないか——こんなことを、二人と帰る道々話しました。

三年「食物」の最後の授業では、最近『坂本廣子の台所育児』（農文協）を出された坂本廣子さんに話していただきました。私は、家庭科をおもしろいものに、という情熱はもっているのだけれど、その方法が貧しいものだから、ついこうした外におられる魅力的な方の力を借りることになります。そして、自分の伝え方の方法のまずさを痛感しています。

冬休み、家庭科教師の集りに『汚れとつき合う』（北斗社の著者、森住明弘さんに来ていただき、お話をうかがいました。環境問題の解決でも、大切なのはハードよりソフト、人と人との関係、ということにうなづきました。そして家庭科で、また私自身が関心をもっていることは、根っこの所で全部つながっている。これを人と人との関係でとらえると、すつきりしました。

学校教育をみても、生徒と生徒、生徒と教師、教師と教師、教師と親など、人と人との関係で役割を演じるのでなく、本音が話し合える関係を築くことの大切さを思います。

チャリー、ヤマケンが来てくれた時の昼休み、服装・頭髪検査の再検査があり、それに私が立ち合った時、外人講師のハーフさんが「なぜこういうことをしなければいけないの

か。頭髪が悪かったら人間を悪くするのか。アメリカで教師が大事にするのは、いかに生徒に考えさせるか、考える力をつけさせるかだ」と鋭く問いかけられました。グサツときて生徒指導係として、その体制をになっている自分に問い返されました。高塚高校の校門旺死事件の時も、あれをどうとらえるか、本音で話し合える生徒指導の研修会を求めているけれど、できませんでした。

学校も日本の社会の中にあるので、理想論だけではすまないけれど、理想と現実をぶつけあって、本音で議論する場が欠けているように思います。ハーフ先生が、チャリーとヤマケンの石けんコンサートを見学にこられ、言葉の意味はよくわからなかったけれど、すばらしいというような感想を述べられました。河上亮一さん（28頁参照）が述べている学校の現実はあるけれど、めざすべきはプロ教師として立つのでなく、プロ教師だけが教育になうこととの限界を見る、複眼の視点ではないかと思っています。とは言いながら、教科の中ではそういった理想を求めつつも、学校全体への働きかけができていない自分を感じています。

学校だけに目を向けていると、息苦しくてしかたがありませんが、外に目を向けると、すばらしい人がいっぱいいて、いろんな出会いや可能性が楽しくなるのです。

（兵庫県立明石高等学校）

学校と社会の常識は違ふのか

教師のホンネを出そう——一中学教師の意見から——

朝日新聞'90年11月6日付家庭欄に「学校と社会の常識は違ふのか」というタイトルで、同紙都築和人記者と川越市立鯉

井中学校教諭河上亮一氏の「ゴ問ゴ答」

(5問5答)が載った。河上氏は、'88年

11月13日に放映したNHK特集「世界の折、私が拒否反応を持った教師の一人だった」(89年1月号『波』参照)。

朝日新聞は「ゴ問ゴ答」を、本音、真相を聞くコーナーとして、読者からの感想を求めている。きつと河上氏の意見には様々な反響があるだろうと期待したが、何の反響も載らなかつた。そこで河上氏の意見への感想を通して、Weの読者である教師の方々の本音をお尋ねした。

(半田)

〈朝日新聞記事より〉(問いは簡略にした)

①「プロ教師の会」という会を作っているが、「教師」はそもそもプロのはず。あえて「プロ教師」としたのはなぜ?

どんな専門家も技術をみがき、訓練をすることで専門家となるわけですが、教師は大学の教職課程を取って卒業すれば、翌日から教壇に立ちます。そうした中で、多くの教師は、自分のありのままの姿で教育できると思っている。いわば「金八先生」のようになりたいと思っている。つまり、生徒の人生に影響を及ぼしたいという色気を持つ。人格で勝負しようと思いがちで、生徒の内面に土足で踏み込み、傷つけることになる。生徒との関係をできるだけクールに見せるのがプロ教師と考えます。

②神戸での校門圧死事件をきっかけに、再び校則批判、管理教育の批判の声が高まっているが、マスコミなど外の声を教育現場にいて、どう受け止めるか

生徒に強制してでも教え込まねばならないものが学校にはあるというのが大前提です。学校を単純に整理してみると、①生きるための最低限の学力・知識②本当は家庭・地域でやるべきしつけ③集団生活の中で人といっしょに生きる知恵、の三点を身につけさせるところだと思ふ。学校を一つの舞台にたとえれば、教師と生徒が限定された舞台の上で、それぞれの役割を演じる。教師が教え、生徒が学ぶという基本形が必要です。その衣装が制服であり、舞台装置として校則がある。

そうした中で、ここ十年くらいで生徒がどれくらい変わってしまったかをもっとみんな

で確認してほしい。かつては「教師の言うことはきくものだ」という意識があったが、今はない。「スカートを短くしろ」と言え、生徒は必ず「どうして?」と聞く。この場合、教師の方には生徒を合理的に納得させられるような理由がない。生徒が一つひとつ「どうして?」と文句を言うので、校則を生徒手帳に書き、「ここにそう書いてあるだろ」と水戸黄門の印籠(いんろう)のように示すようになった。外の人は「校則は合理的に説明できなくてはいけないから、非合理的な校則はなすべきだ」と言うが、それは現場を知らない言い方です。教師にとつての合理的と生徒にとつての合理的が違うのです。だから生徒に説得するのはなく「校則だから守れ」としか言いようがないのです。そこをマスコミは合理主義や生徒の人権からとらえようとするとから問題のポイントを外すことになる。

③現実の「校則」の中には、靴下の色や三つ折り、カバンをべちゃんこにしない、丸刈りなども含まれているが

細かい校則があつて、それを守らせていることがマスコミで強調されるが、ほとんどの教師は生徒に強く指導していない。遅刻しないという基本的なことだつて生徒に守らせる

ことが危なくなっているのに、どうして靴下やカバンなんかを守らせることができるでしょうか。

丸刈りも、もう無理です。学校の中で限定的に守らせるのが校則ですから丸刈りのように取り外しができず、家に帰ってもそのままという校則を強制することはできないでしょう。学校として譲れないものというのはそんなにありません。時間や服装など基本的なことだけです。

④盗癖のある女子生徒を立ち直らせるため「持ち物検査」した体験を書いているが、持ち物検査は必要か

それまでの彼女との関係の中で、ここは勝負だと思つて、持ち物検査をしました。もうできないでしょう。生徒全員を犯人扱いするのだからとても危険なことをやったわけです。その危険と彼女の盗癖を直すことを、はかりにかけて、後者を取った。こういうダークな部分は現場ではある。先ほどの話と矛盾しますが、彼女を本当に立ち直らせようという愛情がないとできない。そういう意味で、現場では市民社会の論理が制限される場面が出て来る。しかし、時代がこうなっていますから、もう持ち物検査はしません。

⑤そうになると、学校の論理は市民社会の論理と両立するように思えるが

市民社会の論理と学校の論理は異なっています。「数学の授業に出たくないのなら、その子の自由にして」とまで言う人がいるが、こうしたことを権利だと認めてしまえば学校は成り立ちません。また、これまで学校では盗難事件などが起きて警察の介入を避けてきた。しかし、市民社会の論理にしたがつて、教師が持ち物検査をやめるなら、すべての盗難事件は警察に届けることになる。抵抗はあるでしょうが、警察を入れることを認めたらわれないといけない。結局、日本のような脆弱(ぜいじゃく)な市民社会であつて、その論理を学校に持ち込んで、スバッと切れるようなものではないと思うのですが。

〈埼玉教育塾〉70年十二月創刊、のち隔週刊誌となつた『異議あり!』の活動の中で、教師のための塾として生まれる。『下級教員宣言』『学校をしっかりとつかむ』『文化としての学校』(以上現代書館)。『非国民教育宣言』(三一書房)を既刊。教師のための「講座」を開いている。川越市山田一九六九—二

おしつけ、子どもの人権を無視してきたと思
います。

社会の常識では考えられない教育現場で、
発言しても皆、沈黙！ 変わるどころか悪く
なる一方で、息苦しさを感じる毎日です。

(埼玉・永井恵子)

◆こういう意見は相手にしない方がいい

この記事が朝日新聞に出たとき「ワー、な
んでやなヤツなんだろ」というのが私の感想
でした。「こんなのがいるから、全く教師つて
のは！ っって言われるんだよね」って思いま
した。ことばは悪いんですが「バ、カミタイ」
とも。とにかく、ひとつとして共感するとこ
ろなしでした。共感どころか全否定です。

今回のアンケートに答えるために、もう一
回よく読みましたけれど、やっぱり同じ。We
がなぜ記事を取りあげたのかなあって思っ
てしまいました。こんなの相手にしない方がい
いんじゃないかしら、とネ。

私の理想は、好きなときに好きな勉強をす
るというもの。今の学校は正反対ですが、で
も一歩でも理想に近づけるように、できる限
りのことをしています。さいわい家庭科はオ
モシロイのしいと言ってくれる子がほとん

どなので、私自身も言いたいことを言い、子
どもがやりたいということをやって楽しく過
ごしています。

(東京・村田尚子)

◆学校と社会の常識は違ってはならない

どのように、自分の考えを述べたらよいの
か悩み、ずい分考え続けました。新聞の文面
だけでは河上氏の主張が十分理解できません
ので。推測しながら考えを述べます。

結論から言うと、学校と社会の常識は違っ
てはならない、ということ です。社会には様
々な考えを持っている人がいるわけで、それ
が学校という小社会の中でも認められなけれ
ばなりません(しかし、授業に出たくないの
ならその子の自由にしていい、授業のじゃま
をしていい、ということではない)。

学校で守らなければならないルールは、最
低限のものであっていいはず(現状では、な
かなかそうはいきませんが)。教師と生徒と
の関係には、ヒューマニズムが常に根底にな
ければならない。役を演じる関係ではなく、
人間としてどのように生きるか、共に考える
関係だと思えます。ですから持物検査(どの
ような状況で行われたかは知りませんが)な
ど、人権侵害。学校の役割についてもしかり。

ノウハウを教える場ではなく、過去に人間が
果たしてきた役割や文化遺産を、次の世代を
担う子供たちに伝えながら、人間として生き
る道を、共に探る場所なんだと思います。そ
の上に立った教学であり、国語なんだと。

河上氏は「プロ」と「商標」をつけること
で、おごりたかぶるポーズを作っている。プ
ロなんか脱ぎ捨て(まさに舞台衣装)、はだか
のひとりの人間として子供に接したらいい。
そうした時に、とつてもつらい苦しい思いを
するはず。そこではじめて、人間って何か、
学校の果たす役割って何かが、見えてくるの
ではないかな……。 (東京・鈴木まき子)

◆「従わないなら銃殺だ！」

「学校の常識と社会の常識は違う」と考えた
ことはなかった。この場合の「社会」には様
々な場があると思うが、学校は管理の厳しい
企業体の状況と似ているのではないか。

公立学校の教師は、いまや文部省を頂点と
する組織で管理され、〃学習指導要領〃とい
う学習内容を押しつけるための憲兵さえ目を
光らせている。もしこれに抵抗しようものな
ら、職務命令、「従わないなら銃殺だ！」を
つきつけられている。「」内は、わが校の

管理職の言葉なのだ。

このような教師が、一人一人の子どもに必要な学力の保障や、様々な親の要求をみたしていけるのか。常識で考えても、教師の置かれている状況の異常さがわかっていただけだろうと思うが……。

こんな中で、仮面などかぶれない教師や、生徒を管理できない私は、とっくに落ちこぼれ教師である。それでも続けているのはなぜか？ 生活のためとしか言いようがない。

(大阪・匿名希望)

〈中学校教師より〉

◆教師の職業の奇妙さに自覚を

「学校」という世界は特殊であり、「教師」という職業は奇妙なものがあるということ忘れてはいけないと思う。私自身教師をしていて、考え方の奇妙さに驚くことがある。

私たちは「生徒」と呼ばれる人間たちに、何を要求したいのか、ただ三年間、何ごともなく過ごせばそれでよしとするのか。私たちの都合だけの「要求」にただ単に従うことは生徒たちにとって「服従」以外の何ものでも

ないと思う。

学校は最初からこんなものではなかったはず。教師、確かに今は「免許」なるものがありますが、それもここ最近のことでしょう。今、私たち教師にとって必要なことは、歴史的に国際的に「学校」を見ることだと思います。そして、くだらない仕事はしない、という強さをもつことです。

(京都・山本美香)

◆教師以外の人との交流を

学校と社会の常識は違うことが多いと思う。その多くは、教師は教師以外の人とのつきあいや交流が少ないためである。会議や研究会・講習会が毎日のように放課後に組まれていて、研修する場は多いが、いずれに行っても学校関係者ばかりで、視野はいつくこうに広くならない。教師集団という狭いなかで、一定の常識が生まれてくる。

唯一、開かれた道は家庭訪問である。最近では働いているお母さんが多く、刺激を受けることが多い。ただ昼間の訪問では、父親とはとんど会えないのが残念である。子供を見る目が、家庭訪問後に修正されることが多い。企業では最近異業種間交流が多いと聞くが

教師ももっと外に出て、新鮮な風にあたりたい。「学校」という枠を通してのみ生徒を見ることが、とても危険だ。

Weのフォーラムは、私にとっての異業種交流の場である。
(大阪・上山悦子)

◆教師の持つ権力をなくすこと

①「教師が教え生徒が学ぶ」のが基本と、河上氏は言っているが、そもそもその認識がすべての誤りの元。この構造を基本とするから、氏の言う通り、学校は制服・校則を必要とするのである。教師はこれらと内申書(含評定)を自由に操れる権力を持っているから、思いあがった振舞いをしてしまいがちなのだ。それは技術や訓練で正せるものではない。

「ほとんどの教師は生徒に強く指導していない」と氏は言うが、それは失うものを持たなくなった、「指導」の効がなくなった生徒たちに対してのことだ。教師が自身への危害を恐れることだ。学校の理不尽さに対し、一人でも闘おうとする生徒には、例えば高校進学道のさえ閉ざすではないか。また、いやだ、おかしいと感じながらも一応黙って従っている大方の生徒にとっては、生徒手帳に書くだ

けで、強い強制力を持つのである。

氏は「学校として譲れないものはそんなにない。時間や服装など基本的なことだけ」と続ける。しかし、服装のきまりを徹底させようとすれば、体罰肯定まで行きつくはずだ。せいぜい、やりすぎかどうかが問題となるだけだ。教師も、きまりを守らせようと躍起になり、自分の力が及ばなければ、教師集団の中で一番権力をふるう人に頼ったり、その関係上やりすぎについては見て見ぬふりしたりしているのだから。こういう土壌の中だから教師によるセクシャル・ハラスメントも生じてしまうのだ。

氏は、教師の持つ権力性についてとらえていない。また、だから生徒の人権についても鈍感になってしまふのだろう。

学校とは、究極的には、人権を学ぶ場だと私は思う。

学力・知識も、その一人歩きが受験地獄・競争社会を正当化している。学力・知識を多く持った人(子)は、その分、他者の人権確立のために出すべきで、出したいと思えるような学習を、私は学校で展開したいと思う。服従するだけの子どもを育てたくはない。それは氏の言うように「強制して教え込」めるよ

うなものではない。調教と教育とは違う。

この時の教師と生徒は権力関係にない。あってはいけない。生徒たちよりも少しだけ長く生きてきた人間、生徒の年齢期を経た人間が働きかけることが、学習に有効だというに過ぎない。だから、教師一人の考え・力よりも生徒たちの考え・力のほうがずっと上を行く。教師が教えられるという場面はよくある。ゲルニカ事件は、それを端的に示している。

②氏の言う通り、これらの問題について、教師が組織として取り組んでこなかったのは確か。教組も教研運動の基軸に据えて取り組むべきなのに、できずに現在に至っている。そういう状況の中、何人もの死者を出してしまつて、やつと親として、市民として、マスコミとして学校に異議申し立てが始まった。これらの動きと、またそれに応えようとする教師の出現によって、「学校の常識」が問われていく。急ピッチでその作業をしなければと私は思い、行動を始めたところである。

大人が動き出すことによって、生徒たちも正面から堂々と声をあげることを知っていくだろう。

③学校と社会の常識について言えば――

市民社会の中で、個と個の関係は直接の権力関係にない場合が多い。だから、その関係においては人権侵害は許されにくい。しかし個ではなく、ムラ制度とか国の制度と個との関係においては、人権侵害はいくらでもあ

る。それは権力関係にあるから。学校の場合は企業と同じで、どちらも権力社会。だから、どちらも権力の論理によって常識がつけられ、その常識によって人権がふみにじられ、死まで招いている。

権力関係がなくなると、良識が甦る。

(東京・根津公子)

◆「プロ教師」にはなりたくない

学校と社会の常識は違うのか。「違う」と感じるものが多々ある。たとえば問題行動のあった生徒に対し、「指導」として「なぐる」ことは「愛のムチ」と教師は思っている。生徒にとって、教師は「こわい」という恐怖心しか残らないのに。その生徒の親が体罰を批判してくる場合もある。しかし親の抗議を素直に受け入れる基盤は、このような教師たちにはない。親権があることや親の気持ちを理解できない。

これらの教師には、自分たちのしているこ

とは、まちがってはいないんだ、という強い自信に裏打ちされている。だから他の意見や他の見方を入れることはできない。ましてや生徒―弱者の気持ち(彼らは、自分の思いを表現することもできない)は、想像することすらできなくなってしまう。

「市民社会の論理が成り立たない学校」は、一人一人の人権が大切にされない社会であり、こんなに恐ろしい、抑圧された場となってしまう。制服や校則も教師という強者にとって都合よいように存在している。

「教師が教え、生徒が学ぶ」のが基本というが「教える」中身が問題である。教え過ぎて自分で決めることができなくなってしまうこともある。生徒が何を学びたいのか、一人一人の教師が考えて、教える。つまり画一的な内容ではなく、教師の感性や人格が前面に出るような。

河上氏の言う「プロ教師」には、私はなりにたくない。「教師」であるよりも、一人の人間として、生徒と対等な関係で話のできるプロ教師でありたい。(大阪・山崎叔子)

◆教師は何のプロとして要求されるのか？

疲労困憊で、冬休みというゴールに倒れ

込んだ今、子供たちのことなど、絶対考えるものかと自分に言いきかせていたところに、タイミング悪く、アンケートが届く。ウウン……モオウ……。

「生徒人権手帳」にあるような同僚や学校に對しても、実質の子供たちを捨てている親や大人たちにも、そして社会のしくみを改めず学校のみ理想を求める人々にも、そして、何もしない私自身にも、言いたいことは山ほどある。

しかし、それらをどう表現すると自分の気持ちにも、この記事にもピッタリかみ合うのか、全く私の手に負えない。はがゆさと、まとめねばという課題が、ずしりと残されたまま、また三学期が始まった。

今、私は公立中学校で「父さん」「母さん」「看護婦」「友達」、そして、それらの合間をぬって、「先生」役をも演じている。

ところで、中学校の教員は、やはりプロでなければならぬのでしょうか。プロだとすれば、何のプロであることが要求されるのでしょうか。

また、だれにも通じる「社会の常識」なんて、あるのかなあ、というのが子供たちの家庭を見ての実感ですが、教職30年近くやって

きて、ますます混乱している情ない私の昨今です。(東京・武田肇)

◆人権軽視の論理を崩そう

詳しく述べる紙幅がないので、極論になるが、基本的に学校と社会の常識は同じ線上にあると思う。社会には競争の論理、差別の思想に支えられた秩序があり、私たちはそこで生きている。学校を批判する世間も、多くは社会の論理を認め、子供にもそれを教えている。企業や組織では、はみ出すものを切り捨てているから見えにくいのが、学校ではそれを全員に集団的に強要しなければならない。

河上さんの論理は、秩序に人を当てはめていこうという論理であり、今の学校教育が陥っている人権無視の現実である。まじめに子供のためと信じて、管理をしているのが、学校の常識なのだろう。だから教師は、管理者になるといふ仮面をつけなければならない。

しかし、一人一人の人権を大切に考えるならば、根本から考え直さなくてはならない。本来私たちが求めるのは、家族や仲間の間にあるような、基本的な信頼関係に支えられ、自分も他人も大切にし、助け合って生きていく社会でなくてはならない。社会の人権軽視

の論理を、学校や、企業、地域、それぞれの場で崩していく輪を広げていかなければならないと思う。
(大阪・森 陽子)

◆教育にもっとお金をかけること

学校の常識と社会の常識は、ある項目では同じだし、別の項目では違うというように、一概には言えないと考える。学校社会は、やはり特殊社会である。

● 同年代の集団であり、● まだ学ぶ身である者の集団である、ということから誤り、失敗が大いに許される環境にある。失敗から学んでいく時期でもあると考える。我々が子供の頃「学校は温室である。社会へ出たら、とてもそんなことは許されない」とよく言われたが、現場において、やはり学校は温室であると思われるし、またそうでなければならぬと思う。

万引き、シンナー吸入、対教師暴力等、なんとか直そうと、どの教師も必死に取り組んでいる。社会での失敗は命取りになることが多いが、学校では成長へのワンステップである。

しかし、一方、いじめられっ子にとっては温室どころか、冷たい氷の教室である。とに

かくもろもろの問題を含んだ社会であることは、まちがいない。せめて一クラス30名に、授業時間が週20時間以下になれば、もっとも学校社会も住みよくなるだろうと思います。教育にもっとお金をかけなければなりません。教育にもっとお金をかけなければなりません。 (山梨・佐野美佐子)

◆「強制しても教え込まなければならないもの」に疑問

① については、埼玉教育塾についてよく知らないのですが、問にも答にもピンとくるものもなく感想がまとまりません。

② 校則批判、管理教育批判は、あつて当然だと思えます。子供たちには「校則だから守れ」というのではなく、人と人のかかわりの中で、どうしたらいいのかという観点から語っていったら……と思っっています。でも現実にひどい校則があり、私は「これに反対している」と言いつつ、校則として子供に伝えていきます。「強制しても教え込まなければならないものが学校にはある」という大前提には疑問を持ちます。

③ 細かい校則があり、それを守らせようとする教師がいるのは事実です。

④ 「持ち物検査」は、大きな人権侵害だと

考えます(時代に関係なく)。

⑤ 市民社会の論理と学校のそれとが異なるとすれば、それは学校の論理が、より理想的な場合合なのではないでしょうか。
(熊本・松島赫子)

◆生徒の目を輝かせるものは何?

率直に言って、自主性を身につけていない多くの中学生を相手に、早朝から校門で「おはよう」と声をかける教師、それには無反応の生徒たち、せめて遅刻ゼロにしようと、生徒会が立ち上がったとしても、遅刻は後をたたない。同じメンバーたちの遅刻。

授業、進路相談、私立・公立の高校の説明会や相談会、願書の受取り、点検、発送、調査書き、集金・清掃だつて、教師が共に働いてやつと完了。放課後の部活動に遅進児の個別学習、その間に生徒指導(家出や万引)、なんとすさまじい毎日のスケジュールを、私たち教師はこなしているのでしょうか。八時に登校、帰宅は七時、約十二時間労働の毎日です。中学校という現場は、多くのこのようになります。善良な? 教師によって、かろうじて持ちこたえています。

私の勤務校もやつと落ちついたと言っても

それは骨身惜しまぬ教師の数が半数をこえているからだと思えます。これが逆転すると、授業すら成り立たないばかりか、学校の機能はなくなり、互いの人権を踏みにじる、すぎまじさへと変化することは明白です。管理ということではなく、指導できる教師でありたいというも思っています。このことは、今生徒の目を輝かせるものは何かというアンテナを高く掲げる。そして、生徒たちを愛する私たちの思い入れの大切さを思います。

しかし、子供たちの情感は、確かにここ数年変化してきているのは事実です。人間って何？ 人間らしくって？ やっぱり家庭科の中で男女の共生を考えながら、がんばってみようと思うのです。
(兵庫・I・S)

〈高等学校教師より〉

◆人間として向かい合うこと

学校は、子どもたちが人間社会の後継者として育っていく場です。その場合、教師がどんな人間社会を展望しているかが問題ですが、私の考えでは、基本的なことは「人間どうし殺し合わない、傷つけ合わない、迷惑を

かけない」というルールを身につけさせ、人間尊重・人権尊重の意識を育てることです。

だから、市民社会の論理と学校の論理は、本質的に一致します。教師の論理と生徒の論理がぶつかり合うことはありませんが、本来理性で解決できない矛盾ではありません。

「プロ教師の会」の人たちは、教育困難といわれる状況の中で、人間として向かい合うことを避け、開きなおっているように思われます。何よりも、信頼しあい高めあうという姿勢が欠けています。

教育現場を担当し、内側から発言を続けている教師は、この人たちだけではありません。
(岐阜・田中 良)

◆プロ教師にはなれない、なりたくない

もしかしたら、私はその「教師の仮面」がはりついてしまっているのではないかと少し怖くなりました。いろんなところで啓発されながら「ねばならない」で動いてきて、でもこれが私のしたいこと、これが私の生き方、と思ってきたけれど、それはいつも「教師として立派に生きる」ことではなかったのかもしれません。

ただ河上氏のいう「プロ教師」には私はな

れない、なりたくない。生徒自身が自分の意志で一つ一つ選択をいいねにたどりながら歩を進めてほしいと思うから。そのための材料を用意しておくのが教師の仕事と思うから。その材料の一つに「私の生き方」も含まれているから。

でも、私は今、生身の私にちゃんと向き合ってくれる生徒たちと共にいるから、こういう言い方をしていられるのかもしいないと思います。
(大阪・村上昌子)

◆非合理的な管理・抑圧に抵抗は当然

90年度から校則が改正され、靴下、リボン登下校時のコート類が自由化された。生徒たちは思い思いの色やデザインを楽しんでいるが、だからといって、何か教育上問題が生じたとも思えない。いったい、今までそれらの「異装」を取り締まるために使われたエネルギーは何だったのだろう。怒ったり、取り上げたり「指導」が、ただ生徒との間に素漠とした関係を作ってきたことだけは確かだ。制服そのものがなくなっても、きつと状況は同じだろう。人為的に作られた校則に教師がしばられ、キリキリ舞いするこっけいさが、悲しいことに学校内部からは見えてこないの

だ。

教師自身が説明できない規則を「校則だから守れ」と生徒に押しつけるのは「学習指導要領には無条件で従え」と教師に強制するのと同じではないだろうか。

非合理的なものや管理・抑圧に抵抗するのは、人間として当然のことなのに、自由な市民を育てるべき学校が「市民社会の論理とは異なる」ところは、とうてい賛成できない。社会常識となぜかけ離れているのか、それこそを分析しなくてはならないのに。

神戸の校門圧死事件は他人事ではない。「校門を閉める側」「校門を閉めるのを黙って見ている側」でない教師が、いったいどれだけいるだろう。私も見ている側の一人。管理教育からの脱却は、まず自分の内部から、と自戒をこめて思う。(東京・坂本なえ)

◆彼の生徒になってみなくては

本当のことはわからない

正直なところ、本校(K大付属高校)は生徒指導の特別必要な学校です。ですから、私の思うこと、書くことは、多分現場を「全く知らない人」と同じでしかないだろうということ、初めに断っておきたいと思います。

ただし、あたり前のことなのですが、問題が起ったことではない！ ということではありません。ですから一旦起った時、多分普通の学校では小さなよくある事件として、いつものように処理されるであろうことが、本校の場合、とても大きな問題となり、教官一同、右往左往の大騒ぎをして、ながーい会議になったりもします。普通の学校の先生方が見れば、イライラを通り越して、こっけいにさえ思えるかもしれません。

昨年の春、ちょっとした事件(本校としてはとても大きな出来事でしたが……)がありました。それについての会議の席で、転動したての先生が意見を求められ、いわゆるマニュアル的な例を提示されました。私も時間が遅くなっていたこともあり、はじめ「これでいい!!」と思いました。会のムードもそうなりつつあった時、永年本校にいらっしゃる先生の一人が「私は、本校が他の高校の例に従う必要はないと思う。私も昔、他の高校にいたが、その時やはり『教師対生徒』の関係を『警官対他人』のようにしてみたり、事務的にことをすすめたりしたが、とてもイヤだった。本校らしく、生徒を個人としてみて、接するのが、本校のよい所なのではないのです

か？」と、断固反対を示された。そして会の流れも、私の心もその方向に変わりました。事件が起ったとき、それについて真剣に向きあい、考える。これは労力も時間もとてもかかり、大変なことです。そして、だからといって必ずしも結果がよいとも言えません。逆に判断が遅くなり、悪い方向に事がすすんでしまうこともあります。しかし、例が少なすぎてマニュアル化できない本校では、この方法が最もよかったと思います。ただしどんな学校でも、本当にマニュアル化なんてできるのでしょうか。その時代、社会にに応じて、その生徒にに応じて違ってくるのが、本当ではないでしょうか。その意味で、何も考えることのない教師よりは、自らをプロと名乗り、クールに見極めようとする姿勢も一つの方法としては良いのではないかとも思えます。ただ私自身、プロ教師になれなかつたし、なりたくもありません。本当のところ、一度彼の生徒になってみなければわからない……と思う私です。(石川・分校淑子)

◆市民社会の論理と学校の論理は一致すべき

(→)学校を①生きるための最低限の学力、知識②本当は家庭・地域でやるべきしつけ③集

団生活の中で人と一緒に生きる知恵、の三点を身につけさせるところ——については、①③にはほぼ同感だが、②については、当面学校がやらざるを得ない状況はあるにしても、本来の家庭・地域の教育力を回復して、そこに返すものと考える。これを学校の責任として留めることには大変な無理があり、問題もある。

(二)教師にとっての合理的と、生徒にとっての合理的が違ふのです。だから生徒に説得するのではなく「校則だから守れ」としか言いようがないのです。——については、(一)の①③を達成するために必要な校則ならば、教師にとつての合理的は、生徒にとつての合理的になるように説得すべきものと考ええる。この説得段階で教師と生徒に摩擦が生じて、これを回避すべきではない。

現場では河上氏の方式で「校則だから守れ」といふ言い方がなされ、教師の力で守らせていることが多いが、これによって作られる人間像を考えると大変問題がある。

また、学校として譲れない校則として、時間や服装をあげているが、服装については学校の思い込みに過ぎないのではないか。

(三)市民社会の論理と学校の論理は異なっています——日本のような脆弱な市民社会にあ

って、その論理を学校に持ち込んでスパッと切れるようなものではない——については、学校は市民社会で生きてゆく人間を育成していく所なので、市民社会の論理と学校の論理は、基本的には一致すべきものと考ええる。脆弱な市民社会とは何を指すのかはつきりしないが、市民社会と学校は上下関係にあるものではなく、同等の関係にあるものと思う。

(静岡・加藤千恵子)

◆学校が時代や子供に合わなくなった

この記事は新聞で読んだが、同じ教育の現場にいる者として複雑な思いがあった。社会の常識が通用しないというのは学校が閉鎖社会になつてきていることの証であり、その中の教師の感覚はどうしても歪んだものになつてしまふことを日頃から感じていた。彼の話は、社会の批判に対して居直つていいる形だが、残念なことにも今の学校、その中の教師の体質そのものを表している。彼の考えが特別なのではなく、多くの教師が彼と共通項を持つていいるということである。

学校の閉鎖性やこのような教師の発想が何に由来するかというと、年を追うことの学校での授業の成り立ちにくさである。多くの教

師はこれで困っている。おしゃべりや、無気力、妨害、非行に悩まされることが多い。その原因はいろいろあげられるのだが、学歴主義、偏差値主義も関係しているであろう。あるいは、全体に学校の授業が面白くなくなつてきてしまった、ということも言えるかもしれない。それは、テレビやマスメディアの発達に伴つて流される情報に子供たちの知的好奇心が鈍化させられてしまつていいるからという見方もできる。あるいはさらに、核家族化、地域社会の変化、物の豊かさ、消費社会など、子供たちを取り巻く生活様式の変化に伴つて各家庭の常識や文化が違つてきており、それを学校という一つの入れ物に集め、同じ価値観で集団として教育しようとするところにすでに無理が生じてきているような気がする。学校が時代や子供に合わなくなつていいるのである。

こういうことへの対策として、校則が厳しくなり、教師がそれに振り回され、校則を守らせることだけにエネルギーを浪費したり、教える技術みだいな変なことが教師に受け入れられたりする現実になってきているように思う。「プロ教師」などという発想も同じ土壌からきているように思われる。

社会の自由度が高くなっている時代に、学校だけがより不自由になってきている。学校が今までのような教育や管理運営のしかたを維持しようとするならば、どうしても閉鎖社会を作らざるを得なくなる。それは教員の身を守りためでもあり、もう少し社会との風通しがよくなれば、今の教師の価値観はもうくも簡単に崩されて、教師たちは自己喪失を経験するだろう。この閉鎖性の中で教師の感性はますます貧しく、教育や指導という名のもとに生徒の感性まで摘んでしまっているのが学校である。そのことが、この記事の内容に表れていると解釈している。

こういう情況下で一番の犠牲者は子供たちである。確かに子供たちの行動には困った問題も多々みられる。しかし、今の学校のやり方やこうした教師の下で、困り果てている生徒がたくさんいることも自覚しなければならぬ。現に、それで学校に行けなくなったり、感性を狂わせてしまう生徒を数多く目にしてるのである。教師は悩んでいることは事実だが、少し思ひ上がり過ぎていると言わざるを得ない。

この記事の内容にはいくつか腑におちないところがある。「生徒との関係をできるだけ

クールに」と言っておきながら、愛情（*カク*）に「というところからは出てこないはずの言葉だと思うのだけど）があれば「持ち物検査」までして生徒の人権を無視してしまうということや、「危険なこと」といっても、何が危険なのか？ 自分が危ういだけではないかかと思ったりする。この記事の論理は、学校を収容所や飼育所（調教の場）と捉えれば無理なく説明できる展開になっている。そこには、人間の教育という視点がすでに欠けており、これでプロ教師だと言っていることに恐ろしさを感じてしまう。プロの調教師ということなのだろうか？（埼玉・納巳孝志）

◆今の社会を前提に、常識を是とし

論を始めてはならない

生きることは、絶えず学び、成長していくことだ。子供であれ、大人であれ、同じことだ。そして、その過程は、紆余曲折・試行錯誤という言葉が、そのまま当てはまるものだ。その際、すべての人間が一律の成長を遂げるわけではない。これが常識となっていないのが今の学校だ。社会に「有為な人間」を効率よく「育成すること」が、学校の「目的」となっているからだ。そのために作られた管理

体制、その具体的な姿の一つが校則であり、「学校の常識」である。

ところで今の日本人がのびのび生きられる社会だろうか。民主主義が国境の外に立ちすくんでいないか。今の社会を前提に、そこでの常識を是とし、論を始めるわけにはいかないのだ。我々大人は、日々、民主主義の徹底を目指して発言・行動せねばならない。この点に無自覚のまま、「教師」の仮面をかぶり、教育について発言しても何も生まれはしない。（静岡・武田憲幸）

◆生徒との信頼関係を結ぶことこそ

新聞記事を読み、いらだたしさを感じました。このような低次元の議論にまきこまれてはいけなと思います。

高校教育の目的は、社会に出て自立した人間になること、生きていく力を身につけることだと考えています。そのためには、時間を守るなどの基本的なルールを身につけることももちろん必要です。校門死事件を例にとれば、遅刻してくる生徒に対して、何らかの指導をしなくてはなりません。しかし、登校してくる生徒に対して、校門をしめることが指導と言えるでしょうか。まして、圧死させ

るなどということは論外です。校則に違反するから遅刻してはいけないのではなく、遅刻することそれ自身が、社会のルールに反することになるから、してはいけないのです。そのことを、遅刻した生徒に対し、言葉で説得することが、最良の方法であると信じています。それには、生徒と信頼関係を結んでおくことはもちろんのことです。授業を基本として、生徒と信頼関係を築くことを忘れてはならないと思います。

学校は、生徒にとって生活の一部であってすべてではありません。現在の学校のように生徒の学校外の生活までを教師が指導しようとするのが、教育をゆがめる結果になっているのではないのでしょうか。学校が、つまり教師が、そこまで生徒の生活に介入する必要があるのでしょうか。「学校と社会の常識は違う」のではなく、「学校の常識が社会の常識」であるはずです。

もう一度、高校教育の目的に立ちかえり、日々の授業を大切にしてゆきたいと思えます。

(千葉・中山雪江)

◆教師は世間知らずの小権力者

記事中「人格で勝負しようと思いがあって

……傷つけることになる」という箇所と同感です。生徒との関係をクールに見つめながら熱血部分と使い分ける教師が理想ではないでしょうか。

実際、休みがちな生徒を三、四人抱えている担任は、まめにしつこく登校するよう指導します。しかし、登校拒否との境界にいる生徒に「学校に来い」は絶対禁句だと知り、絶句。私はまだ担任を持っていませんが、自分に意字か登校拒否か見分ける力はない。知識や経験もない。知らないうちに誰かを追い込んでいたのではないかと。これからは……？

教師の中で、カウンセリングなどの知識をかけたことのある人がどれ程いるのか。もしいたら、あんな指導ではないと思うのだが。私もこれから担任を持つことになるだろうが、とても不安なことがある。「頭髮検査」「異装チェック」etc. 記事中、教師の方に生徒を合理的に納得させられるような理由がないから「校則」という印籠を示すのだ、とあったが、私も生徒といっしょに「どうしてやろうねえ」といって、印籠を眺めてしまえそう。

私の学校に来て頭髮検査を見たAETのオーストラリア人の女性は「全くクレイジー

だ。どうしてそんなことまで学校でしなくちゃいけないの？ あなたたちの仕事は、勉強をしつかり教えることで、こんなことをするのはばかっている」と言った。その通り。

でも、ここまでしないと学校は荒れるし、PTAにも言われるし……どこまで本当で、どこからが言い訳かわからない。自分自身でも全く納得していないのだから。一つ言えることは、学校内の常識と世間の常識はズレていて、教師は世間知らずの小権力者である、ということだ。

(大阪・佐藤友紀)

◆人間同士として

強制してでも教え込まねばならないものが学校にはあるのでしょうか。学校は、基本的にいろいろの人間が集まって人間関係を作ったり、互いに知らないことを分かり合ったりする場だと考えます。

教師が生徒よりすぐれているとか、えらいから強制して学力をつけさせたり、何かをやらせたりすることではなく、少しでも生徒たちより長く生きている人間が、これから未来に生きぬく人間に、自分たちの失敗や、生きていて「このほうがいいよ」ということを伝え、生徒という人間が、より生きやすいよう

にアドバイスすることだと思いません。

時間に遅れば、人間同士の信頼を失うこともあるけれど、話をして原因を分かり合ひ、解決する道を互いにみつけれう。そういうことが人間同士ですから可能だと思います。人間として、自分が他人にされたらイヤなことを、他人（生徒）にすることはできないし、教師だから許されることではないと思いません。（埼玉・八島紀子）

〈大学教師より〉

◆生徒から「教わる」ことも多いはず

私は九州歯科大学勤務ですので、該当しないのではないかと思います。しかし、学生を教える立場にある者として感想と日ごろ思っていることを述べたいと思います。

1の質問の中で「自分のありのままの姿で教育できると思っている」ことが「人格で勝負しようと思いが、ついでに、生徒の内面に、土足で踏み込み……」ということにつながるとおっしゃっていますが、私は教師というものは、単に知識を伝達する技術者ではなく、その人の生き方が、生徒や学生の前で

問われる存在であると考えます。よって、自分のありのままの姿を示すことも大事なのではないでしょうか。

2で、教師と生徒の役割が決まっているようにおっしゃっていますが、教師は一步先に生きている者として「教える側」にあるかもしれませんが、と同時に生徒（学生）から「教わる」ことも多いはずで、この交流がないと、教師というのはむなししい存在だと思います。過去に教職にあった人が、家庭や地域に溶けこめないとされているのも、いつまでもその役割にしがみつき、その仮面を脱げないことから生ずるものではないでしょうか。

校則で髪型や衣服などを細かく規制することで、どんな人間が育つのでしょうか。管理されていなければ、自分自身を律することができない大人を作り上げているような気がしています（大学生を見ているとそう思います）。女子学院の院長だった矢島揮子のような決断と信頼が必要でしょう。

現在の日本社会で「なれあい」という言葉がやたら目につく時代に、何故教育現場だけが一方通行でなければならないのか不思議に思います。教師も一個の人間、自分の育った

子供の頭を思い出して、person to personな教育をしてほしいし、私もそうありたいと思う。（福岡・下田妙子）

’91年We夏季フォーラムのテーマは

出会いは歴史をつくるⅡ

— 違いとつきあう —

Weの会とウイ書房共催のWe夏季フォーラムも、今年も9回目。八月二日、四日東京八王子の大学セミナー・ハウスで開催が決まって、準備が始まりました。

昨年につづくテーマのパートⅡとして今年も「違いとつきあう」としました。異性との関係、異文化との関係など、これまでWeで積み上げてきたものを、もう一歩進めて、もっと大きな観点からとらえていこうというものです。

実行委員会ではこれから、シンポジウム、分科会など細部の構成を考えていきます。

どなたでも、参加できますので、お気軽に誘い合せて、実行委員会にいらして下さい。

問合せ先 フォーラム事務局 青木真代江
(03-5320-1130 ウイ書房内)

教育の現場

納已孝志



学校というところが、いつのまにか窮屈になりだした。規則がやたらに増え、偏差値が絶対的価値観を持つようになってきた。学びの場であったはずの学校が、教科書というマニュアルを教えることと、規則への従順を強いることと、選別を行う場になってしまった。学校から人間くささとドラマが消えてしまった。何故なのだろうか。

戦後、日本の教育は大きく一八〇度転換した。戦前の軍国主義の教育から、民主教育へと天地逆転の価値観の変化であった。占領という外圧からもたらされたものとはいえ、日本の教育にとっては歓迎すべきことであった。しかしながら、今また教育がおかしくなりつつある。

日本の社会は戦後の窮乏期から急速に経済復興を達成した。昭和30年代には高度経済成長期に入り、経済優先の価値観が人々に定着するようになった。人々の間に経済的なゆとりが生じると、子供の進学率が急加速でふえた。受験競争

が激化し、親の進学熱が過熱し始めた。

昭和40年代中頃、学園紛争の嵐が吹き荒れた。やがてそれが沈静化すると、学校が荒れ出した。校内暴力、非行、シンナー、と大人たちが心を傷める現象が頻発した。授業を成り立たせるために、教師たちは一致団結を合言葉に生活指導に全力を傾けるようになった。学校が表面的に静けさを取りもどしたように見えた頃、今度はいじめと登校拒否が静かに進行した。今、学校に残されているものは、生活指導（規則と処罰）と進路指導（受験指導）だけである。学校から人間教育の観点がなくなってしまった。

社会が、価値観が、生活が、家族関係が、学校が変化し、教師が変わり、生徒が変わってきた。これらが互いに関係し合いながら、教育の現場で様々な問題が起こっている。

私たちの生活はひと時代昔にくらべ、物質的に豊かになった。しかし、けっして心が豊かにならなかったわけではない。むしろ

る経済繁栄のかげで、人々は精神的に病み、疲れ、傷ついている。それは地域で、職場で、家庭で起こっているが、その最たるものが学校での子供たちの問題である。学校は私たちの社会の縮図である。現代社会の矛盾が、無防備で感性豊かな子供たちにしわ寄せられ、彼らの心を引き裂いている。

幸か不幸か、私はこの十数年教育の現場に身をおいてきた。しかし、この数年というものは学校というところに息苦しさを感じ始めている。生徒たちも同じような感覚が見てとれる。生徒から希望というものが感じとれないのである。

時代の推移とともに、学校はすさまじい風の吹く木造校舎から、密閉された四、五階建てのコンクリートの建物にかわった。外観は立派になった。しかし、外界から閉鎖され、堅固でそう簡単には壊せない構造だ。抜け道があつたり、息抜きが出来たり、そういう許容量がなくなった。いろんな生徒がいて、いろんな名物教師がいて、そういうこともなくなつた。いいかげんなことのすべてが許されなくなつた。生徒はいつもオドオドし、私のような教師もまた同じである。他から非難されないように、生徒をビンビン締め上げておかなければならない。少なくとも、そうやっているふりをしなければならぬ。そして、教師という職務に忠実になればなるほど、人間味が消えてゆくのである。教師はやたら忙しくなっている。つまらない、余計な仕事と思えることがどんどん増

え、そこに意味を見いだしてゆく。教師には心のゆとりがなくなつた。いつのまにか学校は、卒業の資格を取るための収容所という、容れ物に変わってしまった。

教育の現場で日常行われていることが、私の脳裏には不協和音として響いてくる。教育の現場で何が起きているのか。私の見たこと、感じたことを私の感覚がマヒしないうち

放牧

この地方では近年にないめずらしい大雪が降つた。この日、あるクラスの授業で生徒たちが雪合戦をしたいと言ひ出す。自分の高校時代、授業をつぶして雪合戦をした楽しい思い出がよみがえり、即座に「やるう」と合意した。

皆が喜んで外に飛び出していくと思いきや、なかなか教室を出ていこうとはしない。準備に手間ひまがかかる。体育着に着替えたり、ビニールのゴミ袋に穴をあけ首と手を通していたりしている。廊下に出たり人ったり、ワイワイ大騒ぎをしながら、でもなかなか教室から出ようとしない。これでは時間がなくなってしまうし、隣の教室では授業をやっている。ハラハラ！ ドキドキ！ あとで周りから「ひんしゆく」を買うかもしれないと彼らを追い立てる。

まるで外に出ていこうという雰囲気のない数人がいる。

「先生、全員外に出なきゃいけないんですか？」

「えっ！ みんな、やりたいんじゃないの？ みんなが

やりたいって言うから……」

「風邪ぎみの人でもやるんですか？」

二カ所にかたまっていて動きそうにない。正直、当惑してしまつた。このまま数人を教室に残しておく、隣近所の授業に影響が……他の教師に見つかったら注意を受けることだろうし……。つまらぬ心配が次々と浮かんでくる。教師はこんなことまで考えてしまう。そんなどうでもよいことを、生徒を常に疑つて、管理して、オリに閉じ込めて……。

ようやく外に出た連中は元氣一杯に雪合戦を始めていた。

校舎の内と外でも始まつた。

「こらー、校舎に雪を入れるな！」教師が怒鳴っている。

「あつ、まずい！」あわてて走つていって注意をし、場所を移動させる。

こんどは三、四人の自転車部隊が来た。雪の上を猛スピードで走つて、ブレーキをかけ、スリルを楽しんでいる。おもしろそう！ だが、これも「まずい！」授業をしている校舎のすぐ脇である。授業を受けている生徒の関心がこちらに集まってしまう。教室の中の教師の呆れ顔が想像できる。また走つていって注意をする。

あっちへ走つたり、こっちへ走つたり、怒鳴つたり、あっちに気を使い、こっちに気を使い、こちらが先に汗だくだ。放つておくわけにはいかないのが悲しいところ。学校では雪合戦ひとつ自由にはやれなくなつてしまつた。

ほかに二クラスが雪合戦に出ている。同類がいた、と安堵感を持ったのも束の間。担当教師はピイピィーと笛を鳴らし（用意が違う！）、生徒を集めて出席を確認している。

放課後、他の教員からは「生徒を『放牧』しては困る」と冗談ながら苦情を言われた。「放牧」とはなかなかうまいことを言う。今日の雪合戦は「放牧」なのである。本当に学校では生徒を囲いの中で飼育しているようなもの。でも現実そうなのである。後日、生徒にこのことを話してみたが、「俺たち『牛』かよ！」と笑っているだけで、別に怒るふうもない。

豊かな現代の日本、生活空間や衣食はほぼ満たされている。彼らの姿の中に、家畜を連想させられる。物は充分与えられている。生活はまあまあ快適。しかし、見えない柵で囲われ、そこには教師という鞭を持った監視人がいて、自由に飛び出すことを禁じている。ピッと笛を吹けば集合し、次にピッと鳴れば解散する訓練を受け、やがて育ち具合によって等級に分けられて社会という市場に出される。そんな中で「自分の将来を考へろ」などと言っても、無関心になるのは

無理からぬことなのかも知れない。彼らに許されているのは、与えられた環境の中でいかに自分の商品価値を高めるかだけ。あーあ！ 教師稼業がつらくなる毎日である。

サボる

今朝は九人もの生徒が来ていない。出席を取り終わる頃に、四人が駆け込んできた。残るは五人。このクラス、遅刻・早退・欠席が目立つ。こういうクラスは問題が多いとされる。担任の指導が「甘い」からだと言われかねない。

一時間遅れでやっと一人がやってきた。遅れた理由は腹痛によると言う。とてもそのようには思えない。教師は生徒の話を疑う習慣がついているのである。教師はよく生徒に欺かれる。生徒は苦し紛れに言うのであって、欺くつもりはない。生徒の言うことは、嘘であったり、本当のことであったり、話はややこしくなる。近頃は、なるべく生徒の話は信用することにして、騙されるのも仕事のうちと割り切っている。

この学校、遅刻をした場合、すぐには教室に入ってはいけない規則になっている。職員室に来て、遅刻証明書というものを教師に書いてもらい、それから授業に出させてもらう。この際、遅刻の理由を聞かれ、厭味を言われ、注意を受けてようやく書いてもらう。教師二、三人がよってたかって注意

をすることもある。ようするに嫌がらせをして「遅刻するとこんな嫌な思いをするんだよ」というデモンストレーション。これで遅刻を防止し、生活習慣の乱れを防ぎ、学校の規律が緩まないようにという苦肉の策。したがって、すんなり生徒の言い分だけを聞いてはいけけないのである。疑って、相手の非を認めさせて、強く注意する。これが教師の義務ともなっている。それでも、遅刻は減らない。

午前中の授業が終わっても残りの四人がまだこない。連絡もない。それぞれの家庭に電話連絡をとる。これが担任の義務ともなっている。連絡のついたのは一人だけ、近頃は共稼ぎの家庭が多いせいで、たいていは留守がちである。それにしても、以前は生徒が学校に来ていないからといって、逐一家庭に連絡を取るということは無かったものだが、いつしかこまかく管理的になってしまった。生徒たちは親や教師に常時監視されていて気の毒でさえある。そんな後ろめたさを思いながらもダイヤルを回す。

昼過ぎにようやく三人がノコノコ一緒にやってきた。三人が共謀して午前中の授業をサボったことは間違いない。悪い遊びに手を出してなければよいと思うのだが。どこへ行っていたのかだけは知っておきたい。心配なので放課後彼らを残し理由を聞く。

三人はやや緊張気味に神妙な態度でやってきた。一年生、

まだ「かわいい」ところがある。市立図書館で勉強をしていたという。今朝たまたま駅で会い、学校へ行くのもつまらないからと三人で合意し、行く先を変えてしまったとのこと。定期テストも近いし、内心ホッとす。でも安心するのはまだ早い。嘘かもしれない(疑り深い習性か頭をもたげる。教師は必ずこう思う。まったく悪いクセだ)。さらに問い詰め、ようやく本当らしいと確信する。

安心はしたものの、これですますわけにはいかないのである。担任としてしめしをつけておかなければならない。語気強く、彼らの反省を求め、二度と繰り返さないことを誓わせる。これで一件落着、と思いきや「お前らの家にも今日のことを連絡しておいた」という最後の一言で事態は急変した。

三人のうち一人が急に荒れ出した。たった一人家庭連絡のついた彼である。「何で家になんか連絡するんだよー」猛烈な勢いで怒鳴り出す。「いちいち電話なんかしやがって」「他のやつだっていっばいサボっているやつがいるじゃねーかー」「俺はっかに……」「おっかしいんだよー！この学校は……」「つまんねーからサボって何が悪いんだよー！」三白眼で私を睨み、わめきだす。瞬間、私も「ムッ！」として「何だ！その態度は。何だ！その言い方は。自分でやったことを考えて見る。家庭連絡するのは学校のきまりだ。そんなことは分かっていることだろー。誰にだってやっていること

だ。お前だけじゃない」。こちらも語気荒く言う。

他の二人は、うなだれていた首をさらに低くして「まずいなーあいつ！あんなこと言い出しちゃって、これは長びくなー」と、時の過ぎるのをじっと耐えている。私は内心、厄介なことになってしまったと思いつつ、とりあえず二人を先に帰し、彼と二人だけで話を続ける。

よく見ると、かれの頬は引きつっており、涙ぐんでいた。「家に帰ったら、殺される目に合うんだよー。ばあばあ(母親)と同じいー(父親)がうるせえんだよー。何かっていうとすぐ殴りやがる。自分は会社で偉いと思って、つけあがりやがって。何様のつもりだ、クッソー。ふざけんじゃねーや」「俺はぶっ殺してやるんだ！親父をぶっ殺してやるんだ！絶対ぶっ殺してやりてえー！」「俺は親父をぶっ殺すために部活(運動部)をやっているんだ！」「塾だってあいつらのために行ってやっているんだ！」

私はようやく事態を把握した。彼が気の毒になってきた。背筋に寒気の走るのを感じた。努めて語気を和らげ、彼の話を聞いた。父親は小さいときから、すぐに暴力を振るったらしい。そうやって育てられてきた。父親が怖くてしかたがない。すぐに怒り出す父親には逆らったことはない。妹が一人。妹の方は優秀だから怒られたりはしないという。祖父母とも同居している。祖父母も彼にはうるさく感じられる。祖

父は病氣療養中。早く死ねばよいという口調である。

彼は耐えて耐えてきた。今はその小爆発。父親の前でこんな乱暴な口をきいたことはない。家では逆らったことのない「お利口さん」を演じている。他人行儀とさえおもえるほどいいいな口調。朝起きてくると、まず祖父母と父親に「お早うございます」と挨拶する。彼の目覚めは早い。学校では緊張するので、早めに起きてトイレをすませます。朝食はラーメンかうどんそしてご飯を食べる。おかずは焼き肉みたいになってりしたものの。パンやお餅が追加されることもある。ポリニームたっぷり。彼の好きなものは何でも母親が作ってやる。時折学校で腹痛を訴えてくることがあった。

授業が終わると部活動に励む。それが終わると塾に行く。夕飯は外のファーストフードの店でハンバーガーなどの立ち食いですます。そこから家に「これから帰る」と電話する。

私の前にいる彼を親が見たらビックリ仰天するに違いない。そして、彼の家は暴風が吹き荒れるだろう。

「学校では喧嘩の強いやつに気を遣い、家でも目いっぱい気を遣っている」。彼は優しい、神経の細やかな生徒である。「今日も自分はサボりたくはなかった。友達関係を気まぐれさせたくなかったの、ついて行ってしまった。彼らには数学を教えた。教えることは好きだ。先生になりたい」。先生になることは小さい頃からの夢である。そのことを父

親に話した時、ひどく怒られたが、中学生になった時にまた話したら「しょうがない」とあきらめ顔で言ったそうである。彼に対して親の思い入れがあるのだろう。彼の恐怖感はずに小学校のころに作られ、それを何年も抱き続けている。今は父親との会話はないという。彼の方で意識的に避けている。力に対して異常に恐怖感を抱き、それを克服すべく部活動に励んでいる。友人関係でもそうである。

生徒たちは限られた世界でしか生きていない。家庭と学校である。生活の場での体験が圧倒的に不足している。いろいろな人と接する機会が少なく、多様な人間関係を経験しにくい。いわば純粹培養だ。それに比べて、家庭と学校での人間関係が濃密になりすぎている。どちらか一方の人間関係がおかしくなると、いろいろな問題が起きる。生徒たちは傷つきやすく、人と人との距離の取り方が難しい時代だ。

興奮が冷め、冷静さを取りもどした頃「さっき言ったことは本気か？」と聞いてみた。「殺しはしないけど、家を出る時は親父をぶん殴る」と言う。言うだけ言ったらすっきりしたようで、寂しげに帰っていった。いつか起こるであろう彼の大爆発が心配だ。涙をためた目が今も焼きついている。

結局この日の出欠席は、欠席1、遅刻8という結果。今日も一日がやっと終わった。

湾岸戦争についての

夫婦の対話



村田 尚子

《まえがき》アメリカ軍のイラク進攻の翌日、マスコミに対抗する「もうひとつの見解」という記事を、「戦争は最大最悪の暴力」「最大最悪の地球環境破壊」という訴えと共に私のミニコミに発表したところ、半田さんから、同趣旨を夫婦の対話という形で紹介せよとのご依頼がありました。妻がきいて夫が答えるなんてステレオタイプですが、今はそんなことも言っていられませんから、とりあえず、この問題についてのわが家の夫婦談話を要約再現してみます。

Q TVでは人間の姿がでてこない。イラクの側の言い分

もほとんど報道されないみたいだけど。

A メディアの無責任が問題。国連は74年の新国際経済秩序の宣言に続いて、情報新秩序を問題にしていた。発信源のひどい偏りを批判し、もっと「声なき民」の声をとりあげなければ国際理解も進まない。独占禁止法と同じように、商品化された情報や巨大メディアに規制をという発想がユネスコからでて、これが84年米英のユネスコ脱退のもとになった。情報化時代というのに、子どもメディアはほとんど米軍情報の取次ぎに終始している、戦争の惨禍の実情も現地の草の根の人民の声もほとんど報道されていない。

Q 「侵略の排除」というブッシュの主張も眉つばね。

A 国際法上の侵略とは、「主権」の侵害のこと。アラブのサダム支持の根拠は、クウェートが西欧で理解されているような「主権国家」ではないという認識があるからだろう。旧トルコ帝国傘下の中東はイギリスに蚕食され、第一次大戦後はその委任統治領になった。統治国は統治領の自立を助ける責務があるのに、イギリスは石油利権確保を主眼とし、32年イラクが独立した時も、クウェートだけは保護領として除外した。イラクのクウェート回復要求が強まった61年にはクウェートを独立させてイラクの要求を退けた。クウェートの首長(王族)支配には、シーア派人民の反抗もあって、米

英資本のてこ入れなしにはもたない国だったからね。

Q 何よ、そのシーア派って。

A キリスト教、仏教と同様イスラム教にも大乘小乗各派があつて、スンニー派とシーア派がその二大潮流。教義の話はともかく、王族や体制派にはスンニー派が多くて優勢、シーア派にもいろんな分派があるが、大体は貧しい人民の間に多くて過激派もいる、というのがあらましかた。

中東理解には対立する諸要素の理解が重要。①ユダヤ対アラブの民族対立。イスラエルは米英ソ国家政策の落とし子で、そのパレスチナ抑圧の排除のためには統一大アラブが必要とされ、これがサダム人気根源。②アラブ対ペルシア（イラン）の民族対立、イラク多数派対クルド民族解放戦線など。③富をもつ体制派対貧しい人民。④油田国対非油田国。⑤石油市場をめぐる利権対立。⑥スンニー派対シーア派など。

イランはもともとシーア派が大勢で、79年にそのホメイニ一派の革命がおこった。サダムはスンニー派で、国内のシーア派やクルドを抑えるためにも、革命のどさくさにつけこんで80年にイランに進攻。これこそまぎれもない侵略だったのだが、各地のシーア派貧民の反抗に手をやいていたアラブ諸国体制派はこぞってサダムを応援。米英仏ソ中もそれぞれの

おもわくからサダムを援助して、その育成を助けた。だから、そのサダムがこれまでの「恩義」に背くようにな

つたのは、米英国家政策の破綻の現れともいえるだろう。

Q そういえば、イランに呼応しそうだつたクルドの村々にサダムが毒ガスを使用した時は、日本のマスコミは今ほどその非人道性を問題にしなかつたわね。

A サダムの反イラン政策をアメリカが支援していたから。サダムは中東のヒトラーだというが、あのヒトラーだって、アメリカ資本に育てられて強大になったのだった。

Q ヒトラーの時代とは情報化の度合もちがうのに、C-I Aは何をしていったんでしょうね。

A 気づかなかつたわけではないね。考えてもごらん。事件以来、ブッシュのしたことは全部、武力による威嚇と武力の行使だけだ。話しあいの姿勢は全くの見せかけだけ。フランスやアラブ諸国などから「平和的解決」の動きはあつたが、ブッシュは終始一貫武力の誇示ばかりでその動きを牽制し、現地の人民の声にも、それを部分的には代表しているサダムの言い分にも、全く耳をかさうとしなかつた。

Q サダムの言い分って？

A イラン侵略に失敗したサダムには莫大な戦費の負債が残つた。そのあと始末は石油価格に頼るほかない。ところが石油市場にはメジャーと結託したサウジやクウェートの発言力大きい。サダムは市場に介入したいだろうが、これはアメリカ財界と対立する。それと、サダムとしては、対イラン

戦争は、アラブやスンニー派を代表して、サウジやクウェートの王族たちのためにもやったのだという意識がある。なに、クウェートとは負債の償還でもめた。サダムは棚上げや償還期限の延期を要求していたし、クウェートによるイラク油田の「盗掘」問題もちだして交渉したけれど、この交渉は90年7月に決裂した。この決裂には、もちろん米英のさし加ねがあったはずだ。クウェートの王族たちはサダム進攻を予期していて、資産の移転保全もすませていたし、さっさと「国」を捨てて逃げてしまったからね。

Q その動きがわかっていたとしたら、なぜアメリカは見逃したの？ 事前にうつつ手があったはずなのに。

A アメリカは戦争をやりたい気配だった。武力の誇示で問題を解決することで、軍備の強大化や軍事活動が今後もあるのだということを、国民に納得させたかったのだろうね。

何しろ、アメリカ政府はこれまで、世界中で、ずいぶんとひどいことをしてきた。中南米でも東南アジアでも、世界中で、分配の不平等と搾取に苦しむ人々のたたかいはある。アメリカ国防省はこれを「低強度戦争」と呼んできたが、実体は「低」どころではない。それが激烈にならざるをえないのは、アメリカ軍がどこでも体制側にとって、人民の解放努力の抑圧を助けているからだ。人民が選挙で勝った場合でも、武力介入で制圧した。サダム以上の蛮行をくり返してきた。

産軍複合体の権力はたいへんなもので、経済の地盤沈下や国家財政危機の原因の一端も、その権力維持の負担にある。

そうしたことが許されたのは、「東西対立」というわく組みの中で、「諸地域の人民の解放闘争はソ連の国家政策に連動している、ソ連はアメリカ主導体制の破壊をたくらんでい、その動きに連動する芽はすべてつぶせ」という理屈のおかげだろう。ヨーロッパをはじめ、世界中に配備されたアメリカ軍の存在理由は、「邪悪で強大なソ連」という前提があつてはじめて成りたつものだった。

ところが、その前提が崩れ始めている。「ソ連の脅威」はないことがあきらかになり、米軍基地もいらなくなった。新しい国家連合を模索するECは、やがて人口6億に及ぶ大勢力として登場しようとし、アメリカの覇権は崩れ去ろうとしている。「ソ連の脅威」に関する古い「情報」が洗い直されていけば、これまでのウソやゴマカシがあばかれていく可能性もある。ベトナム戦争の場合と同じように、アメリカ軍が犯した数々の悪事についての言いわけは、これからは通用しなくなるおそれも強くなった。彼らとしては、どうしても、「軍の威信」と軍の有効性を誇示する機会が必要だった。

サダムが「英雄」になりたいのと同様、ブッシュも再選のために世論をだきこむ冒険を必要としていたしね。

Q ブッシュのひどさはわかってるつもりだけれど、世界

最大規模の油田地帯で戦争を始めれば、ひどい環境破壊になるのに。原子力施設の爆破は放射能汚染になるのに。

A それをあえてやるのが軍と資本と国家の論理。メソポタミアには人類共同の貴重な文化遺産も多いのだが。

Q 国連は今まで、自然と人間の文化を守るために努力をしてきたのに、どうしてそんな論理に同調したの？

A 国連の総意ではない。安保理の多数派がブッシュに一時的に同調しただけ。仏ソは平和解決の主導権を握ることで権威を高めたかったのだから、ブッシュとは同床異夢。イギリスは最強硬論を進めることで内政の失点を回復し、仏ソのおもわくをつぶしたかっただろう。天安門の中国は論外。開戦強行はアメリカだけの方針にすぎない。

Q これからどうなると思う？

A 米軍情報は全くあてにできないし、「事情通」とやらの解説は早くも馬脚を現している。我々は全く情報不足だけれど、無数の人命が失われ、数十年規模の悪影響が残ることだけは確実だ。ブッシュや自民党や巨大メディアが試みるはずの必死の情報操作も問題。麻薬禍や子どもの難民化に象徴されるような社会の退廃も、ベトナム戦争をきっかけに進行了た。ブッシュへの同調がきわだつ日本もイスラエルも、長く、イスラム世界人民のとけ難い恨みを受けることになるだろう。問題処理が武力対決だけに委ねられているところ

は、テロリズムの反撃は避けられないだろう。

Q 希望はないの？

A アメリカ下院ではクラーク元司法長官らがブッシュ弾劾罷免決議案を準備している(毎日新聞)。サンフランシスコ市議会は全会一致で「反戦宣言都市」となり、同市を反戦運動家や逃亡兵士の避難所とするため、彼らへの捜査や抑圧に協力しないことを決めた(SFクロニクル紙)。人民の反戦運動の苦難は強まるだろうが、やるしかないだろうね。

ベトナム・アフガン・東欧の教訓のひとつは、軍事力万能の時代は過ぎたということだ。産軍複合政府群の壮大な崩壊を見たいものなのだが。

《あとがき》中東平和に関する数々の国連決議に背を向けてきたアメリカ政府、人種差別撤廃条約や子どもの権利条約に批准の準備もなく、南ア問題では国連総会の名指しの非難決議を受けた自民党政府などに、「国連」を口にする資格はない、と私も思います。夫婦の対話は毎日にぎやかですし、いつも妻の方が聞き役なのではありませんが、以上は'91年一月末段階の話のあらましです。夫の友人のマーチン・ホイルズさん(レターボックス社刊 村田直文訳『子どもをめぐる政治学』の原著者)も、ロンドン大学教授の夫人とごいっしょに、イギリスの反戦運動に奮闘しておられます。私たち夫婦も、ささやかながら努力を続けたいと思っています。

わたしの

一九九一年一月十八日

金田 富佐江

湾岸戦争が勃発して二日目、じっとしてはいられないかった。反対の声を一刻も早く行動で示さなくてはいけない、そんな思いでいっぱいだった。

テレビも新聞もなんだろう、まるで興奮状態で戦争の状況ばかり伝えていく。反戦の記事はなんと小さな扱いだろう。戦争をひきおこさないで欲しいと、あれ程人々が願っていたのだから、もっとそういう記事を取りあげてくれないのには。僅かに見つけた記事は、「戦争を許さない女性たちの会」のアメリカ大使館前の集会ぐらい。朝方のテレビのニュース

でチラッと放映されたのが渋谷ハチ公前の広場。こちらはアメリカの若者がこの戦争が終わるまでだれかが交代で反戦歌を歌い続けるというものだった。

行ってみよう。あそこは、女たちがマラソントークをやったり、いろいろな集会をやるところだ。今日のような日、きっと私と同じ思いの人たちが三々五々集まっているかもしれない。私も行って「私」の意志表示をしよう。

雑踏をかきわけてやっとたどりついたハチ公前は閑散としていた。テレビで紹介された若者が奏でるギターの音と、すこし離れたところで日本山妙法寺の僧侶がたたくタイコの音が流れていた。日は当たらないうえに、この日は寒い北風が吹いていた。立ち止まって聞いている人はだれもない。若者たちは楽しげに行き交っているし、待ち合わせの人たちは無関心をよそおっている。

いま、世界でこんなとり返しのつかないような戦争を始めてしまっているというのにこれでいいのだろうか。反対の声だけがこの戦争を止めさせることが出来るというのに……世界中の人々の反戦のうねりだけがこの戦いを止めさせることが出来るというのに……これでもいいの？……。

半田さん、その節は突然電話をおかけしてすみませんでした

た。はやる気持ちで渋谷まで出掛けたものの「私、これからどうしよう」なんて電話をかけてしまいました。ウイ書房にはきつと何か情報が入ってると思っただけです。半田さんが電話口に出られてすぐに私の意図を汲んで下さいました。

「十分程してもう一度電話をして下さい」とおっしゃる口調にこの戦争に対するやりきれない思いがこめられているようでした。それからは、半田さんのぶんも私が一緒に、みたいな気分になって急に足どりも軽くなりました。

「婦運会館に行つてごらん下さい」というアドバイスを受け、本当によかったと思います。会館に入ったとたん、かながわ女性会議の大槻さんにバッタリ。「どうしてこんなところに?!」びっくりしていましたが、わけを話したら「うん、うん、そういうことなら婦人有権者同盟の事務所に行らっしゃい、今、帰ろうと思って降りて来たところだけど、もう一度もどってあなたを紹介するから」と言つて三階の事務所まで、いま降りてきた階段を上つて下さった。大槻さんのこの行為からも、戦争への怒り、くい止めたいと願う気持ちがひしひしと伝わってきた。事務所内も同じ思いがみなぎっていた。

有権者同盟他二十団体で出したという、「湾岸問題の平和的解決を希求するアピール」の文と、「国連平和協力法に反対する会」の今後の活動のお知らせをもらつて、夕暮れの新

宿をあとに帰宅の途についたのだった。

これが、私の一月十八日。よくも悪くも私の一月十八日だ。少なくとも朝、出掛ける前より道は開けた。二十四日には、先の二十団体主催の「国連平和協力検討の会」にも出かけた。自ら動くこと、これが一番。自ら動いたぶんだけ、血となり肉となり、私の世界は広がる。

私たちが作っている冊子『共育』は、一月の印刷を二十五日に予定していた。もちろん戦争反対の特集に急ぎよ変更。一週間しかなかったが、「詩のへや」は、子どもさんの学校の問題をからめて、「とおしめがね」は、おんなの問題をからめて書いてくれた。教育の問題も、女性問題もみんな今度の戦争と根は一つだから、私たちにはこんなによく見えていのに、為政者たちには何にも見えないのだから。

さあ、発信しよう!! 情報を受ける側ばかりにいないでこちらからも発信しよう!! 『私』の正直な声を伝えよう!! 友人Sさんも同じ思いで「坂道発信No.1」を出した。

今日は、朝から発送作業をしている。「共育No.57」戦争反対特集と、「坂道発信No.1」と、国会に提出する湾岸戦争の即時停戦のための請願用紙を入れて、封筒はいつもより多いので、パンパンになってはち切れそう。

— 湾岸戦争 —

各政党に聞く会に参加

青木喜代江

一月二十四日、東京千代田区の参議員会館で開かれた「国連平和協力検討の会」に参加した。主催の「国連平和協力法案に反対する会」は、無党派の市民団体二十団体で、昨年国連平和協力法案に反対して結成されたもの。同法案を廃案にもち込んだ後も、継続して、各政党の取り組みを聞く会をこの日に準備中だったが、情勢はその後急展開して、湾岸戦争が勃発。この日は、政府の多国籍軍への九十億ドルの援助金、自衛隊輸送機の派遣という方針が打ち出されたこともあり、会場には二百人以上の人々が集まり、報道関係者のカメラの回る中、ものものしい空気が漂った。

出席した各党議員は、社会党・川崎寛治氏

(衆)、公明党・山口那津男氏(衆)、共産党・山中郁子氏(参)、進歩民主連合・菅直人氏(衆)、連合・古川太三郎氏(参)で、自民、民社は無欠席。

九十億ドル(一兆二千億円)の追加支援が事実上戦争に加担すること、日本国憲法に反するものであること、国際社会の中で、日本がとるべき態度としては、停戦に向けてイニシアチブをとるべく努力すべきであること。自衛隊機の派遣についても、国会にかけず「政令改正」で決めたことについても批判が集中。

「難民の移送についても、民間機の使用やバスでの陸上輸送、海上保安庁による海上輸送も可能だし、他国からの要請に応えるのではなく、憲法にもかかわる重要な問題であ

り、国内で議論をつくすべきだ(菅氏)」。 「国連が中心となって、停戦に向かう努力をすべく、日本も協力していくべきで、そのために世論を結集したい(川崎氏)」。

明日からの国会での審議をひかえて、野党各議員の痛烈な政府批判もあった。

続いて会場からの発言。

「人を傷つける、人殺しのために、日本は金を出すべきでない。支援金を税金でまかなうのなら、私は税金を支払わない」、「日本は憲法を守ること、戦争に加担しない。むしろアジアの国々と協力して平和の道を探るべきだ」等、即時停戦に向けて、日本がイニシアチブをとるべきだという意見が相次いだ。

各団体より、デモ行進や、ハガキによる抗議、署名運動などのアピールがあり、最後に決議を採択して、両議院議長あての請願の署名にとり組むことを全会一致で決定し、散会した。

今年は、太平洋戦争が始まった年からかぞえて、五十年目にあたる。この日の参加者のほとんどが、戦争体験のある世代、高齢の方たち。そのことが、参加者たちの内に、言い

「日本が戦争協力の道をとることに反対し、

速やかな停戦の実現を望む」決議案

世界中の人が憂慮し、平和への願いをこめて注目していた湾岸情勢は、多国籍軍の攻撃開始によって、ついに最悪の道、戦争に突入し、拡大、長期化する恐れさえ出てきた事は大変遺憾です。

武力は国際紛争解決の手段として、何の役にも立たないことを歴史が証明しています。戦争が長引けば、それだけ多くの人命が失われ、計り知れぬ経済的損失を世界に与えることは確実であります。しかも万一、核兵器や化学兵器が使用されるような事態が発生すれば、それこそ人類の破滅を招きかねません。

私たちは、日本政府が今こそ憲法第九条の精神に沿って、独自の立場のもとに、湾岸戦争の即時停戦に向けて直ちにその仲裁に入る道を探るよう要望します。

日本政府は国連に対して、停戦に向けての特別総会の召集を要請するべきです。なお、わが国の経済的支援は、人道的救済措置等、世界平和に寄与するものに対してのみ行われるべきであります。多国籍軍の支援は実質的に戦争支援につながるものです。さらに、自衛隊員の海外派遣等は、憲法に違反するものとして絶対に許されません。

以上の理由から私たちは次のことを要望します。

- 一、日本政府は、外交努力により湾岸戦争の即時停戦に向け調停、仲裁の道を探ること。
- 二、多国籍軍への戦争協力を取り止め、国民の税金を多国籍軍の武器、弾薬等の購入資金として提供しないこと。
- 三、いかなる名目であれ、自衛隊を海外に派兵しないこと。
- 四、日本政府は、国連を真の平和機関に改組するよう率先努力し、世界平和に貢献すること。

一九九一年一月二十四日

国連平和協力法案に反対する会（二十団体名省略）

ようなない危機感をつのらせているように思えた。

同会は、その後、正式名称を「湾岸戦争の即時停戦を求める会」とし、引き続き運動を続けていく。

連絡先 東京都渋谷区代々木2-21-11

市川房枝記念館内 日本婦人有権者同盟

☎〇三―三三七〇―二七二七

FAX〇三―三三七〇―四五四一

・二十団体

- 日本キリスト教婦人矯風会・東京都地域消費者団体連絡会・東京キリスト教女子青年会・日本キリスト教女子青年会・草の実会
・日本山妙法寺・不戦兵士の会・あごら・独身婦人連盟・主婦連合会・日本有職婦人クラブ全国連合会・理想選挙推進市民の会
・家庭科の男女共修をすすめる会・日本消費者連盟・日本生活協同組合連合会・婦人国際平和自由連盟日本支部・日本キリスト教協議会婦人委員会・東京都地域婦人団体連盟・日本青年団協議会・日本婦人有権者同盟

中教審、学校制度に関して、審議の経過報告を提出

第十四期中央教育審議会(清水司会長)は、'89年四月、文部大臣から「新しい時代に即応する教育の諸制度の改革について」諮問を受け、学校制度と生活学習に関する二つの小委員会において審議を進めている。学校制度に関する小委員会(座長・河野重男お茶の水女子大学長)は、後期中等教育の改革とこれに関連する高等教育の課題について、生涯学習

本方向は何か」で、今の段階で考えられる可能な限りの対策を立て、第四章で「改革の具体的方策」を提言。第五章「各方面に訴える」で企業・官公庁、大学、高等学校、家庭に、改革案の理解を速やかな実行を呼びかけた。「審議経過報告」の骨子は次頁の表の通りである。

新聞などの報道は、6や8を大きく取り上げたが、ここでは中教審の理念を紹介しよう。すなわち——日本の明治期の急速な近代化は、武士の子と町人の子と一緒に教育した平等主義的な制度によるところが大きい。本人の努力次第で優秀な学校を卒業すれば、将来の人生に展望が開けるといふ「学歴主義」のおおかげだ。産業の発展の目標に沿うことこそが教育の課題、としたのも後発工業国として賢明であった。

「はじめに」で高校が置かれている息苦しい状況を取り除くためにいろいろ考えたが、どんな政策を試みても一つの「壁」にぶつかる。それは「学校間格差や序列、偏差値偏重、進学競争の圧力」であると述べる。

そこで第一章「根本の問題はどこにあるか」で、「壁」が簡単になくならない根拠を、歴史的・心理的に追求し、第二章で、「高等教育の現状」を分析する。第三章「改革の基

ところが現代は「学校」が国民に近代的自由や希望を与える時代ではない。にもかかわらず「学校」を社会的地位向上の手段とする期待感情は、国民の間に純粋に残り、大衆化

し、より幅広い層に支えられ、熱気を帯びている。とりわけ第二次世界大戦後、社会の平等が進み、所得水準が上がり、進学率も上昇した結果、戦前の二十倍の人間が大学に殺到した。学校間序列は一層強化され、能力という名の別のレッテル貼りが進んだ。学歴は、かつて人々に自由や希望を与える思想だったが、今や「未来投資」の思想である。

一方アメリカの教育は、極めて平等だが、近年学力水準の低下というかたちで、激しい効率低下に悩まされている。ヨーロッパの教育制度の多くは、複線型で能力や資質に応じて極めて効率よいが、平等とは言えない。日本の教育だけは例外的に、平等と効率を両立させてきたが、いまや格差・序列は、学生・生徒を偏差値で区分けし、国民の多くに抑圧感情と閉塞感を与えている。平等と効率は、教育制度だけでなく、日本の産業社会そのものの性格だから、日本人全体の生き方を改めなくては、教育だけ良くすることは難しい。また教育をよくする政策を、他人、学校、関係官庁にだけ期待している限り、いつまでたっても、根本的な改革はできない。この袋小路を抜け出すためには、平等と効率の概念そのものを変えることが必要である。

『審議経過報告』の提言骨子

1. 生徒の学科選択の幅を広げるため、現行の学科区分を見直し、新たに普通科と職業学科を総合したような学科を設置できるようにする。
2. 職業学科を再編し、情報、厚生、観光(以上仮称)に関する学科を制度的に加える。
3. 各学校、学科に特別の定員枠を設けるなど、生徒の学校・学科間の移動をより弾力的に認め、入学後のやり直しがきく制度とする。
4. 四年制高等学校については引き続き検討する。
5. 工業と商船に限られている高等専門学校の分野を拡大する。
6. 特定の分野で特に能力の伸びの著しい生徒に対する教育上の例外措置として、当面は数学を対象に、現在18歳としている大学入学年齢制限を緩和し、早期に入学させることを試行的に実施する。
7. 大学は、入学者選抜に当たって学力の判定基準を多元化・複数化し、ペーパーテストによる学力とは別の要因も加味するよう提案する。
8. 大学は、特定の高校出身者が集中することなく、できるだけさまざまな学校から学生が入学できるように方策を検討するよう提案する。
9. 国公立大と私立大、大学と高校の間に、入試改善のための協議機関を設け、入学者選抜基準や途中編入の在り方について協議することが必要。

今回の中教審の報告は一味違う。例えば、(1)高校進学率九五%、四年制大学の数五百校という現実、本当に勉強したいから進学するのではもはやなく、他人よりぬきんでるためではなく、他人と同じような資格を得たためだ。人並意識に駆り立てられているのは、競争心理では決してなく、むしろ競争回避心理である。高校卒、大学卒という「属性」を外された個人による競争を避け、高校卒、大学卒という集団性の内部に身を隠し安心したいためだという考察。

(2)高等学校は、「成績もほどほどで人生に

余り疑問も持たない、個性の強くない生徒たちには住み心地が良いが、立ちどまって考える力のある、個性的な生徒にはかえって住みにくいところ」だ。現代は世界的に「学校」の存在理由が問われる学校危機の時代である、という認識。

(3)「新しい時代の新しい問いの発生に、教師の側が習慣的、保守的に反応するときズレが生じる。教師の多くは内部から出た新しい提案に対しても概して拒否的である」。この守旧的体質を自己清算することが、文部省、教育委員会を含む学校関係者の重要な、大きな課題である、という指摘など。

(4)「各方面に訴える」で企業・官公庁に対し「日本の経営が個性と創造性を必要としているのなら、採用の仕組みを抜本的に改革し、目を見張らせる独自の評価方式を開発していただきたい」と、企業に「大学の既成の序列を動かし、新しい序列を再編成するのだというくらい気概」を要求。また「男女の真の意味での平等が、就職機会はもとより、昇進その他社内の処遇においても一日も早く確立されることを希望し、父親をもっと多くの時間家庭に返すように、企業・官庁にお願いしたい」と結んでいる。

(5)さらに、母親だけに家事労働に加えて子育てのプレッシャーがかかる現状が、女性が社会的仕事を継続することをしばしば困難にしている。故に、育児・教育は母親の役割という考え方を改め、「父親も子どもの成長の基礎である家庭づくりに一層積極的な役割を果たす必要がある」と言う。

具体的な方策に関して批判・反発はあるだろうが、偏差値信仰の構造解明に踏み込み、受験競争にまともに取り組んだ点、両親が育児や教育にかかわる大切さや父親の家庭責任を強調した点、この二点を評価する。(平田)

『花・野菜詩集』

羽生 槇子著

(ウイ書房
一六四八円)

前田美智子

羽生さんの、花や野菜の詩は、今までに数多く読んでいます。読者にとっても、おなじみの畠から生れる作品は、同じ対象があるわけですが、その新鮮さには毎度おどろかされる。

何故だろう——どうも詩人は、畠に詩の種も蒔いているらしい。めぐる季節に咲き、実る自然の恵みを、その都度、いきいきとした感性で受けとめ、作品も一緒に収穫する。

詩人は、まるで一期一会のように、今年のもとの花と出会い、今朝のトマトと語り合い、じゃまつけな雑草や虫までも、大らかに生きとし生ける仲間としてうたう。

それにしても、詩人の野菜達は、食べられることが、無上のよろこびに見える。むしろこれは、「食べる人」のしあわせな光の反映なのだが。

上向きの実がまるみをおびて／だんだん重

みで横向きになる／つやつやのさやが
みんな笑っている／そら豆がそんなに笑っ
ちやって どうすんの
パクンとさやを折る／白いわた毛にくるま

って／いい気もちそうに 一粒ずつの実が
またみんな笑う／塩ゆいでゆで上げる／食
卓の鉢の中でまで笑っているように見える
皮がとろけそうにやわらかい 若い実

(そら豆)

スーパリーのパック入りのそら豆は、こんな顔
は見せてくれない……なんて、ついひがみた
くなるではないか。

赤くもえ出たにら／すばやく／光のすけ
る緑のそよぐ葉になり／それが六 七セ
ンチになってから とる／切り口から みる
みる光るしずく／とったにらの葉は わた
しの手の中でふわふわ／やと香が立ち

じめた そのにらを切って／かき卵ス
ープの火を止めたところへパリリと入れる

(にら・春の食卓)

飽食の時代、こんなにも素朴でつつましか
な、光りあふれた食卓は、胸にじんときる、
なつかしさのご馳走だ。

決して、大上段に構えないで、たくまざる
ユーモアと、あたたかさあふれる日常のくら
しから、きらりとのおぞかせる批評性。むべな
るかな、羽生さんは自然環境を守る、行動の
詩人でもある。ご存知の方も多いと思うが、
『今治織田が浜を守る会』で、先頭に立ち何
年来活躍しておられるのだ。

日なたにつくった年は強じんに葉をふやし
日かげにつくった年はひよるひよる葉をの
ばし／二列つくるらつきょうは／梅雨どき

になると抜かれて／また二列分になるだけの球根を残して／あとはらっきょう漬けになる(略)よくできた年はらっきょうをたくさん食べて／少なくてきた年はらっきょうを少なく食べて／たしかにわたしは掘ったり埋めたりしてはいるが／はたけにはいづもらっきょうの二列が保持されて(略)

わたしにとって永遠不滅みたいなら、うが／はたけにあるというのは、とてもいいことだ。
らっきょうは夏草に埋もれたり霜柱がとけて土からとび出しそうになったりして／日ですごす／長い時間、らっきょうは物思いにふけったり／元気になつたりして暮ら

す／わたしはそれを見て暮らす

傍点筆者(らっきょう)

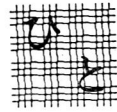
ここには詩人の人生哲学が語られているような気がしてならない。らっきょうという、少々ニューモラスで味のある存在を媒介に。一見、単純明快、その底には深い真理が秘められている。

今月号から加藤由美子さんとコンビで『あ

かさたな』を連載してくださる福田緑さん。

姉弟に挟まれて、親には放って置かれた子供時代。頑張り屋で手のかからない子供だったけれど、「ほんとはかまって欲しかったんでしょうね」とも。

中学生の時、社会科の教師が次々と質問を発し、答えられないと篠竹でぶつという羞恥心と恐怖心を煽るやり方に、私だったらあんなことはしない、私だったらここでこの一言を言うのになと、教師は反面教師だった。



姉と弟の教育費がかかるだろうからと国立の教員養成の大学に進んだが、教師になるつもりはなかった。卒業後、出版社の

門戸を叩いたが空気がなく、あきらめて八丈島で教育実習。十四人のクラスを受け持ち、先生の卵をやって、夕陽を眺めながら「せんせいもいいな」と、でもしかで教師になった。



〈あかさたな〉
の
福田 緑 さん

教師はやりがいがあったが、十二年目に受け持った四年生のクラスがまとめられず、ノイローゼに。初めての挫折体験ですっかり自信を失い、「心障学級」を希望したのは、負

け犬の心境からだった。

しかし、障害のある子どもたちがひたむきに体を動かしたり、歌ったり、自分にはできないすりこぎを巧みに扱ったり、片足を引き引きよろけながら走る姿を見ると、自分が何もしないわけにはいかなかった。本来の頑張り屋で元氣印の緑先生を再生させたのは子どもたちだった。

現在の職場は「ことばの教室」。都内の公立小学校の中であって、言葉が出なかったり、発音が不明確であったりする子どもたちが週一回ほど通ってくる。一対一で一緒に遊びながら言葉を育てていく。『あかさたな』ではここでの緑さんと子どもたちとのふれあいを書いていただきます。(河村)

荒野のバラ

田中裕一

「砂漠の嵐」に

そよぐ葦

— 真実を見ることの難しさ —

1 本質を語れノ

ふしぎな犬がいて、ホワイトハウスで尻尾を踏むと東京の永田町で吠える。ボスへの連上金90億ドルを、ボスから睨まれると、本来の飼い主の国民の手を噛んでも掠め盗る。ボスはそれを当座の三か月分だと脅す。一犬が虚を吠えようと万犬がこれを伝え、「正義だ」「協力だ」「貢献だ」「血を流せ」と吠えたてる。Aが「聖戦」、Bが「解放・正義」を持ち出すと、中立顔した怪しげな「正義」が、「どっちも悪い式平和論は誤り」と登場する。まあ、「正義」・「正論」が来たら気をつけた方がいい。かと思うと、「サウジの首都は」と聞かれて「フセイ

ン」とか、「フセイン? あー、ヒゲがセクシー」とぬかす月の砂漠的ノ一天気ギャルがいたり、極楽トンボの勝負師や遊び人に満ちみちたスクリーンの、恥ずべき現実がある。

マス・コミは、苦しみ、傷つき、死ぬ民衆の姿を、戦争の総体として捉えずに、ハイテク兵器の試爆場と化した現地のピンホールショットなどに目を奪われ、米公式発表を繰り返す。こんな戦闘場面の報道なら、ゲーム感覚を生じて、戦争報道に迫れない。民衆の苦悩や死を放映しないのは、ベトナムの経験で、そこから生じる民衆の反戦・反米運動を恐れるからに外ならない。国連の大義を利用した世界の保安官を気どる僅か数人が、はた迷惑も願わず、人の懐を当てに粹がって燃えている。ブッシュ、ベーカー、チェイニー、フィッツウォーター、パウエル、シュワルツコフらだけの主張が世界を駆けめぐっている。死ぬのは民衆で、彼らは安全に生き残る。

私たちはイラクによるクウェート不当占拠や、アムネスティが報ずる人権侵害について決して許容しない。だからこそ、国連決議を無視し続けるイスラエルのパレスチナ不当占拠とそれを黙認する米・英をも許容しない。国連は、武力行使容認決議(90・11・29)のあとの総会(90・12・6)で、中東和平国際会議、イラクのクウェート撤退、イスラエルのパレスチナ撤退を決議した。144か国が賛成したのに、反対は

イスラエルとアメリカ二国のみであった。戦争か平和かのタ
 イムリミットの一月十五日、世界は最後の希望をフランス案
 に賭けた。これを「リンケージ拒否」一点張りで蹴ったのは
 米・英・イスラエルであった。最後のチャンスを暗転させた
 ブッシュの「正義」もまたアンフェアであった。第一次大戦
 の引き金をセルビアの青年が引いたとすれば、起爆剤を仕掛
 けていたのは帝国主義諸国であった。

今度も仕掛け人が米・英・イスラエルとすれば、火を放っ
 たのはフセインであり、消火せずにぶち壊しに入ったのはア
 メリカである。内政不干渉・民族自決をよそに、アメリカは
 これまでトンキン湾でベトナムを、水豊ダム爆撃で中国を挑
 発し、キューバではカストロ暗殺を計画し、リビアではカダ
 フィ居住地を爆撃し、パナマではノリエガ大統領をら致する
 などの暴挙を繰り返した。かつて原住民に言ったように、今
 度も「最もよいフセインは死んだフセインだ」と言いたい
 だろう。イラクもソ連も、イギリスも、フランスも同罪であ
 る。聖書に従って「罪なき者のみ、石にてこの女を撃て」
 (「ヨハネ伝」第八章)である。ブッシュは、次期大統領選へ
 支持率を挙げたし、冷戦終結で冷え切っていた米軍需産業も
 活性化してきた。(表1)

だが、これこそかつてアイゼンハワー大統領が最も懸念し
 た「産軍相互依存体制」ではないか。しかもイラクの兵

器を調達したのが米・ソ・仏・英・独・中の死の商人たちで
 あり、その化学兵器や核兵器が、今や安全装置を外しつつあ
 るのである。そして油濁まみれの海鳥すら、ブッシュの「イ
 ラク環境テロ」攻撃の口実にされかねない。それらは十分予
 測されていた。フセインの狂気を追いつめた別の狂気が、今
 や正体を現しつつある。

2 「死」への教育

執拗に今日の危機に言及した
 のは、この世界の果卵（るいれん）の危機に、
 敵対関係に入った日本政府のな
 すすべもない無能と、民主的機
 能を衰退させた国会の現状は目
 に余るが、教育もこの現実にあ
 るからだ。新指導要領の「国際
 化」「情報化」「民族の歴史と伝
 統」「生命への畏敬」などの実
 像が、朝日新聞の次の一葉のイ
 ラスト(91・1・30)に見事に
 見え見えになるからだ。

驚くべきことだが、日本の教科
 書に「戦争・殺人・軍隊の絶

表1

	1989年国防費省察 約額(單位百万ドル)	主な製造兵器
1 マクドナル・ クラフラス	8.617	F15、AV-8Bハリアー、 トマホーク・ミサイル、 アパッチ・ヘリコプター
2 ゼネラル・ ダイナミックス	6.899	F16、トライデント型核弾頭、 M1戦車、ミサイル、 M1A2戦車、ステイング、 M1A2戦車、スパーロー
3 ゼネラル・ エレクトリック(GE)	5.771	F404 F110
4 レイセオン	3.760	ミサイル(パトリオット、ホーク、フェニックス)
5 ゼネラル・ モーターズ(GM)	3.691	ミサイル(マーベリック)、 M1A2戦車、 M1A2戦車の部品



対的否定「が一所もない。私自身、学校教育のどの段階でも「殺すなかれ」と教えられたことは一度もなかった

本は神国也」の「神皇正統記」や、「君に二心われあらめやも」の「金槐集」や「撃ちてしまむ」の「古事記」を学んだ。こう並べ立てると、条件反射的に特攻隊や沖繩決戦の悲劇は生まれるべくして生まれた。人を戦争で無残に死なしたものは政府と天皇制だが、それを納得せしめたのは教育の力であった。

3 教師の戦争責任追求

一九四五年の敗戦でその虚妄が露れた時、私たちを驚かせたのは、こうして国家権力を媒介してきた教師たちの、鮮かな転身ぶりであった。彼らは自ら教えてきた教科書に墨を塗らせた。私たちはこの時、しっかと教師の正体を見破った。

案の定、やがてレッドパージ、動評、学テ等の戦後反動が強まると、また再転向していく教師たち。私たちはこれらの姿を反面教師として胸に刻みながら教師になった。

私たちは、ほう大な資料を追いながら「熊本における教師の転向と戦争責任」をテーマに、共同研究をまとめた。教師の仕事の厳しさは、公務員法ゆえでなく、後世の教え子からの批判に耐えうる仕事の質を問われることにある。この研究に少数だが不屈の教師も登場する。今、世界の危機にあつて、私たちの不動の星座をそこに読み取ることのできるのがある。

た。日本の現実に置いてみると、「殺すなかれ」と教え、
「生命の尊重」などというのは、「ごめんなさい」と頭を下げ
ずに、「遺憾である」と胸をそらすような白々しきがある。
学校は私に国のため、天皇のために死ぬことが臣民の道義と
教えた。当時、全員軍人希望だった愛知一中―後に真相が明
かにされたが―を引き合いに進路指導がなされた。「義勇公
に奉じ」る「教育勅語」を基本に、「武士道とは死ぬ事と見付
け」る「葉隠」、「朕は爾等軍人の大元帥なるぞ」の「軍人に
賜りたる勅語」、「生きて虜囚の辱めを受くるなかれ」の
「戦陣訓」を学んだ。
国語では、「大君は神にしあれば」「大君の勅 畏み」「大
君の辺にこそ死なぬ」のますらおぶり「万葉集」や、「大日

4 「教えるとは」と「希望を語る」——アンソニー

試みに、今教師の四つのタイプを示そう(表2)。国民の信頼に応えられる順に番号をつけてみられるとよい。いろいろな考えがあろうが、正解は一応A—C—D—Bの順である。Aは言うまでもない。Cはやがて子供が理解する。Dは子供が誤りを見破るから被害がなく、子供が自立を早める。罪が深いのはBで、巧みな技術で誤りを真実らしく教育—実は煽動するからである。戦前の教師がそうだったように、今指導要領準拠型の研究推進・指導の立場にある教師たちも、多くは国家の誤りを糾すことなしに巧みに媒介するからである。

表2

タイプ	A	B	C	D
授業方法の巧拙	○	○	×	×
授業内容の良否	○	×	○	×

彼らは要領から出発し、その仮説を疑い、批判し、越えることに怠慢で、逆に批判に反撃する。それは子供より自らの地位保全から発する。常に生徒に指導者然と振舞い、自己変革せずプロを自認する教師、指導意識過剰の教師の傲慢さは鼻もちならない。

Iさんは絶対絵を描かない。学生時代懸命に描き上げたウシの絵をひと目見た美術教師が言ったのだ。「何だ。イヌか？」それ以来彼は絵筆を折った。Mさんは美術科

に進む理由を話してくれた。小学校の先生が見本に描いてくれた絵にしびれた、というのである。そして彼女は今中学の美術教師をしている。教師の一挙手一投足に、生徒の未来の死活の権が握られている。「イヌを矯めてウシを殺す」危険もあるのだ。

生徒と同じ人間だという意識、子供と同じ地平で学び合うことが大切だ。ある日、私が歴史の授業で、パピルス紙や蔡倫の古代紙の製法を説明した時のことだ。何か言いたげな生徒に気付いた。一番勉強の苦手な子だった。私が促すと「あのう、紙を発明する前、人間は何で拭いてたんですか」。

教室中に笑いが爆発した。これには驚いた。優等生が見過ごす発想だ。私はその発想を賞めて、宿題にしてもらった。柳田国男先生の論稿も調べまくったがない。食物史や服飾史はあっても、重要な排泄史が歴史学に欠落していたことを、私は改めてその子に学んだ。熊大の考古学の教授に糞石学などのレクチュアをお願いしたり、「地獄草紙」の排泄場面を調べたり、谷崎潤一郎の「少将滋幹の母」を読み返したりして、やっと李家正文氏の本やアンリ・ゲラン「トイレの文化史」などに辿りついた。生徒が喜んだの言うまでもない。

私たちは教えるより、生徒と一緒に学ぶことの方がずっと楽しい。

家族と家庭科

● 酒井はるみ

中学校最後の「家族」

高校の家族領域が'56年指導要領で保育・家族となり、'60年に至って家族という領域そのものが消滅し（'91年一〜二・三月号）、家庭経営と保育の領域にわずかに痕跡をとどめた頃、中学校の家族領域もまた終止符を打った。今回は中学校では最後になってしまった「家族」をとりあげる（注）。

'56年学習指導要領（'57〜'61年度）は、戦後二回目の、かつて『試案』の文字が消えた最初の改訂であった。「家族分野」は保育・家族と家庭看護からなり、高校の場合と同様、「保育と家族を一連のものとして、家族を理解し、家族の一員としての自己の立場を認識して望ましい家族関係」（第三章）にする内容となった。保育・家族では、項目のほぼ三分の一が家族、三分の二が保育という構成で、子どもの発達段階中に青年をおき、家族の一員としての自己の立場を認識できる構

成になっている。

ところが、教科書をみると、保育・家族では、家族についての記述はきわめて少なく、ほとんどが乳幼児の保育で占められている。青年期をとりあげたものも一種類にすぎなかったし、家族を全くとり上げない教科書（羽仁、実教）もあった。従来みられなかった合理化（野尻、三省堂）や科学・技術（海後、中教①）などの用語が使用されて、科学技術教育へ傾斜する時期であったから、家族領域の幕引きが準備されつつあったともみることができよう。

さて、家族は「家庭生活の改善」というような内容で、「家庭経営分野」で記述されることが多かった。これらを見ると、「家庭生活の合理化は、いつも掛声であって、戸口の問題の解決があるだけで、ほんとうに発展しない」（羽仁）とか「私たちは一度に家庭を民主化することはできない」（海後）など、家庭生活における戦後改革が遅々として前進しないという状況認識があったことがわかる。

家庭生活の改善点に①家庭生活の民主化②家事労働の能率化③経済生活の安定向上をあげ（①）、望ましい家庭生活の基準として、①家族相互の愛情と奉仕であすの活力を養成②一人ひとりの人格の尊重と個性の自由な発展③健康の増進④経済生活の安定向上⑤文化的な生活・合理的な生活⑥隣人との交際と社会的活動や奉仕をするなどをあげた（青木・細谷、

二葉⑧。

家族関係や家族制度の民主化は、どの教科書でも家庭生活の民主化という表現を用いている。①では「主人や家のため
の家庭ではなくて、家族全員のための」家庭にするには、「家
庭生活の民主化は、根本条件」で、それは「家族関係を対等
のもの」にし、「家族が互に理解し、尊敬し、協力し合っ
ていくので……ほんとうの愛情が生まれてくる」と述べた。あ
るいは⑧では、「特に、主婦は、いまだに封建的な状態におか
れて」いないか、として「夫婦・親子・兄弟・姉妹の間は、
命令や服従のような関係でなく、おたがいの意見や希望を尊
び、人格を尊重し合って、一家が運営されなければならな
い」という。家庭生活の理想を「家族の人々みんながそれぞ
れ力いっぱい自由に活動でき、しかもお互いどうしなごやかに
生活を共にするところにある」と述べるもの(横井、実教④)
など、'51年指導要領における家族観よりも、近代家族理念に
より近づいているとみることができ。ことに④の前半部分
の、個人の自由の確保を意味するらしい記述などは、戦後民
主主義の家族制度が十年という時を重ねた成果といえよう。
しかし、反面では封建遺制が強く人々を束縛していた時代で
あったことも、文の端々にうかがえるところである。

この領域を男女共通学習と明示した教科書は③(河原、実
業之日本)⑩二種類であった。

④から⑩のすべてにおいて、既述のように、家族の民主化
ではなく、家庭生活の民主化と表現していることをどう考え
たらいいのか。先月号で、高校では用語としての「家族」が
「家庭」におきかわっていたのをみたが、中学でも同様のこ
とがおきているといえないか、次回に検討したい。

今回の教科書の特徴の一つとして、夫婦の性別役割分業の
一層の明確化が認められる。たとえば、「一家の仕事を夫婦
がどのように分担するかは時代……によってちがうが、妻は
昔から『家内』ともよばれてきたとおり、だいたい家にて
家庭生活を整える場合が多い」(④)という記述がある。従
来は夫だけでなく妻も働くことを勧めていたのに、就労から
妻を引揚げさせたのは、戦後の疲弊から立ち直り、経済生活
の安定向上がある程度実現したことに第一の原因を求めた
い。女性解放の視点が弱まったと断言することは、データの
制約から避けたいと思う。

なお、六種類中の家族構成は、核家族3、直系家族1、不
明2で、子供数は二〜四人と割合多かった。

(注)この改訂もとの職業・家庭科教科書は数十種類になる。
女子向けの家庭生活中心のものだけでも二十種類は下っていな
い。入手困難という事情から、三年分分そろった家庭生活中心
の教科書五種類、職業・家庭科教科書一種類を分析の対象とし
た。

男性学への契機

魔男の宅急便

■諸橋泰樹

戦争を知らない大人たちおとこ

湾岸戦争開始当初の、マス・メディアの「はしゃぎよう」としかいいようのない興奮した報道ぶり（そんなに戦争が始まったことが嬉しいかね、といたくなるような）と、その割には何にも情報も映像も送られてこないもどかしさ、またアメリカもイラクも「何機やっつけた」とか「勝っている」などと自国に都合よくサバをよんで報道するさま、これらに接して、現代が「情報化社会」などとバラ色に喧伝されつつ、そのくせ四十数年前の「大本営発表」と毫も変わっていないことを「納得」した人は、多かつたにちがいない。

ちっとも派手な、戦争らしい「画」が送られてこないじゃないかという「不謹慎」な初期の思いは、海の向こうで戦争が始まって数日後、さらに増長する。ハイテク兵器がどういふ性能をもってどのように使われ、双方はどういう「作戦」をとるかとい

った解説と、実際に画面中央の焦華さくわのクロス地点に落ちてゆくミサイルや爆弾といったまさにテレビゲーム的感覚の映像とが相俟あひまって、「ゲーム」的にとらえられるようになったからだ。メディアもそして男たちも、小学生から高年齢層にいたるまで床屋談義風に、スカッドミサイルやパトリオットの性能についての知識をひけらかし、近代戦の兵法、フセインの心理や作戦を自分が愛読してきた戦国物の小説のように分析し、「アラブ人はこうだから」と「耳学問」で断定し、自衛隊の装備のダメさ加減を憤って、自分が、あるいは息子がやっているテレビゲームの映像とテレビ報道の画が同じという実体に半ば「感心」したのである。現代では実際の戦争の方が限りなく日常的ゲームのシミュレーションとなっていく。繰り返される映像が、アメリカ軍の検閲を受け、客観的でないことには思いたらないまま。

社会的にこのテの世界から排除されてきたということもあって、女性が全く登場しない「軍事評論家」なる人物は、この、男たちの歴史に立ち合う血沸き肉踊る感覚、「不謹慎」なゲーム感覚の話題社会にあって、メディアの恰好の人気者となった。彼らこそ、この平和な（と思われた）時代にいたいいつコツコツと調べていたのか、各国兵器の性能や保有数や配備地点、兵力や作戦心理について『ジェーン軍事年鑑』を暗記するほど読んで、スタジオで水を得た魚のように得々

と喋る、「おたく」の人間である。世の中には、どんなことにも必ず「その道のプロ」がいるものだ。

昨年のこと。武田秀夫さんは、朝鮮戦争を機に「警察予備隊」ができる逆コースの中学生時代、自分は兵隊にとられるかもしれないという恐れを、かなり深刻に抱いていたと語ったことがある。そして同席していた津田正夫さんも、自分や息子には、つまり男には兵隊にとられるかもしれないという思いは常に重くのしかかっている、と話した。ぼくも、二人とは世代が違い、二人ほどの真実味・真剣さをもっていうのではなかったが、70年前後のベトナム反戦と反安保、沖縄問題のさなかの中学生期に、全く同様のことを考えていたし、今でも徴兵のような事態になったらどうやって「逃げ」、反対運動に「潜行」するかといった、考えてみればどこかしらヒロイックで、実際にはそうならないだろうという「甘い」現実認識をなにかしらもっている。これもまた、戦争を前提とした、「不謹慎」な、床屋談義の域を出ていないのかもしれない。

男たちは、政府・権力の命で人殺しに大量に派遣されることを前提に、せっせと戦車や兵力についてカタログ分析したりシミュレーションしたり、あるいは「恐怖」したりしてきた。女性たちはこういう、「男が戦争に出かける」ということと、「男が戦争を（忌避するにせよ楽しんでしまうにせよ）語る」ということ自体が、解せないのに違いない。確かに、

一方で個人の人殺しや建造物の破壊は厳しく禁止し、罰しておいて、他方で兵士を殺すことや大量殺戮、破壊行為が奨励され、許されるという「奇妙な戦争」には、どこかしら虚偽的な匂いがつきまとう。男たちは、フィクションなゲームを自分たちでやっているにすぎないのではないか、という思い。しかも兵士の場合は死ねば美化されるという、これもまたよくわからぬ虚構性。

排除にせよ保護にせよ、男たちがしがみついて戦闘に女性たちを加わらせない究極の性役割分業である戦争は、男たちが民主的・政治的解決ができず武力に訴えるしか思いつかない単細胞ぶりと、武力による政治様式しか知らない国家、という亡霊から逃れられぬ社会科学Ⅱ旧男性学の貧困さ、に根ざしている。従って「子ども（Ⅱ男）を戦場へ送るな」（あるいは「送り出す」という母親Ⅱ女性の「反戦の母」（または「銃後の母」）の構図は、そのリアリティは認めるものの、「闘いにゆく男たち」という「男の戦争」^{フィクション}を前提とし、性別役割を補完してしまう側面があるのではないかと思う。

しかし今回の戦争は、人殺しに駆り出される男、反対する（または「銃後」の）女、という男たちの前提を揺るがした点にも特徴がある。女性の兵士の参加、そして捕虜になったことにより、今までの戦争は男のゲームにすぎなかったこと、戦争には男も女もないことを知らしめたからである。

梶円の夢

静謐といふこととついで

武田 秀夫

去年の秋、福生に用があるという妻をクルマで送ったときのことだ。地元人間が、水道道路路りと称している裏道をゆっくり行つた。

道の中央を疏水が流れ、それをはさんだ左右の道がそれぞれ一方通行になつてゐる。晩秋の昼さがりとあつて、工業団地の裏手にあたるその道にはほとんど人影がなく、クルマも僅かしか通らない。空は曇つてゐる。

黄葉した雑木林の中、羽村の動物公園が見えてきた。真直ぐな美しい道だ。と、はるかむこうから、中学生がひとりやってくる。前後にはやはり人影がない。見るともなく見ながら心にひっかかる微妙な何かを意識するともなく意識しながら擦れちがつた、その瞬間、「あれ、K君だ」と、思わず私は声を上げた。「え？ 塾に来てる子？」

「ああ、K君だ。一対一で見ているあの子だ」
「ああ、あの子ね」
「耳を抑えてただらう」
「え？」
「耳を抑えていただらう。両手で。あの子、よくああいう格好をするんだ」
「ああ、ほんとうだ。まだ耳を抑えている。痛いのかしら」
「わからない。どうしてだかわからないが、よくああいうふうにするんだ。ちょっと顔をしかめるようにしてね」
バック・ミラーの中を、耳を抑えながらひとり遠ざかつていくK君の後姿を追いつつながら私は妻にそう言った。

考えてみると、K君だけではない。私がこの八、九年のあいだ一対一で見してきた子ども

たちの何人かが、不思議に同じような仕草をした。耳のあたりに手をもつていく。そして指をヒラヒラと激しく動かす。顔をしかめる。そうしながらことばにならない高い調子の声を上げる。

私にむかつていらだつてゐるのか。はじめはそう思った。が、どうもちがう。そういうときの彼らは大体私の目を見ていない。虚空の誰か、虚空の何かに向かつて、難詰するようにならぬ声上げる。あるいは彼らは、ここではない別のところで何か不快な目にあつて今それを思い出したとでもいうように、ここにはいない誰か、ここではない別のところで起きた事象にむかつていらだたしげにことばにならない声をあげてゐる。そのような印象を私は常にいだかされ、不思議だ、不思議だと思つてきた。

この子たちは、おれには聞こえない何かあやふ々しい音や声を聞いてそうしているのだから。ウルサイナア。ウルサクテ、タマラナイ。ヤメテクレ！

K君が耳を抑えて歩いていたあの道は、ほんとうに静かな道なのだ。あの日は特に風もなく、人通りもなく、雑木林の黄葉が曇り空

の下、かざとも首をたてずに散りぎわを待っている、そんな日だったのだ。動物園の動物たちだってあんな日の昼さがりだ、少しも騒いではいなかった。それなのにK君は耳を抑えてひとり道をやってきて、クルマの私には気づきもせずに一心に顔をしかめ耳を抑えてバック・ミラーの中を遠ざかっていった。あんな静かな道で、K君は一体何を聞いていたのだ。何を一心にこらえていたのだ。

どうもわからない、一体何があるのだろうか。と妻と話しながら、私は、「叫び」と名づけられたムンクのあの有名な絵を思い出している。

動物公園のフェンス沿いの道が真直ぐ向こうに伸びていたように、画面の手前から向こうに、欄干のついた橋が真直ぐに伸びている。異様に歪んだ姿の男がこちらを向いて何か叫んでいる。目は見開かれ、大きくたてに開いた口は恐怖が不安に引き攣り、両手は耳のところにある。凶々しい夕焼けの空は溶けて流れ出したよう。入江がある。その入江をかこむ大地も溶けて黒く流れようとしている。世界が崩れかけている。そして恐らく何が鳴っているのだ。耐えられないような不

快な音が世界に鳴っているのだ。にもかかわらず、その音は彼にししか聞こえない。彼は耐えられないから叫ぶ。が、彼の叫びは理解されない。橋の向こうに二人の人間が立っている。手前の男の叫びはしかし彼らに届かない。彼らにとってはありふれたいつもの夕焼けにすぎず、夕焼けを映すいつもの入江にすぎない。彼らはいつものようにまた散歩をつづける――。

――ことばがうまく出ないK君は、小学校六年生のときから、私の教室に通いはじめた。いつのまにか四年がたって、春からは養護学校の高等部に行くことが決まっている。「高等部に行くからともよろしく」とお母さんから先日も言われた。「何もできませんが、今までのようですよ。しければ」と私は答えたのだが、謙遜してそう言ったのではない。ほんとうに何もしてないのだ。

K君は週一回、羽村からやってくる。お母さんのクルマから降り、玄関脇の犬小屋にいる飼犬のさくららにおびえながら、サツとドアを開けて逃げるように入ってくる。大柄な少年だ。その上、なかなかハンサムでもある。「大丈夫だよ。おとなしい犬だから怖くない

よ」

毎回そう言うのだが、相変わらず馴れない。お母さんがつづけて入ってくる。

「よろしく、願います、は？ Kちゃん」

「ヨロシクオネガイシマス」

ただどしい口つきでK君が頭を下げる。

「はい。どうぞ、どうぞ」と私。

笑ってお母さんはクルマにもどる。それからの一時間が、私とK君の時間というわけだ。

はじめは漢字の練習。それから「日本むかし話」を一日一話、声に出して読ませる。途中からは私も一緒に声を出して読む。読み終わると一部分をノートに清書させる。それだけだ。

「はい。御苦労さん。今日はこれでおしまい。

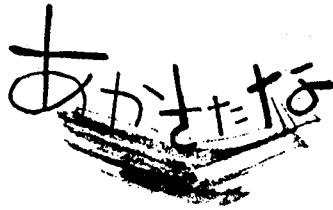
給、要るかい？」

時間が来ると、鉛玉の入った缶を差し出す。

K君はそこから二つ選び、一つを口にほうりこむ。そしてお母さんの迎えを待つ。会話はない。それでもいやがらずに毎週やってくる。

一体K君は何を考えているのか。何を感じ取っているのか。耳を抑えてひとり曇り空の下を歩いていたK君の切迫した姿が、またしても心に浮かぶ。

(この項つづく)



え・加藤由美子

ぶん・福田 緑

—木よう日でよかった—

「先生？」

「なあに？」

「あたしねえ、ことばの教室が木曜日よかった」

「ふうん。どうして？」

「だってねえ、もし、ことばの教室が月曜日だったら、あと一週間の長いんだもん。だけどずっと楽しみにしてて木曜日になるでしょ。そしたらあと少して一週間が終わるから」

「なるほどねえ」

「先生？」

「なあに？」

「あたし、三年になっても、四年になってもことばの教室に通いたいな」

「いいよ」

「ずっとずっと、死ぬまで通いたいな」

「いいよ」

さっちゃんは、「サ行・タ行」が正しく発音できなくて、一年生の時から「ことばの教

室」に通っていました。私がさっちゃんと会った時には二年生になっていて、あと「サ行の発音」を残すだけとなりました。

ところが、さっちゃんは「ことばの教室」を初めて担当した私に一言も口をきいてくれません。何とか遊ぼう、楽しい場面を作ろうと思って誘ってみるのですが、さっちゃんは首を横に振るだけ。どんなおもちゃを見ても興味を示しません。あれもダメ、これもダメ、プレイルーム二部屋を通りすぎ、とうとう最後の一部屋になってしまいました。そこでおもちゃの編み機『あむあむ』を見つけた時、初めてコックリとうなずいたさっちゃん。かすかに笑顔が見えたような気がして私は、心底ホッとしました。『あむあむ』は娘の奈々が何年前におばあちゃんからクリスマスプレゼントにいただき、すぐ飽きてしまったものでした。

次の週から、さっちゃんの持ってきた毛糸で早速編物を開始。「これね、お母さんにプ

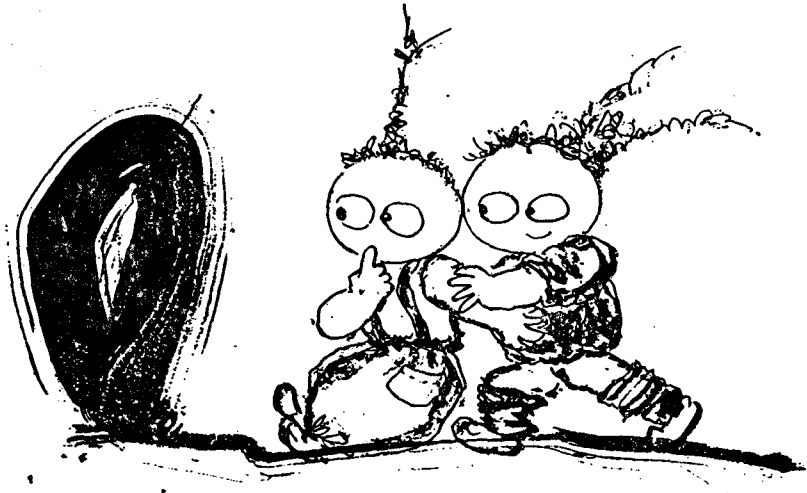
プレゼントするの」。母の日、父の日が近づいていきました。さっちゃんは目を輝かせながら『あむあむ』に向うのですが、『あむあむ』は、奈々子が要らないと言ったのも道理、目ははずれたり、ひっかかったりで、なかなかスムーズに動いてくれません。二人で格闘しながらやっと小物入れが一つできあがりしました。

「お母さんに見せちゃダメだからね。先生持って」さっちゃんと私の秘密です。

こうして、編物の合間に学校のこと、お友だちのこと、お母さんのことなどおしゃべりしながら、少しずつさっちゃんは私に心を開いてくれるようになりました。

三年生の秋、さっちゃんは「死ぬまで通いたい」と言っていた「ことばの教室」を卒業していききました。

（文中に登場する子どもたちの名前はすべて仮名です。）



評価を問い直す研究会

〈竹見智恵子〉

「暮らしウオッチング」は、PTA帰りのお茶飲み話が出発点です。きつとどこの学校も同じだと思いますが、父母会やPTAの会合で「奮闘」した後は、胸にモヤモヤがいつばい溜まってすぐには帰りがたく、つい喫茶店に寄っておしゃべりということになります。そこで話されることは、実は父母会の中のためえだけの議論よりもずっと現実味があり、たくましく、生活実感にあふれています。そういう生活に根ざした言葉や思いの数々がそのまま消えてしまうのはもったいない、書いておこうと始めたのが六年前。発行は平均して年に二回、メンバーは四、五人という超ミニコミ誌ですが、続けてきてよかったと思うことは、それぞれが自分の意見を確かめる場を持っているということです。

何でもないことのようにですが、つねづね自分自身を確認している、と、危急の時に対応しやすいですね。たとえば湾岸戦争開始のニュースを知った時、サツと立ち上がるフットワークのよさみたいなもの。大勢に流される前に、「チョット待てよ」と自分にブレーキをかける力。そんなことが「暮らしウオッチング」を発行し続けているよさでしょうか。何も強制しない、ただの開けっばなしの場、というだけですが、私たちの元気の素です。

連絡先 〒117 東京都練馬区上石神井3の19の4の415

自己紹介ぶるうぐい

かたつむりの会

〈溝淵 有子〉

かたつむりの会は、国語の文学作品を中心に教材研究している会です。名前は中国の詩人劉^{リウ}御の詩「かたつむり」からとりました。調布内外の教師が主なメンバーです。

会では、教材の確かな読みとりをまず教える者がしなければ、ということと詩や物語、時には短歌や俳句などもとりあげて勉強しています。教材を読み深めるには、その人の考え方思想性が必要になること、国語の授業こそ緻密な準備と論理的な思考が要求されることなど少しずつわかってきたところです。いざ始めてみると、自分の内側の不足ばかりが目について落ちこむことしきりです。幸い大変いい講師がいて、私どももつれをいいかんじにほぐしてくれていますし、会のなかみをしっかり持ち上げてくれています。

君が代、日の丸の流れの中で科学的にもをいい、国語の力で流れの先に立ちたいと思うのですけれど、目下のところごまめの歯ぎしりでしょうかありません。とはいえ、のろくても休まず、一歩ずつ前へ……かたつむりのごとくです。

どなたでもお気軽におかけください。

定例会は毎月第二土曜日夜、於調布中央公民館です。

例外もありますので、問い合わせのほど。

連絡先 〒182 東京都調布市染地3の1の75多摩川住宅ハ

○15の103 ☎0424-88-2045

買ろて来て使ろ

■山本謙吉

箒

京都・三条大橋西詰たもと二軒目。古い家が建っている。木造の店である。店先には竹箒や棕櫚の毛箒、草箒、長い柄のついたブラシも並んでいる。軒に比べる控えめに置かれた平台には、靴の大きさほどはあつた束子、亀の子束子、茶筌を大きくしたような束子、播粉木のような束子もある。大小種類もさまざまの刷毛もあれば、風呂の脱衣場の敷物まで、棕櫚や竹などの素材を使った品物が涼しげに並んでいる。

文政元年創業、今年で一七四年になるこの店に、「こんにちには」と言いながら、鴨居にぶらさがっている相撲の土俵を掃きならすのに使われるのと同じ箒の横をそろつと入ってゆくと、「いらつしやい」と言つて、ひとり板の間にすわっていたおばあさんが土間へ降り立ってきてくれた。結婚して間もなく四条から三条のこの場所に店を移してちょうど六十年。五代目八十二歳の内藤さんが棒状の束子を手にして使い方を教えてくれる。通りかかったふたり連れのコート姿のおばあさんが、棒の束子を手にとつて、「どんなときに使うの」と尋ねた。内藤さんは僕の方も気にしてくれながら、やっぱり手にとつて二、三度器を磨くまねをしては使

方を説明している。

二月の日曜日。夕暮れ時の三条通は人も車もまだまだいっぱいである。「うちは看板も広告も出してえしませんのです」と言つてにこにこしている内藤さんの店で、僕は箒を買つた。

朝。玄関の壁の釘に引つ掛けた箒を手にして眠い気分のまま思い切つて外へ出てみた。知らずとおなかに力が入る。右のお隣の半分から左のお隣の半分まで掃いてみよう。とは言つても木造文化住宅のほんの五、六歩くらいは軒先である。九月に越してきて今日まで、掃こうと思えば毎朝でも掃けたものを、三条で箒を買つてから、と決めておつたものだから、百五十日あまりも掃かずにおいた。夏の終わりから秋を過ぎて真冬まで、なんとがまん強い土や砂ほこりだったことよ。竹の柄の上の方を右から左から軽く据えて掃いてみた。んーんいい。棕櫚の毛先と軒先とが嫌味のない音を交えて作り出す弾力性もさる事ながら、長い間辛抱した土や砂ほこりたちの量感が程よく調和して、これはたまらない。

京・三条大橋たもと二軒目の内藤さんの棕櫚箒はい。

(宝塚市伊子志一四一四三一一五に住む山本謙吉)

ブッシュ大統領に手紙を!



半田たつ子

波

一九九〇年の年賀状に私はこう書いた。
「昭和」が姿を消し／東西を隔てたベルリンの／厚い壁が崩れ／激動の一九八〇年代は去りました／今、迎えた一九九〇年代／20世紀から21世紀に／虹の橋を架けることが／できるとはどうか?／今から始まる一九九〇年代／まっしろなページに／私たちは、何を／書き込んで行くのでしょうか?
まっしろなページに書き込んだものは?
夫が最初の危機をようやく乗り切った頃、イラクがクウェートに侵攻した。八月は戦争と

平和に向き合う月。が、この年はそれどころではなく秋を迎えた。今思う。まっしろなページに黒々と汚点をつけてしまった、と。

一九四一年、日米開戦のその日「こんなちっぽけな日本が、大金持ちのアメリカに勝つはずがないが」と問う私に「一国の為政者ともあろう者が、負けるとわかった戦いを始めるはずがない」と答えた教師。彼は無知だったのか、ウソを語ったのか? 今、教職にある人は、戦争をどう語っているのか? 憲法をふりかざすだけでは弱い。厭戦・非戦ではなく、反戦を語るには、教師自身に基礎的な知識が必要だ。戦争の展望を語るには、知恵を集めることが必要だ。

割箸を使わず、ゴミを減らし、牛乳パックを集める、庶民の善行は、湾内への原油流失で徒勞に期す。夫を奪われた私の痛みは決して癒えないのに、戦争は市民を巻き込んで、人命を木の葉のように散らす。なぜこの愚かな行為が生まれたのか、その理由が分からない。ければ、いつときも落ちついていられない。We 創刊の年の8・9月号に、私は「たった一人の反戦」を書いたけれど、私の反戦とは何をするのか、それが分かなければ、今日一日を過ごせない。昨日と同じ今日を送って

よいのだろうか。私のなすべきことは何?

湾岸戦争が私につきつけるものを求めて、時間が許すかぎりさまざまに集まりに出かけた。偏った情報の中で暮らしてきた私に、初めて中東がその姿を現した。アラビアン・ナイトを読みふけた時のときめき、チグリス・ユーフラテス・メソポタミア……西洋史を学んだ頃の憧れ、それらが懐しく蘇った。人間が、民族が、地域が、宗教が、文化が多面体となってまばゆく煌めき始めた。

半世紀前あざむかれた悔やしさを思う時、私がすべきことは、教師たちが戦争の実相を見抜いて、教室で語れるように、その手がかかりを提供することではないのか。ささやかな雑誌の生み出せる限りのページで。こう思い定めた時、「ウイ書房、Weの会」あてにアメリカからエメールアドレスが届いた。Wind Research (湾岸侵攻に反対する日米連絡会) である。この欄に、その全文を載せたいと思ったほど、うれしい便りだった。

「湾岸侵攻に疑問を持つ、もしくは反対する日本の方々へ」と便りは呼びかける。「イラク爆撃を先導しているアメリカの中から、私たちは『戦争に異議あり』を訴えます」「日本がこの戦争に反対していたり、疑問を持って

GOVERNMENT

THE PRESIDENT

President George Bush
The White House
1600 Pennsylvania Avenue
Washington, D. C., 20520

US SENATE

Senate Office Building
Washington, D.C., 20510

Sen. George Mitchell
(Democratic Leader)

Sen. Robert Dole
(Republican Leader)

DEPARTMENT OF STATE

Secretary James Baker
Department of State
2201 C. Street, NW
Washington, D.C., 20520

US HOUSE OF REPRESENTATIVES

House Office Building
Washington, D.C., 20515

Rep. Tom Foley
(Democratic Leader)

Rep. Robert Michel
(Republican Leader)

いたり、異議を述べたい方々に、その声をはっきり上げるようお願いしたいのです」と。
アメリカ市民の多数は、あまりにも盲目的にブッシュ大統領の戦争政策に従っている。
「2月4日のテレビに映し出されたイラクの鉄道橋爆破は、ベトナム戦争での北爆の再現としか見えない。発電所、水道施設、鉄道、道路は爆破しても、市民の生活する場所の爆撃は避けていると、アメリカ軍指導者たちは

宣言しているが、砂漠の中のイラク都市の水道を止め、食糧輸送を止めること自体、殺人行為そのものだ。それなのにアメリカのメディアはこういふことは触れない。アメリカ

カ人ジャーナリストには、他者の痛みへの視点が大きく欠けている。日本の国民の声も、日本人がこの戦争に無関心だという以外伝わってこない。それは日本国民もアメリカの戦争政策に黙って従うということなのか。反戦の声は上がっていないのか、それともメディアに全く無視されているのか。アメリカにいる私達には見当もつかない。

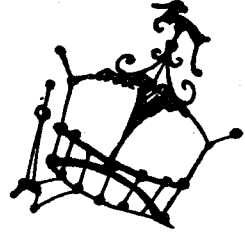
2月3日の新聞報道によると、ギャロップ調査で『アメリカ軍の生命を助けるためならば、核兵器使用を支持する』という回答が、3週間前の24%から45%にふえた。ついこの間まで核兵器反対の声が高かったのは、超大国ソ連の脅威があったためだ。こちらが使えば相手側からも核兵器が飛んでくる。この恐怖があったからだ。それがコロッと変わってしまったのは、自分たちの利益のためなら、他国民を犠牲にしても構わないと考えるから。アメリカが湾岸侵攻協力を執ように他国に迫るのは『戦争責任』の分担が狙いなのだ。日本は軍事費を肩代わりすることによって、第三世界侵略の積極的加担者になってはならない。また傍観することによって、消極的加害者になってもならない。今こそ『日本人は戦争の犠牲にならない。まただれをも犠牲に

しない』とはっきり宣言し、行動する責任を迫られているのではないか。「アメリカ政府や市民に向けて反戦反核の声をはっきり示してほしい」と。

「ベトナム戦争中、医療部隊に配属して日本の米軍基地内の病院で働いた経験のあるアメリカ人がこう言った。『日本で一番強く心に残ったのは、その基地のゲートまでデモに来た日本人に Why are you here? とやさしく、けれど何回も聞かれたことだ』と。そのことが、彼の世界観を変えた。アメリカ人が一人でも多く他者の立場に立って、世界を見られるようになるなら、日本人が発言する意義は大きい。

戦争はいけないなどという当たり前の意見にとどまらず、日本人の真剣な批判の声を、どんどんアメリカに送ってほしい。特になぜ日本国民は政府の戦争加担を阻んできたのかということが、アメリカにはほとんど伝わっていない。アメリカが要求しているような、湾岸侵攻協力はしない理由を、国民自身の声ではっきりと説明していただきたい。添えてあったリストから、いくつかをお知らせしよう。力が湧いてきた。皆さんブッシュ大統領に手紙を書こう！

Weに
なんでも
言おう
なんでも
聞こう



◆「19歳の日記」―40歳をすぎてなお、感うばかりの情ない生き方をしている、この生き方は、自分ひとりの責任で選びとってきたものだから、と自分に言いきかせている私は、金森土岐さんはずっと共感しながら、この欄を読み続けてきました。

十二月号の「新しい家庭科を創るために」は小・中・高とも「だまされないうために○○しよう」をはるかに超えて、挑戦的な情報との生き生きした取り組みを指摘している点、頼もしくうれしく思いました。

(東京・川名はつ子)

◆久々に情報図書室にまいりました。まっ先にWe冬増刊号が目に入りました。表紙に掲げられた主旨「自立した女と男を 人間らしい生活を 差別のない社会を 育み創り出す新

しい家庭科」を見て、中身がとっても楽しみでした。「テーマ」は大きいし、どのページもどのページも……一気に、最後まで読み通しました。

1 心に残った箇所はメモし、2 退館時には、カウンターへアンケートをし、3 メモはファイル式の自分史へファイルして反芻する、という方法で。とても楽しく実り多い時間を過ごしました。

○第一分科会の話し合いは、現職のハードな中で、さまざまなことをこなす苦心、悩み、先生方の日頃のご活躍の様子が目前につきつきに展がりました。当日の企画、運営のご苦心など、参加していない者の立場からもよく伝わりました。

これは、全国へ呼びかけている私どもの社会教育施設交流会にも大いに参考になりました。

○若竹委員長の言葉は、お人がらににじみ出て、成果や所以も理解できました。また、「私の教育異空間体験」も……。

○スクランブルトークは、一人声を発して笑ったり、ウンウンうなずいたり、とにかく、ナマの声、体験談、具体的に読み手の心をひきつけます。かくし味のうま味……

また、うま味を創造するまでのプロセスのダイゴ味まで、とっくり味わうことができました。

私は今、学習ボランティアとして、自分なりの「オリジナルお料理メニュー方式」によって楽しく過ごしています。オリジナル方式を使って活動できるのも、学習成果のたしかめの場、また自己評価による新しい課題発見のチャンスに恵まれるのも……条件の整備された国の施設が近くに設けられたおかげです。そして、すばらしい出会いによって、意欲誘発、交際の広まりと深まりが得られて……感謝の毎日です。かくし味のうま味の創出について、ダイゴ味、スパイスのきかせどころナドナド、ゆっくり語り合うことができたら……と思いました。

たくさんある刊行物の中からまっ先にWeを手にとり、他の方へもPRしたことをお伝えしたくて、Weは家庭科担任だけの問題ではなく、幅広く、大きな立場から考察できる唯一の雑誌なのです。(埼玉・小久保圭子)

◆二・三月号のWeを手にとり、溝上泰子先生の名を見つけ、帰宅したばかりの荷物を放り出して「波」を読みました。

20年前、教師になったばかりで、悩みつつ

うろろろしていた頃、新書判の小さな『生活人間学』に出会い、「これだっ！」と思ったのを思い出します。さっそく、そういう思いを書き送りましたところ、すぐ返事をいただきました。そして「私の大阪の仲間を紹介します」と楠崎るり子先生との出会いを作って下さいました。

豊中の中学校に楠崎先生をお訪ねしたことから、今の私につながるいろんな広がりを与えていただけたのです。「家庭科教育」時代の半田さんとの出会いをはじめ、キブツなど、共同体への興味から、家族社会学に導かれ、奈良の心境荘園にご一緒させていただいたり、若かった私に、たくさんの学ぶ機会を作っていたいただき、楠崎先生にはいくら感謝しても足りないくらいです。

半田さんもそうであったと書かれているように、お便りをさし上げて、驚くほど早くお返事をいただき、そこから今の私がスタートしたという想いがあり、深く感謝しています。そういう想いをお伝えすることもなく、今日まで、溝上先生の計報に、ただ「先生、ありがとうございます」と心でつぶやいている私です。

◆教員採用試験は、結果は不合格だったけれど

(堺・村上昌子)

ど、いい勉強になったと思います。同じ目的の人たちとわずかな時間だったけれど、話ができたととてもよかったです。家庭科は、二次試験の時は確か九人でした。一次の時は顔は合わせていても、話す機会もない人もいたのに、何だかずっと前からお互いに知り合っていたような雰囲気、こんな言い方も変ですが、楽しくもありました。全員合格できれば言うことなしですが、誰がなってもいいなあ、と本当に思わせてくれる方ばかりでした。初めて試験を受ける人、臨採や講師で経験を積んでいる人……といろいろでした。落ちてから、教職か、民間企業への就職かで、しばらくは悩みました。そんなにこだわらなくてもいいのに、と言う人もいて、私自身も揺れましたが、結局教職を選びました。

(横浜・星名 綾)

◆一月号の「性役割の固定化は揺らいだか」というカッターイテマの号、なかなかおもしろいと思って読みました。ただ一つだけカッかすること。63ページ「家族関係セミナー

に参加して」というレポートで「家庭だけの人間と、家庭と社会の両方で生きてきた人ではどちらが人間の幅がある豊かな人間なのかと問うてみる」ということば――。

思わずムツとして、これほど専業主婦をバカにしたことばがあるのだろうか、反論したくなるのですが、女同士の足の引っぱりあいはしたくないし、といろいろ考えて一日たちました。家庭ということばを仕事に置き換えて、男性に訴えたり、また勉強ということばに置き換えて、生徒に訴える必要はあるなあと感じています。

現在の日本では、家庭は社会ではないのですねえ。家庭にいて、子育てするのも立派な社会参加だと思おうのですが、アグネス論争を思い出してしまいました。

二・三月号はとてもおもしろかったです。男の人の家庭科に対する考え方がいろいろあって、考えさせられました。「秋のつどい」の記録、みな説得力のあるよいお話でした。聞きに行けなかったのが残念に思いました。その中の平井さんの「家事・育児を生徒にどう楽しく伝えられるか」というのが心にひびきました。

「プチタンファン」という育児雑誌で「育児

は3Kか?」という特集があつて、興味深く読んだのです。今の母親は、育児を楽しめな人が大勢いるんだなあ、母親の義務としてやっていると感心しました。

これからの家庭科は、女の義務としてではなく、男女一緒に楽しくやれるんだなあと思うと、いいですね。偏差値や内申でビリビリしているような時期に、人生を語り合えるような授業をするなんてステキですよ。思いっきりあそべる教科であつてほしいと思います。男の家庭科の先生にも期待します。

Weを読んでいて一つ気になることは、ときたま「意識が高い・低い」という表現が文章に出てくることです。意識がある・ない、強い・弱いという表現はあつても、高い・低いという表現は、人を見下すことにつながるような気がして、好きになれないのです。人それぞれものしきによって、高・低が逆転することだつてある、と思うのです。

(東京・伊藤紀子)

◆十二月号「マス・メディアは何処へ」、充実した内容で、多くのことを学ばせていただきました。家庭科男女必修のなかで「生活技術」を置かれたとき、「情報処理に関する知識……」なる一文もあり、また中学でも「情報」が大

きくとりあげられようとしている今、「情報」「情報処理」というと、すぐコンピュータの操作、データ処理などにイメージを結んでしまいがちのところ、今回のようにまともにとりあげて考えてみると、この分野でもやはり家庭科ならではのとりくみができる。いや、必要だと考えさせられる内容でした。

読み終わって「うーん」とうなつてしまふほど、「情報」をどう受けとるかという視点をきつちり学ばせる教科として、「家庭科」しかないのではないかと思われて、いよいよ「家庭科」という教科の深さと幅広さに思い至りました。「『一般的に間接情報は、事実の一部しか伝えていない』という認識を持たせると同時に、商業主義や権力と結びついた情報に気づくことができる力を身につけさせることが重要」という足立幸代さんの主張は、何にもまして重要な指摘だと同感しています。

また公庄れいさんは、「いま、なぜミニニコミ」の冒頭で、マスコミとミニニコミの独自性に触れ、最後にミニニコミの真価を述べてしめくくり、マスコミとミニニコミについて改めて考えてみるきっかけをつくつていただけました。

私は何年か前に、わが家であつてはいる商業新聞が、どなたかの指摘の通り、必ずしも家族の皆が全部読んでいたのではなくて、ただとつてはいる、おいてある要素の多いことに気づいて、それだけをながめて、子どもたちが大きくなることは、事実が一面的に伝えられたものを全面をとりちがえる危険性があると思ひ、読まずに置いておくだけでもよいから、並べて置きたいと思つて、婦人民主クラブの婦人民主新聞をとることにしました。

が、今回のように、まともにマス・メディアについて考えてみたことがなくて、「情報」が家庭科の内容の一部に導入されようとしている今、この号は正に時代の先取りであり、実によいタイミングだつたと思つています。一人でも多くの家庭科教師の方に読んでほしい号となりました。同時に、子どもを育てている現役の親にも読んでほしいですね。

他に、池田雅江さんの「おやつ」の授業で

の子どもたちのアンケートの内容、家族中で興味深く読みました。(長岡京・金森順子) ◆Weは私にとって元気の素。一月号の「なんでも言おう」の中で、誰かがおっしゃつていたように、重くクライ路線なので、落ちこんでいる時はあんまり読みたくないなあ……と思

うのですが、読み出すと元気が出るという不思議な本です。

一月号の「なんでも言おう」よかった。いつものにはない力があつた。アメリカの長谷川さんの話も興味深かったし、「波」を読んで涙が出たという諸橋さん、私も読みながら泣きました。とにかくよかったです。

冬増刊号も、フォーラムのことをついこないだのことのように思い出して読みました。ペラペラめくっているだけでも楽しいので。「踊り子」コースに行つた方々、元気かなあ。もつた笹舟カラカラになつたけど、まだあるよ、とか「石けんコンサート」よかつたなああと「石けん 石けん 愛してます」と歌つてみたり。子ども活動の写真の中に自分の姿を発見！うれしくなつてしまつたり。同室だつた星名綾さんに手紙を書くと、彼女も「フォーラムに参加すると、増刊号の生き生き度が違う」との返事。本当にフォーラムのあの雰囲気伝わってくるようです。

(福井・安川早苗)

◆一月号、フェミニズム論のバイブルとしてよく売れていますか？ 本誌を通らずして、90年代のフェミニズムは語れない。そういう号になつたと思います。(東京・諸橋泰樹)

▼編集室からあなたに▲

◆「新しい家庭科を創るために」の書き手を募ります

12月号にも書きましたが、その号のテーマに迫る内容で「新しい家庭科を創るために」を書いて下さる方、どうぞお申し出下さい。衣・食・住・保育・家庭経営という従来の家庭科の枠を広げるために、テーマに関して、家庭科はどういう切り込み方ができるか、という発想を大切にしたいのです。必ずしも授業で取り上げたものでなくとも、こういう授業も考えられるのではないか、という試案でも結構です。名乗り出て下されば、執筆要領をお知らせいたします。自薦他薦を問いません。5、6月号は決まっていますので、7月号からのテーマを再度お知らせします。

7月号―生と死を授業で 8・9月号―ひとと生殖 夏増刊号―高齢化社会、そのデザイン 10月号―売買春の構図 11月号―アジアの中の私たち 12月号―地球再生へ向けて 1月号―揺らぐ家庭 2・3月号―男女共生の道を拓く。

◆We 10周年記念セル

いよいよWeも10年です。どんな楽しい、意味のあるイベントをしようかと、知恵を絞っています。その第1弾として4月から8月末日まで、単行本を3冊以上ご注文の方は、定価の1割引きとさせていただきます。はがきでご注文下されば、振替用紙を同封して本をお送りしますので、この期間中をご利用下さい。また、秋に10周年記念イベントを開催する予定です。どうぞ楽しいアイデアをお寄せ下さい。またイベント実行委員に名乗り出して下さい。

◆We劇団員募集中！

戦争の愚かしさと残酷性を、身体で感じ表現するために、朗読劇をフォーラムでやってみませんか？ ご覧になつた方もあるでしょう。評価高い地人会の「この子たちの夏——一九四五・ヒロシマナガサキ」です。6名ほど集まれば、フォーラムで上演できます。朗読の好きな方、ウイ書房にお電話下さい。人数が集まらないと、上演計画は潰れます。湾岸戦争に反対する一つの行動が消えるのは残念です。

わたくしから
あなたに



竹見さんから左のメッセージが届きました。
「反戦リボン」を長くつなげるために、
まずあなたに届けましょう。(編集部)
◆これは文字による「反戦リボン」です。

もし、あなたが戦争反対なら、左の欄にひと
言メッセージを書き加えて隣りの人に手渡
してください(もちろん郵送でもいいし、フ
ックスでもかまいません)。ひとりだけでな
く、もつとたくさんの方の手にメッセージを
伝えたいと思ったら、コピーをとって、た
くさんの隣りの人に手渡ししてください。手から
手へ「戦争反対!」の声を伝えていき、やが
て反戦のリボンで地球をおおってしまいまし
よう。

この反戦リボンは、特に集約はしません。
できるだけ「ひとり歩き」してほしいと思っ
ています。ですから、次々つなげて長くくな

ったら、戦争当事国の大使館や日本政府に届
けてもいいし、国連・安保理にアピールとし
て送ってもいいと思います。受け取ったあな
たから、また新たな発想をつけ加えて、次の
人に送って下さい。

〈私から、隣りのあなたへメッセージ〉
「戦争はイヤだ!」

ついにペルシャ湾岸で戦争の火ぶたが切つ
て落とされました。テレビの画像を通して全
世界が見守る中、スポーツの試合でも始まる
かのように、秒読みをしながらの戦争突入で
した。こんなことがかつてあったでしょうか。

戦争は国家と国家のいがみ合いであり、大
量の殺戮ゲームです。どんな大義名分があっ
ても、国家による人殺しを容認するわけには
いきません。恐れていたように、いったん火
がついた戦場は、燎原を焼き尽くすかのよう
に、中東全域に広がる気配です。使われる武
器は、質量ともにとどまるところを知らず、
まるで新兵器の性能比べをしているようで
す。このまま行けば、化学兵器、あるいは核
兵器の使用にも至りかねません。

こんな時、私たちの政府は多国籍軍に多額
の資金を送り、中東での殺戮に加担しようと
しています。これは私たち納税者である国民

を殺戮ゲームに巻き込むことで、断固反対で
す。また、政府は難民救援の名のもとに自衛
隊機の派遣を画策しています。この問題は先
般国会で議論済みで「平和憲法を持つ私たち
は、軍隊である自衛隊を派遣するわけにいか
ない」とした国民の意志を踏み躡るものです。

もし、自衛隊派遣の理由が「危険な戦闘地
域に民間機を送ることができない」というこ
となら、臨時に政府専用機を仕立てるといい
と思います。そしてそこに海部首相をはじめ
とする政府高官がみずから乗り込み、休戦旗
をかかげながら飛ぶという人道的飛行を試み
てはどうでしょうか。昨今は民間人さえ、決
死の宇宙飛行に飛び立つ時代です。政府高官
が身を挺して平和画策に動くなら、多くの国
民が支持し、喜んで後に続くでしょう。国際
的にも面目が保てるだろうと思います。

いずれにしろ、目下の急務は即時戦争の停
止です。そうすれば、中東の人々も難民化せ
ずにすみます。戦争即時終結のために、まず
私から「戦争反対!」のメッセージを発信し
ます。
91・1・20 (東京・竹見智恵子)

◆ニューヨークにいるMASAKOさんから
のお手紙がヒントになって、「NO WAR」

と書き込んだ黄色いリボンをたくさん作りました。反戦、非戦、平和の願いをこめて。このリボンをお店「モンペハウス」の洋服にも着け、私も動くアピールとしてリボンをつけています。「モンペハウス」に行くと、知らない間にリボンをつけられていると、不思議がられています。(横浜・内山裕子)

◆長野でお百姓をして三年、いつのころからか、もっと年間を通じて野菜づくりをしたいとの希望が強くなりました。八千穂では半年しかできないのです。出荷はせいぜい四五カ月、作れる野菜も限られます。厳寒期には、自分の家の野菜さえ買わなくてはなりません。これではつまらない、生活できません。そこで山梨県西八代郡へ移転しました。作る時期、品種、土質等が全く違って来るので、不安も大きく、数年は試行錯誤となるでしょうが、しっかりやっていきたいと思います。

たのですが、ア然。具体策が何一つない。でも十二月二十日がメ切というので、意見を書いて送ったのですが、その後の記事でまた、ビックリ!なんと、年内に策定されてしまうというのです。意見のメ切から策定まで一週間足らず。結局、県民の意見を聞くなんてポーズなんです。バカにされているんですね。あきれました。

もう一つ。山梨日日新聞の「お誕生」の欄母親の名がないんですよ。これはひどいと早速TEL。相手は女性記者で、私の話をもっともだと聞いてくれたのだが「これまで社内では、話題になったこともない。上司に伝える」とのこと。その後梨のつぶて、紙面にも変化なし。そこで今度は手紙。「どこの家でも記念にとっておく。その子の人生の始まりに母親の名がない……女の腹は借りものか」と。なんの返事もなし。

婦人会館フェスティバルがあった、上野千鶴子さんの話を聞きました。話の中に、フェミニズムの風は西から吹いてくるというくだりがあり、確かWeの第一回の合宿だったと思うのですが、西成高校の先生がほんとうに力強かったの思い出し、山梨がくらしづらいことを述べたあとで「関西の女性の元気のヒ

ミソ」を質問しました。

彼女は、なりふりかまわぬことを一因に挙げていましたが「でも、どこも同じ。どこも保守的、地縁、血縁、めげそうになりそう。どこも元気の始まりは、ヨソ者とUターン組。あなたが核になってがんばって!!」とアジラれてしまいました。ヨソ者とUターン組(うちのつれあい)のわれらは、ここの核になれるのでしょうか!?

上野さんのお話では「意識の啓蒙のときはすでに終わり。今は意思決定の場にどんだん女が入っていくべき時。男女がこれほど同質化してきたのに、それを支える職場、家庭等の下部構造が古いまま」といったところが、印象に残りました。また「男の働き方や戦争にノーを言っていくこと。そこへ入っていくことが平等ではない」とも。湾岸で戦争が始まった日でした。(山梨・仁ノ平尚子)

あなたの地域では、どんな反戦行動がありますか。お知らせ下さい。知恵をしぼって、さまざまなタイプの行動を生み出し、伝え合いましょう。また学校では、生徒にどんなふうに戦争を語っているのでしょうか? 生徒から出る意見は? 学校の様子もぜひお寄せ下さい。(編集部)

Weの 読者会だより



〈We城北の会〉

◆二月二日(土)の一品ずつ持ち寄りの新年会は、手作りの料理が少なく、忙しく働いている参加者のこのごろを反映していました。

それでも、初参加の吉田さん母子(川名がハングル語講座で知り合った大学生の吉田崇さんのお母さんとお姉さん)が、中国語専攻の崇さんの中国人の友人たちをお宅に招き、また在留資格のことで何度も入管窓口同行するなど、家族ぐるみで親身のお世話をなさっている話から〈国際交流のあり方実際編〉に発展しました。

また、久しぶりに登場した長谷川信子さんは、区主催の研修会等で、指導主事ら「上」の人たちから、旧来の教材でなく、男女共に興味をもって取り組めるような内容を開発して下さい、とハッパをかけられる始末で、We

が10年も前から言いづけてきたことが、今実現しようとしているさまが伝えられ、Weの読者であった長谷川さんに出番がやってきたと、張り切っていました。詳しくは、長谷川さん編集で三月初めに「城北の会通信」を出します。

公約したWe各記事へのコメント。城北の会で、読んで下さった方たちが「スイスイッとあんなふうに書いていいね」とほめてくれましたが、実は本人は青息吐息。たったひとつとのコメントでも、「書く」となると、一度ならず二度は読み、ちょっとは考えますから、実際に手間がかかり、届いてすぐさーっと読んだものを、また一か月後くらいに読み返しなから書くというようになって、毎晩二時三時。本業のほうがおろそかになってしまいます。……という苦労話もして「だから、皆さん一つ二つでもいいから、何か感じることがあったら、ウイ書房に感想を寄せるようにして、私が全編について書かなくてもすむようにしてもらえませんか」と、早くも弱音を吐いてしまいました。(川名はつ子)

〈We兵庫の会〉

◆一月十三日、湾岸の緊張関係が伝えられる中で例会を持ちました。テーマは「生む、生

まぬはそれぞれの選択、1・57時代をどう生きる」というもの。26名参加で、初春からなかなかの盛り上がりでした。

レポーターは大阪の高校で社会科を担当している山下・堀川さん。生む選択をして二人目の育児中の堀川さんは育児をとると長男が保育所を退所させられるという事態に、おつれあいの山下さんと二人で「豊かな保育行政を求める宝塚市民の会」を始めました。行政の無責任な対応に「恵まれた人だけが生める社会を変えていきたい」と強調。一方生まぬ選択をしている緒方・諫山さんは、一日一度は子供を持つ持たないを自問自答しているという思いを一枚の紙にまとめてきてくれました。諫山さんは「1・57ショックは愚かだ。働きながら結婚して子どもを生み育てる時、どれだけの困難が待ちうけているか女性は知っている。家族という共同体に女性を押し込み、社会の再生産の責任を一方的に押しつけることはできない」と。

活発な話し合いは「働くこと」をめぐっての論争に発展し、時間切れとなりました。二次会で「関西春のゼミナール」の話し合い。期日は五月の連休頃、二月のWe大阪の会の後検討することになりました。(入江一恵)

泉

この頁はあなたと私の情報交換の場
小さなスペースですが、ご利用ください。

◆ミズ・オーブンスクール

受講生募集のお知らせ

「子育てと女の自立」く愉快なトークから自己発見を！

・講師 森本邦子

・日時 三月二十五日／四月八・二十二日

五月六・二十日／六月三・十七日

月曜日・a.m.十一時～十二時半

・受講料 一回二千五百円 保育室あり

・問合せ ミズ・オーブンスクール事務局

〒107 東京都港区北青山三ノ八ノ十五

ミズ・クレヨンハウス内 ☎03-3406-6492

◆アースデイキャンペーン用ゴミ袋を販売します。

アースデイ前後の一週間に、みなさんの身近な海、川、山、町などできる所で地球の大掃除に参加しませんか。地球が平和で美しい星になるようにの思いをこめたデザインのゴミ袋とゴミ拾いの詳しい方法や各地のイベントを載せたパンフレットを一セット千円で販売します。

・問合せ ハッピーアースデイ事務局

〒121 足立区南花畑二ノ七ノ六ノ四〇三

☎03-3860-3873

◆「夫婦同氏・別氏の選択を可能とする民法等の改正を求める請願書」を集めています。

・問合せ 「結婚改正を考える会」 古川文月

〒661 尼崎市武庫之荘五ノ一ノ一ノ二〇一

◆「女子学生のための就職ガイドセミナー」
ホンネの情報と実際に働いている先輩たちの声をお届けします。

・第一日 三月二十六日(火) p.m.一時より

「自分らしく生きるための就職」 講師／

埼玉短期大学教授 深尾凱子

シンポジウム 「こんな女性を求めています」その他。

・第二日 三月二十七日

p.m.二時より

トーク&トーク「大公開／私の就職体験談」その他、参加費無料

・会場 神奈川県立婦人総合センター

〒261 藤沢市江の島一ノ十一ノ一

・申し込み 婦人総合センター生涯学習部
☎0466-27-2111

◆本紹介

「女たちが語る―「不妊」

半年がかりで十一人の女たちが訳した本。

不妊治療を受けた世界の女たちの体験集です

・レナーテ・クライン編／「フィンレージの

会」訳 四六判／四七二頁

定価 二千八百円／晶文社発行

◆メモリアル・キルト・ジャパン in 松本

「エイズで亡くなった人にキルトを捧げよう」

・エイズで亡くなった人や赤ちゃんの為に恋人・友人・家族やエイズにかかった本人が友

に支えられベッドで縫ったものなどを展示し

できるだけ多くの人の目にふれ心につれるこ

とにより、一人ひとりの生命の貴重さとエイ

ズという病気に対する偏見をとり除く正しい

知識と理解を深める集いです。(チラシより)

・日時 五月四・五・六日 入場料三百円

・場所 南松本駅「なんなん広場」

・問合せ ギャラリー KURA 笠井 ☎0263-26

-7385 がらくた座 木島 ☎0263-

26-3601



十字路



〈千葉〉県弁護士会の有志134人 終結求めて
緊急アピール(朝日1/30)

県弁護士会(渡辺真次会長)の有志百三十四人が二十九日、湾岸戦争終結の要求と自衛隊機派遣に反対する緊急アピールを発表した。アピールは「平和憲法をもつ日本が今こそ戦争終結、和平実現のため積極的な役割を果たすべきだ」としたうえで、自衛隊機の派遣は違法、違憲で、資金協力は、日本を戦争に参加させようとするものにほかならないとし、政府に対し直ちにこれを中止することを求めている。

(木田直子)

〈神奈川〉反戦サンデー各地で(読売2/4)
相模原市で三日、湾岸戦争などに反対、抗議する緊急デモ行進が市民団体によって行なわれた。デモをしたのは、同市内にある米軍相模総合補給廠を監視する市民グループの「相模補給廠監視団」のメンバー約五十人。また湾岸戦争に反対する市民グループ「戦争に反対する無数の人々・かながわ」や主婦らが三日、横浜駅西口に集まり、日本の戦争協力に抗議しようと、「ダイ・イン」などの抗議行動を行った。

(青木昭美)

〈埼玉〉北本市議会 即時停戦求め決議(毎日2/8)

北本市議会は六日開いた臨時議会で「湾岸戦争の即時停戦と早期平和解決の努力を政府に求める決議」案を全会一致で可決した。

広がるハガキ作戦(毎日2/8)

所沢、狭山、入間市の主婦を中心とした市民グループ「湾岸戦争をみて何もしないではない、湾岸戦争への反戦と和平解決を求める」「はがき作戦」を展開することになった。鶴ヶ島町でも市民グループが同様のはがき作戦を始めており、各地で広がりを。 (長谷川宏)

〈東京〉中止求め東京地裁に仮処分申請(毎日2/13)

湾岸戦争の貢献策として、政府が避難民輸送のため自衛隊機を派遣するのは憲法違反と、首都圏の市民運動家ら百九十八人が十二日、海部首相を相手に、派遣差し止めを求める仮処分を東京地裁に申請した。(杉山百合子)

〈山梨〉湾岸戦争 生きた教材に(山梨日日1/31)

泥沼化する湾岸戦争を「平和教育」の教材

に取り上げる小・中学校が相次いでいる。東八代郡石和町の富士見小では、二十九日に五年三組が道徳の時間を使い、父母にも参観を呼び掛けて授業を実施。新聞で紹介された「私たちを忘れないで」というクウェートの子供からの手紙を題材に、戦争に巻き込まれた子供たちのことを考え、意見を出し合った。

(仁ノ平尚子)

〈長野〉高校生「無関心ではいけない」(信濃毎日1/21)

イラクと多国籍軍との湾岸戦争が始まり、県下の高校でも、社会科担当の教諭を中心にその情勢や問題の背景などを授業やホームルームで取り上げているところが多い。生徒の関心は高く、休み時間にイラクやクウェートの歴史や今後の情勢の見通しなどについて研究室へ質問にくる生徒や、視聴覚教室のテレビを熱心に見つめる生徒の姿があった。

(宮崎春美)

〈愛知〉一万人が抗議のデモ(朝日2/12)
自衛隊C130H輸送機の中東派遣などに反対して、労組員ら約一万人(主催者発表)が十一日、同機を配備する航空自衛隊小牧基地(小

牧市) 周辺で、集会とデモ行進した。

「反戦、私も訴えます」名古屋で女性らがデモ (朝日 2/11)

「戦争に反対したいのだけど、どんな行動をしていいかわからなかった」といった女性らを中心に、湾岸戦争反対の二つのデモ行進が十日、名古屋市の中心部であった。十代から八十代までの女性を中心に、参加者は反戦を折る花を手にし、思い思いのプラカードやゼッケン、横断幕で即時停戦を訴えながら雨の中を歩いた。

〔福井〕「湾岸」への医療団派遣に反対 (日刊福井 2/13)

県医療労働組合連合会、県労働組合総連合、自衛隊海外派兵阻止県連絡会、医療と福祉を守る県民の会は十二日、県に対して、湾岸戦争の平和解決を求め、医療団の派遣問題に絡んで、「県からは一人の医師・看護婦も医療団として中東へ派遣しないこと」などを求めた。

(上山悦子)

〔和歌山〕新宮で主婦ら三十人が集会 (毎日 1/27)



「との願いを込めた集会が二十六日、新宮市の市役所前で開かれ、主婦ら約三十人が戦争反対を訴えた。この日、廃品回収して集めたお金は難民救援資金としてユニセフへ送るほか、参加者が布切れに書き込んだ反戦のメッセージを国連へ送る予定。

(雑賀寛子)

〔大阪〕平和の願い はがきに載せて (朝日 1/25)

「無名の一市民でも奇跡を起こせるはず」関西の学生らが米国のブッシュ、イラクのフセイン兩大統領と海部首相あてに戦争の即時中止を求める「はがき作戦」を続けている。開戦前、湾岸危機の平和解決を訴え始めた時には、全国から中学、高校生らを中心に賛同者が続々と名乗り出ており、「戦争だけはいやだという、だれもが抱く切実な思いを結集させたい」と学生らは話している。問合せは福田さん (06-2626) へ。(大江美香子・黒田智一)

〔福岡〕「湾岸授業」報告を福岡県教委小中学校に要求 (毎日 2/11)

福岡県教委が「湾岸戦争を取り上げた授業」について、各小中学校現場の実態調査を始めた。「公正、中立性などに問題があると思われる

事例」は、資料などを早急に送るよう各教育事務所に求めている。福教組は「平和教育に対する挑戦だ」と反発している。(安部宣人)

〔長崎〕被災協 即時停戦など求め決議 (朝日 2/3)

長崎原爆被災協 (山口仙二会長) は二日、理事会を開き、長期化の様相を見せる湾岸戦争が、再び原爆投下につながる恐れがあると

十字路

して、米国とイラクの両国大統領に対して即時停戦を訴え、日本政府の自衛隊機派遣と九十億ドルの追加支援策の撤回を求める決議を採択した。

(中野志保)

〔鹿児島〕県内の主婦 新聞に意見広告 (朝日 2/6)

呼びかけ人は国分市清水の主婦横山富美子さんら三人。新聞に載った広告では、分銅に見立てた、たぐさんの会議と、泣いている一人の女の子がそれぞれ天びんに乗ったイラストを描いて「一人の人間の重さは千回の話し合いより重い」ことを表現した。まだ、アメリカ、イラク両国の母親たちに停戦の声を高めてもらうよう手紙で呼びかけようと訴えている。

(横山雅子)



れた。開会で大場昭寿委員長は「記念すべき集会在、湾岸戦争という最悪の事態の中で開催され、まさに平和と人権の危機に直面した集会だ」と述べ、「改めて『教え子を再び戦場に送るな』という不戦の決意に立ち、平和憲法を教育実践に息づかせなければならない」と訴え、26日、湾岸戦争の即時停戦アピールを採択して閉会した。(1.23・26日付 読売、朝日)

★中教審「高校教育改革」で中間報告
本誌56頁、「情報」参照。

★大学教育、自由・多様に

大学改革の方策などを検討してきた「大学審議会」(会長・石川忠雄慶応義塾塾長)は8日、大学が自由で多様な教育を行うため、カリキュラムなどをしばってきた大学設置基準を可能な限り緩和(大綱化)するとの改善提言と、併せて短大や高専教育の自由化、独立した学位授与機関の創設なども井上文相に答申した。同省はこれを受けて学校教育法や省令改正に着手、順次実施に移す方針だ。(2.9日付 朝日)

★女性の離婚後6か月再婚禁止は差別？

女性だけに再婚禁止期間(6か月)を定めた民法733条は女性への差別で憲法違反だとして、広島県竹原市の公務員夫婦が国に損害賠償を求めた訴訟の判決が28日、広島地裁民事四部であった。山下和明裁判長は「733条は、父子関係の確定を容易にするのが立法趣旨で、合理性がないとはいえない」とし、賠償請求を棄却した。

男女雇用機会均等法の制定など男女差別の解消が進む中、旧憲法下で定められた規定について事実上合憲とした。(1.28日付読売)

★「夫婦別姓」等本格討議へ

法相の諮問機関である法制審議会の民法部会身分法小委員会(加藤一郎小委員長)は29日、4年ぶりに審議を再開し、民法の婚姻の規定の見直しに入った。①男女平等

の立場から要求がある夫婦別姓を認めるか②女性についてだけ定められた離婚6か月間の再婚禁止期間をなくすか③夫婦関係を壊す原因を作った側(有責配偶者)からの離婚請求を認めるか、などが焦点となる。

見直しの対象となるのは、民法第四編「親族」の第二章「婚姻」(731条—771条)の全般。女性の社会進出、夫婦関係や離婚に対する考え方の変化などが著しいことから、それに応じて民法の規定を改めるかどうかを検討する。夫婦の姓については、民法750条で「夫又は妻の氏を称する」と同姓を義務付けている。これに対し、「姓は人格の一部だ」として結婚後も仕事で旧姓を使えるよう求める女性の大学教授が訴訟を起こしたり、東京弁護士会が、希望者に夫婦別姓を認めるよう意見書を発表した。(1.30日付 朝日)

★美浜原発事故

福井県三方郡美浜町の関西電力美浜原発2号機(加圧水型軽水炉、出力50万キロワット)で、9日午後、細管破裂を起こしたとみられる蒸気発生器から、一次冷却水が発電タービンを回す二次冷却水系に大量に流出した事故は、同県原子力安全対策課の10日の調べで、事故の約1時間前、2次冷却水の放射能レベルがわずかに上がる予兆のあったことがわかった。この異常の解析中に一次冷却水の大量流出が起こったという。大気中及び海に放出された放射能は美浜原発2号機が通常運転で大気中に放出する年間量の8%足らずで、同課は、環境への影響はない、としている。(2.11日付朝日)

総理府の「原子力に関する世論調査」によると、将来、原子力発電に代わるエネルギー源に決定的なものがない、と約6割の人が考えている一方で、9割を超える人が原発に何らかの不安や心配を抱えており、ソ連・チェルノブイリ原発事故後初の調査である前回('88年)に比べても、不安感が4.3ポイント増えているという。('90.12.24 読売)

★湾岸戦争勃発

昨年8月、イラク軍のクウェート侵攻に端を発した中東紛争は、11月29日、国連安保理が、イラクに対して「武力容認」の決議を採択、撤退期限を'91年1月15日とし折衝がつづいた。15日、デクエヤル国連事務総長がフセイン大統領に対し全面撤退を求める声明を発表するが、事体は好転せず、17日、米軍主導の多国籍軍がイラク、クウェートへの攻撃を開始した。

多国籍軍による空爆に対し、イラクはイスラエル、サウジアラビアにミサイルで攻撃、戦況は、アラブ・イスラエル対決を巻き込む「中東戦争」に拡大しかねない局面をあらわした。2月18日には、イラク外相とゴルバチョフソ連大統領が会談、新たな和平案の提案もあったが功を奏せず、地上戦に突入。28日になってイラクは安保理決議受諾を了承、停戦の協議に入った。

また、この戦禍で、ペルシャ湾クウェート沖に原油が流出し、深刻な環境汚染も懸念されている。(1.26日付)

31日米国防総省によると、女性兵士1名が行方不明となり捕虜となった可能性があるとの発表。湾岸戦争の派遣米軍は、1月下旬で50万人を超え、女性兵士は28000人とされる。これら女性兵士は軍規則などで戦闘の正面に出ることはないと言われていたが、今回、前線で行方不明となったことは米国内に与えたショックは大きいという。(2.2日付)

17日開戦後、テレビ報道も各局、特別番組に切りかえ国際的なネットワークを背景に次々に登場するハイテク兵器や、爆撃から帰ったパイロットへのインタビューなど、戦況の刻々の変化をテレビカメラがお茶の間に映し出し、前代未聞の「見える戦争」となった。(1.17～3.1日付 各紙より)

★自衛隊機派遣と追加資金援助

海部首相は1月17日、首相官邸で緊急に記者会見し、米国などの武力行使に対し、「確固たる支持」を表明する談話を発表し日本による湾岸戦争支援の具体策として難

民移送のため「必要に応じて自衛隊輸送機の使用も検討する」と公式に表明。多国籍軍に対する追加資金援助の用途については、武器や弾薬購入に使われる可能性も否定せず。(1.17日付)

22日、首相は自衛隊輸送機の派遣に踏み切る意向を固め、その法的根拠として自衛隊法100条の5の施行令改正で可能と判断。また、政府は多国籍軍に対する資金支援が90億ドル(約1兆2千億円)で決着する見通しを明らかにし、財源については、石油関係諸税のほか、法人税、たばこ税などでまかなうとの方針を明らかにしたが、戦費を事実上分担することで、国会で激しい論戦が予想される。(1.22日付 各紙より)

★ソ連国内にも戦火

ソ連共和国の沿バルト・リトアニア共和国、ラトビア共和国の独立運動に対して、1月13日以来ソ連軍が武力弾圧を加え、死傷者を出す事態に発展している中、ソ連からの離脱・独立の是非を巡って9日投票が行われたリトアニア共和国の世論調査は即日開票され、「独立賛成」が、90.5%の圧倒的多数を占めた。この結果は法的拘束力を持たないものの、ラトビアなど独立を志向する共和国を大いに力づける結果になり、連邦制の存続に向けて来月17日に全国民投票を予定しているゴルバチョフ政権は、苦しい対応を迫られることになった。(2.11日付 読売)

★教研集会でも停戦アピール

日教組の第40次教育研究全国集会在23日から東京を中心に4日間の日程で開幕(参加者、約8000人日教組調べ)。分科会では昨年7月、兵庫県で起こった「校門死傷事件」をテーマに同校教師がまとめたリポートが提出されるほか、校則や体罰、いじめなど子供の人権に関するものや、今年度の入学式から義務化された「日の丸、君が代」、'92年度から始まる新学習指導要領、学校5日制問題など、教育現場が直面している幅広いテーマについての報告、討論が行わ

家庭科男女とも必修!

共学の授業づくりにWeが贈る

家庭科新時代

—Weからの提案—

小・中・高・珠玉の実践31編

男女共修の家庭科の授業で、
生活を大切にするあなたの座右に

半田たつ子編
2060円 千310円



●男女で学ぶ新しい家庭科 —京都における歩みと実践—

森 幸枝
1339円 千260円

●消費者教育の創造

宮坂広作
2060円 千260円

●教室のミニ舞台から 児玉澄子 —こぼれ話20—

1350円 千260円

●子ども発、大人へ —いま生まれる新しい関係—

「学習の主人公」& 小沢牧子
1339円 千260円

●若いのちの像 児玉澄子 —私のカウンセリング入門—

1339円 千260円

●らくだが翔んだ 平井雷太 —教育の常識の非常識—

1236円 千260円

●子どもって不思議 長谷川孝 —学ぶことは生きること—

1339円 千260円

<羽生槇子詩集>

●木、鳥、娘たちとわたし 1030円 千260円

●人間って不思議 半田たつ子 —一つの視角—

1545円 千310円

●絵 III 1030円 千260円

●私塾霞国語教室風景 もしかしたらちいさなじゅくはユートピア

武田秀夫
1751円 千260円

●夢運び屋 1545円 千260円

最新刊

●花・野菜詩集 1648円 千260円

ご注文は最寄りの書店に(地方小扱)。直接お申込みの場合は送料をお添えの上、振替で

ウイ書房

東京都調布市西つつじヶ丘2の25の14
電話 3326-1380 振替 東京 6-59867